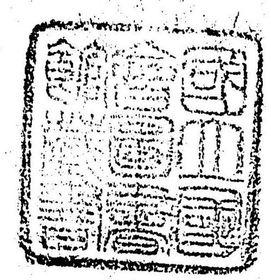
中越史談會校訂

越史略

德明堂藏版

291.42
E92
T



219431

温故

29142
F92
1
2502 4
219631

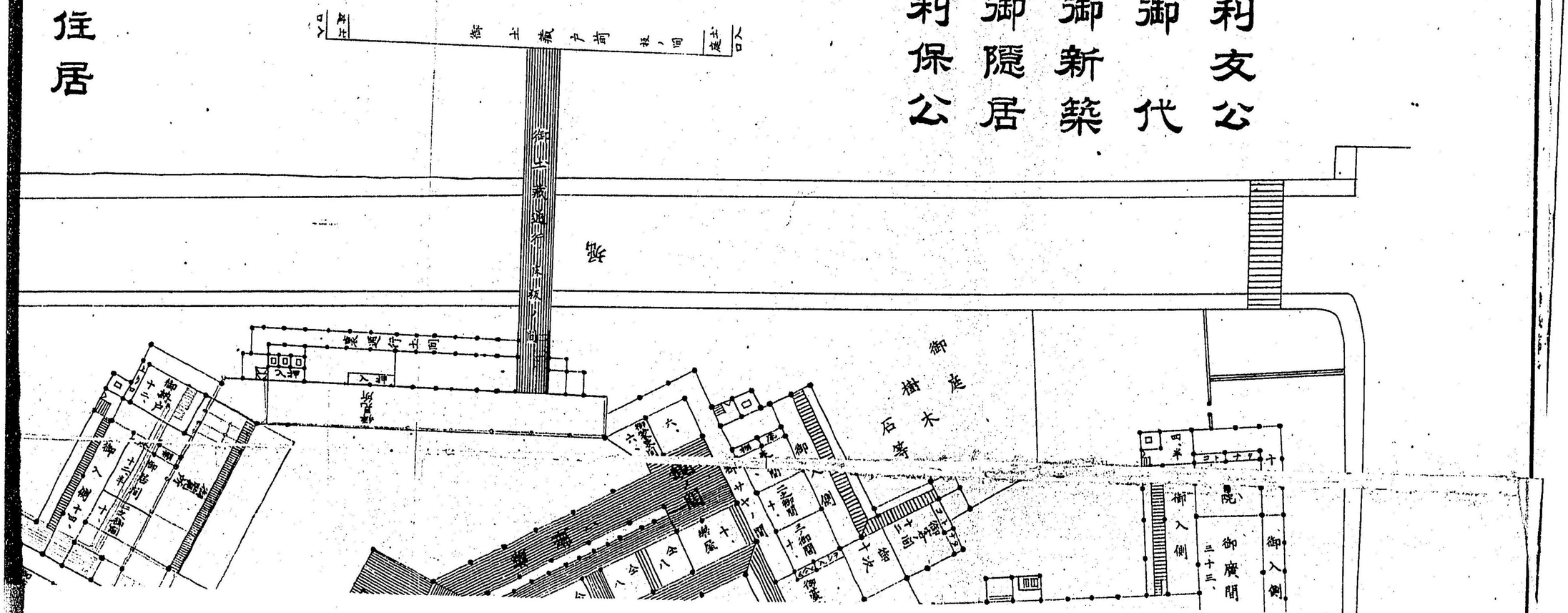
知
新

甲辰十月

陰春壽

御住居

利友公
御代
御新築
御隱居
利保公

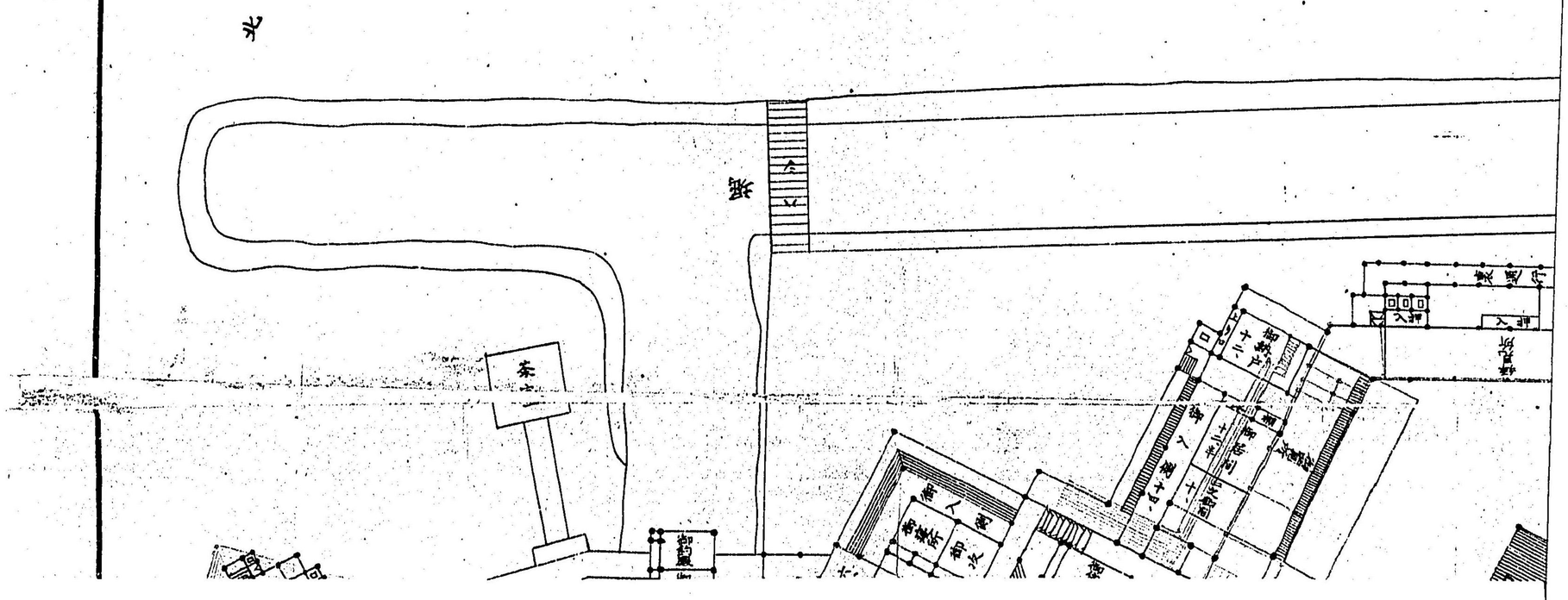


御住居

嘉永二酉年八月

御引移

千歳御殿ト称ス


北
道
茶
御
表
入
口
入
入
御
表
入
入
入

明地
中庭
明地
中庭
御玄關
御入側
御廣間
三十三、
頭留
二十八、
二十七、
御茶間番
休息所
十五、
番人
御玄關
御入側
御裏者、詰所
下場
堀

安井八郎氏藏

千歳御殿（口繪説明）

千歳御殿は富山舊藩主前田利保公が御隠居の後、江戸から富山へ帰られ、本丸に接續する東の出丸、即ち今の櫻木町に地を撰び嘉永元年工事に着手され、翌年竣功八月に利保公御移住となつた、御作事總奉行は二千石取りの家老村井人で、作事奉行は河村右膳、石黒復磨の兩人、多くの町大工を使つた中に彼の大岩の仁王門を彫つた名高い中村乙次などいふ彫刻師もゐたとのことである、材木は四ヶ所の御用山より伐出したる外に、上方其他の各地方からも澤山御取寄せになつたさうだ、其工費は今日の金額に換算して約六拾万圓との事で、何分珍らしい大工事の上に利保公の御住居であれば、大工一同は非常の奮發で、献身的に腕前を競ふたものである、然るに寛政二年二月廿九日の大火は、富山の町の殆んど全部を燒拂ひ、翌三十日の曉天には惜しや此善盡し美盡したる御殿をも空しく灰燼とは化して仕舞つた、今圖に就て説明を試みんに、先つ西側の堀の南端に在るのが埋み御門と稱するので、其處には番所の設けがある、正面の御式台は御類門又は直參大名の外出入のできないので、君公は本件の場合に之れより御出入なさるが、常には御休憩御式台から御出入りに相成る、御式台を上ると正面の御槍床には御槍、十文字御槍、御長刀を置いてある、休憩所には三組の御先手廻りが替る〳〵に御番をしてゐて、御式台の間へ出張るには正面へ一列にならぶのである、御式台左方の頭溜といふのは、臨時に何か御慶賀のあるときに、乘馬士頭か

ら同じく足輕頭までが是れへ溜るので、斯かる場合に君公は御書院へお出になる、諸頭分は溜から廣間へ罷出で、御目見をするのだ、君公は臨時御慶賀の場合の外、或は御書院で御膳手の御用を御聽きになることもある、御書院の天井は極彩色の立派なものであつたさうだ、御内玄關は御殿に御用ある諸士が常に出入する所で、坊主溜には例の頭を剃つて羽織を着た無袴の御坊主が詰め、番人溜には袴羽織の足輕が詰めてゐて、坊主は殿内の御用を勤め、足輕は外の御用を勤める、内玄關の北の入口は、日常御殿へ勤める諸士などが常に出入する所である、こゝに御次坊主溜とあるは御奥勤めの坊主の室、逢對間は役人が役筋について互ひに面談をする應接室で、御膳所は來客などのある場合に用ふる所、逢對の間の手前に在る吟味所には、御次御近習が詰めてゐて金銀に關する調べをする所、筆役などはこゝに居る、之れに相對する御用部屋は、吟味所と互ひに關係のある所で、御近習頭は晝夜共に詰めてゐる、其向ふの御台子一名御茶の間には大きな爐が切つてあつて、君公用の大きな湯釜が掛つてゐる、之れには御近習、御次近習等、即ち肩衣のある者及肩衣をかげぬ者も居る所である、御用部屋の前の廣間の上には二階があつて、殿内の諸士の狹箱を置き、こゝで衣服などを着替へるため、狹箱の裡には上下はもとより火事裝束まで一通り入れて置かねばならなかつた、此二階の下の廣間は奥勤めの諸士が辨當を喫する所に充てられ、こゝには刀掛けをも備へてある、御客間は君公への御來客の間で、先つ頭溜の奥なる御廣間に御待たせーた上、やがて表勤めの士が出て之れへ御案内をする、其時御客の刀は案内に立つ士が携へるのであるが、坊主溜の前の御廊下に表と奥とを界する錠口の設けがあつて、此所に於て奥勤めの士が御客の刀を受取り、表勤めの士と交替することになつてゐる、それから、表御居間といふのは元朝等御祝儀の折に用ゐられ、君公は其際此所で御膳を召上る、かゝる時家老は二の間、頭以下は三の間で御目見をする、之れから御舞台の方へ移つて、先つ鏡の間であるが、こゝには大鏡を備へ、裝束をつけ面をかむつた姿を之れへ寫して見るのである、此間は舞台と同樣の廣さがあつて、役者一同揃ふた上舞台へ出る前に此間で式の如くに列ぶのだ、樂屋は第一がシテ、第二がワキ、第三が狂言、第四が笛、大鼓、第五が小鼓、第六が太鼓、それから舞台裏手の長方形のが太鼓干し場である、御裝束の間は君公のみが御用ひになるもので、此間の總張付には木村雅經の描いた能樂二百十番の極彩色の繪があつた、舞台正面御覽所の間は、御居間との堺が觀音開きになつて、室内は天井襖總べて金を用ひられ、一名總金の間と云ふ、金光燦爛目も眩むばかりとの事である、それから舞台の中庭は總べて青色の石を敷詰めてあつたさうだ、又舞台に向ふ前は簾、南側の拜見所は諸頭、諸役人、其後ろは町年寄、十村扶持人等、北側の拜見所は家老、若年寄、奥勤め諸士、光嚴寺、大法寺等の陪觀する所、又御覽所の御納戸の前の方へは藩士の女子の許可を得て拜見をする場所と定められてある、彼等が拜見に出るときは互ひに美服を競ひ、帶一筋に數十金を費てたさうだ、今度は元へ戻つて、諸人入口とあるのは奥勤め女中、又は呉服屋小間物屋などの出入するに用ひる所で、御休息御式台は君公が常用せられるもの、裁許所に詰めるは足

輕て、御子樣外出のときは、御付の士の外に此足輕が付ついて先立をする、此所に御用達とあるは御廣式付の御用達で、小目付は其れに屬する新番御徒歩の勤めるもの、對面所は奥筋の用向で役人が御用達に逢ふ所で、時には女中の親戚が訪ねて來てこゝで話をする、然し斯かる場合には必ら ず小目付が立會はねばならない、此御台子は君公平常の御用に充てるので、御次御料理人溜は諸士女中等の料理を掌る所、末女と云ふのは老女の監督のもとに種々の勤めをする者で、老女は女中の家老とも云ふべく其權威は中々に盛な者である、老女は兩人あつて共に字の如く年長者のと故、之れに助役たる中老なる者がある、長廊下に沿へる御膳所は君公日常の御膳だてをする所で、女中のみで其任に當る、其並びの老女の室は、當番を以て互ひに一日宛之れへ出張し女中を指揮する所、御仕立所は差向き必要の分丈けを女中の手で辨する所で、君公御召物は富山衣服町の吉川某、平吹町の某といふ二軒へ御命じになつてゐた、御覽所の後ろの御納戸は、君公の御召物を納めてある所、又御寢所の地盤は高く丘をなして、御覽所の二階と相通ずる程であるから、神通川及ひ向岸の風景を一望のうちに鍾め得べく、即ち正北を望めは神江を隔て、牛島村邊を見るへく、川向の堤上數百間には櫻紅葉を植込みて春秋の觀を添へ、東の方は木町濱口から東岩瀬の通船終日帆影を絶ゑす、遠くは立山劔山、其麓の常願寺川まで一目に見渡し、西は吳山で、其絶頂には七面宮の堂、三重の塔などがあつた、又御寢所の欄間は紅白の梅の彫刻で、床椽床脇は柳田家の青貝の繪、三海家の埋詰で二階の總欄干は朱塗であつた、御寢所の北に建つ一棟に、六疊八疊四疊の三室より成る說明のない部屋が三ヶ所あるのは、君公の御休息所で、御寵愛を蒙つたる御妾は三人あつた、其名はおみね、おつや、おなをと云ふ、御子樣は二人、之れへは末女が晝夜御付してゐる、御寢所から北の堀の中央にある釣殿を經て納涼所へ通ずる廊下は、下は石垣にして其間を往來されるやうになつてゐる、廊の兩側に高窓が付いて鐵網が張つてある、納涼所では月に三度つゝ御歌會を催ふされた、又此廊下から東へ分廊が通じて梧桐舍と名づけられた茶室へ往かれて、此茶室の周圍と廊下の左右には青桐を植ゑられ、俗に之れを桐の御茶室と謂つた、納涼所の西にある二棟の御土藏は、御子樣方等の衣服其他を納めてあるもの、又堀の東の十二間の長土藏は、二階の北六間は御能の御裝束、南六間は御書物、下は諸道具及能の小道具、活版等を入れてあつた、猶圖には示してないが、東の堀の北の橋の此方の詰に古木の櫻を植ゑられ、それから堀の東側一帶に二重に櫻樹を植ゑ列ね、其東には本草綱目の順序によつた數千歩の藥草園があるのだ、藥草園は別に桐の御茶室の前にもあり、納涼所の前には鉢植の植物が並べられ、又堀の北端には森に包まれた稻荷の祠を置かれ、其邊に御金藏が建つてゐる、又堀の東には螺髻山が在つて、此上からは富山の市内を瞰下す事ができた、其向ふは則ち御馬場、又堀の南方にも御土藏が建つてゐて、其東には百種の梅樹を植ゑた壽祿天滿宮があるけれども、是等も圖では示してない、此天滿宮の額堂には奉納百首詠歌の軸を納めたる額を初め、種々の額が懸けられ、梅林の中央には別亭があつて、爰で毎月歌會を催されたさうである、以上十六才より二十五才まで殿中に仕へて居られた安井八郎翁から聞いたとこ

ろに依つて其の大略を記したので、若し誤りがあれば予の聞違ひである　（井上江花）

越中史料の出版に就て

近來史學の發達は非常のもので、有益な出版物も續々刊行せられるやうになつたが、國別史料の蒐集に於て猶欠くる所は甚だ多い、殊に富山縣の鄉土史に至つては洵に哀れ至極の有樣で、是れぞといふものを認めないばかり互ひに遺憾の次第である、依つて我々同志は中越史談會なるものを組織し、鄉土史編纂の目的を以て越中の史料を蒐輯し研究しつゝある折柄、書肆清明堂が「越中史料」を出版する計畫を立て、史談會へ校訂方を依頼されたので、我々は大に其擧を喜び賛した、元來鄉土史の編纂といふ事業はなかなか一朝一夕に成るものでないから、差づめ古記錄古文書類を能ふ丈け探がし出して之れを保存するに力めねばならぬ、さうせなければ、唯さへ乏しい材料が次第〳〵に無くなつて仕舞ふ虞れがある、然るに斯樣に出版して置けば、大丈夫散逸の心配もなく、且つ有らゆる方面の歴史的研究をする人に取つて大に益する所があるであらふと信ずる、さて本卷の出版に當

つて斷り置くべきは、印刷所の遠隔してゐる不便と、校正は纔かに一回に止まつた爲め、必らず誤字の少なくないと思はねることである、是れは若し再版でもする折があつたら訂正を期する、猶また我々が實際の經驗に依れば、兎角に古記錄古文書を所有する人は、陰匿して他に示すことを好まず、倉庫の奥、長持の底深く秘藏する風があるので、世に知られぬ好材料も或は意外のあたりゝ存在してゐるであらふ、是等の所藏者又は所在を知られる諸君は公益のために开を世に示されむことを願ふのである

明治三十七年十一月

中越史談會にて

井上忠雄

肯構泉達錄

緒言

一、本書の著者は舊富山藩士故野崎雅明氏にして氏は其父なる蘇金翁の編纂されし喚記泉達錄の散佚せるを憾みとし其遺志を繼き本書を編せしものなりと云ふ

一、原書には文化乙亥春二月岡田英之氏の序文あるもこゝには採錄を略したり

一、曾て富山日報附錄として本書を印刷されし際には委く假名を付したるも今は之れを略せしため讀誦に不便多きを心付きたるも既に印刷の幾部分進みたる後なりしを以て其儘になし置きぬ

一、本書は各卷の區別を立てさりしが原書は之れを十五卷に分つて目錄の示せる如し

肯搏泉達錄之目次

卷之一

船倉神與能登神鬪爭の事　一
大彦命越中へ下向幷に保郷庄の事　四
大若子命阿彦を征伐する事　六
美麻奈彦爲越國造事　七
武内宿禰地理檢察幷榛津の事　一九
皇輿御幸越民產物を奉る事　二〇
南方書記大牧幷荷前祭の事　二〇
御宸翰忠孝二字札幷に八幡村八滿宮の事　二二

卷之二

長澤村各願寺の事　二三
六治古孝行龍女妻となり若干の新田を闢く事幷に六治古弟三人の事　二六
牛頭角力山來の事　三三
大伴家持の事幷に名勝倭歌　三三
鵜坂神社の事　四〇
諏訪神の事　四四

卷之三

越中守護藤仲遠の事　四七
美島野末社稻荷の事　四八
渡部綱親薗宮を保護する事　五三
以仁親王の御子の事　五六
源平俱利伽羅の合戰　五七
賴朝公時代の越中守護　六四

卷之四

打出湊の事　六四
幷に義經北陸經歷、越中三街道の事　六八
佐野常世安養寺を燒き亡す事　七一
桃井播磨守直常の事　八二
名越時有の事　八三

卷之五

黑瀨父子黑瀨女の事　八六
黑瀨村日宮の事幷に裏覗　八七
蜷川氏庸の事幷に最勝寺の創造　八九
陶彦作鞍幷に伊勢新九郎興起の事　九二
能州畠山の事　九八
幷に義則檢原城に來住の事
兩上杉の事幷に長屋椎名合戰

長尾房義越中諸將を滅し爲景に背く事　一〇〇
神保の豎高木左傳治の事　一二二

卷之六

一向宗一揆
　幷に長尾爲景抗に陷り最期の事　一〇一
景虎與越中諸將、戰姫川邊事　一〇三
景虎知機、還軍事　一〇五
景虎の機變轉化　一〇六
景虎板屋刑部を攻むる事　一〇八
板屋七郎の戰死
　幷に刑部少輔生捕るゝ事
越中諸將景虎を降す事　一〇九
越中の諸將小井手魚津城を攻むる事　一一二
放生津落城江波父子討死の事　一一二
魚津海上蜃樓の事　一一三
謙信瀧山城を攻むる事　一一四
武田信玄飛州より越中に討入り椎名降を乞ひ質を出す事、信玄再ひ越中を攻め魚津小井手城堅固にして軍を還す事　一一五
逼照院金乘坊の事　一一五
篠塚道生畠山に亡さるゝ事　一一八
道生女通死幷に毘沙門天の事　一一九

卷之七

二宮津毛城を攻むる事
　幷に謙信庄官百姓を欺き殺す事　一二三
謙信柿崎景家を討じ景家一黨自殺の事　一二四
謙信富山關野等處々を攻むる事　一二五
一揆謙信を討ちて敗走せし事　一二八
一揆謙信の先陣を討敗る事　一二九
益木中務の亟謙信を降す事　一三〇
上野彦次郎火牛を以て謙信を攻擊の事　一三一
白屋謙信を導き飛州を討つ事　一三三
謙信飛州より越中を討つ事　一四〇

卷之八

信長爲亡越後先討伐加能越事　一四一
齊藤新五所々の城を攻むる事　一四二
前田利家能州を領する事　一四三
佐々内藏介成政越中を領する事　一四五
鵜川の事　一四六
河田長親小井手城を攻むる事　一四七
成政安住城を修繕する事　一四七
荒川合戰の事　一四八
越中方織田方諸將出陣の事　一五〇
越後勢魚津へ籠城し織田方圍攻の事　一五一
景勝後援の事　一五二
魚津十三將自殺の事　一五五
土肥美作守政繁の事　一五八

卷之九

白屋秋貞死亡の事　一六〇
城生落城齊藤一鶴奔走の事　一六〇
秀吉成政を疑ひ成政質を出す事　一六二
佐々平左衛門尉成政を諫むる事　一六四
成政信雄卿に與みする事　一六五
成政密謀の事　一六六
成政又若丸養子を約する事　一六八
佐々陰謀露顯の事　一六九
村井衆を朝日山に築く事　一七一
利家公朝日山後詰の事　一七四
鈴木因幡窪田領を守る事　一七五
荒山城攻の事
佐々勢末森城を攻る事　一八〇
利家公金澤城出馬の事　一八四
利家公末森城後援の事　一八九
成政坪井山に從ひ出勢の事　一九三
長連龍白子濱着陣
　幷に鳥越城將士奔走の事　一九五
利家公歸陣寺島兄弟喰留る事　一九七

卷之十一

成政援を景勝に乞ふ事　一九九
能州荒山落城の事　二〇一
鳥越俱利加羅合戰の事　二〇二
上杉景勝越中境を侵す事　二〇三
成政遠州濱松に到る事　二〇五
蓮沼合戰の事　二一二
成政鷹巢出張の事　二一七
成政遊樂の事幷に菊地伊豆守の叛心　二一九
鳥越城攻の事　二二一

卷之十二

成政軍評議の事　二二三
今石動合戰の事　二二五
氷見合戰の事　二二六
金乘坊了哲陣觸の事　一七七
成政富山城出陣の事　一七八
荒山城攻の事　一七五
成政遊樂の事幷に菊地伊豆守の叛心　一七四
鳥越城攻の事　一七一
利家公朝日山後詰の事　一六九
鈴木因幡窪田領を守る事　一六八
村井衆を朝日山に築く事　一六六
佐々陰謀露顯の事　一六五
成政又若丸養子を約する事　一六四
成政信雄卿に與みする事　一六二
成政密謀の事　一六〇
城生落城齊藤一鶴奔走の事　一六〇
白屋秋貞死亡の事

卷之九

土肥美作守政繁の事　一五八
魚津十三將自殺の事　一五五
景勝後援の事　一五二
越後勢魚津へ籠城し織田方圍攻の事　一五一
越中方織田方諸將出陣の事　一五〇
荒山城攻の事　一七五
成政富山城出陣の事　一七八
金乘坊了哲陣觸の事　一七七
鳥越城攻の事　一七一
利家公朝日山後詰の事　一七四
鈴木因幡窪田領を守る事　一七五
村井衆を朝日山に築く事　一六八
佐々陰謀露顯の事　一六九
成政又若丸養子を約する事　一六六
成政密謀の事　一六八
成政信雄卿に與みする事　一六五
佐々平左衛門尉成政を諫むる事　一六四
秀吉成政を疑ひ成政質を出す事　一六二
城生落城齊藤一鶴奔走の事　一六〇
白屋秋貞死亡の事　一六〇

豐臣秀吉公越中へ發行の事　二二八
金森長近越中へ出陣の事　二二九
上方勢富山城を攻る事　二三〇
成政降を乞ひ秀吉公宥免の事　二三二
秀吉公姓名及ひ越中三郡利家公拜領
　幷に成政肥後國へ移る事　二三三
前田利家公昇進の事　二三五
前田家勳績の事　二三六
加能越三ヶ國拜領の事　二三九
利長公富山御居城の事　二四四
利次公富山城へ御移の事　二四六

卷之十三

洲壞分越中四郡と爲る事　二五七
　幷に礪波國と号せし事

卷之十四

紀立山異人之事　二七七
有嶽の事　二七八
黑部山中の事　二七九
四郡諸川　二八二
御領村名　二九一

卷之十五

古城事跡神社佛閣　二九八
築城年表　三三七
不記年号城墟　三三七
戰爭年表　三三七

肯搆泉達錄

㊀船倉神與二能登神一鬪爭の事

新川郡船倉山の神を姉倉比賣と云ひ能登の補益山の神を伊須流伎比古と云ふ姉倉比賣と陰陽の神なり又能登の柚木山の神を能登比曙と云ふ伊須流伎比古、姉倉比賣を遠ざけ能登比曙と陰陽の契後からざりければ姉倉比賣嫉たとひ一山の石を壺し礫して能登比曙を攻め給ふ布倉山の神布倉媛も姉倉比賣に力を戮せて布倉山の鐵を打碎き給ひければ能登比曙、姉倉比賣の手強さを怒り颶風を起し海濤を山壑に漲ぎて防ぎ給ふ又加夫刀山の神加夫刀比古も能登比曙を援けて射水郡宇波山に出で坤軸を鑪とし隕る鉄石を鎔かし海に淪め給ふ鬪爭久ふして止ず怒氣積陰をなし渾々沌々として兩儀の光を見ず四序分たず蒼生育せず故に天地の諸神之を愁ひ給ひ高皇產靈尊に告げ給ふ尊大に驚き大巳貴命に勅し鬪爭を平ぐ可しとのりければ大巳貴命勅を奉じ急ぎ越路に天降給ふ命先づ越の神嵐を召び給ひければ雄山より手刀王比古命船倉山より紫子姫命篠山より貞治命、布倉山より伊勢彦、能登風至山中より釜生彦何れも來て命に見ゑ給ふ命曰く姉倉比賣能登比曙を後妻討し兩神の怒積陰をなし宇壞に充ち塞がる是れ補益の陽神獎理すること能はざるは素より色に淫するもへなり今我勅を奉て討罰す汝等神孫我と心力を一にして勤われと、各謹んで命にしたがふ手刀王比古曰く教諭の如く陰神の怒は陽神の致すところなりといへども重く陽を誅せは陰專にして

却て害あらんとありければ命諸し給ひ三神に先づ文告の命あり次て威讓の辭ありしに服し給はざりければ遂に軍議にかゝり五個の日鉾を作らしめ泉を以て八尺の幣を造り五色に染め五の鉾に垂れ五行の備を設けたり斯て大巳貴命船倉を攻め給ひけるに山巓に方七里の池あり宮城に登ることは難ければ山を鑿ち池水を決りたまひけるに忽ち一大流となり池水盡く落ちて前驅容易に宮城に登りける姉倉比賣巳に柿梭の宮へ遁げ給ふと紡子姫告給ひければ命遂に柿梭の宮を攻め姉倉比賣を捕らへ小竹野に流刑を命じ又布を織て貢とし世の婦女にも紡織の業を敎へて罪を贖べしとなり又布倉媛を捕へ姉倉を援けし罪を責めて柿梭の宮へ遷し柿の梭を作り紡を編み姉倉と同じく布を織り貢とし又女功を世に敎へて罪を庚ふべしと命じ給ふ姉倉布倉の神巳に罪に服し給ひければ大巳貴命能登の補益杣木の神を攻め遂に擒とし是れ人民の爲に尤も戒む可き罪なりとて二神を海濱に暴し給ふ又加夫刀山の神能登比咩を援け給へる罪を責めて山を崩し遠く海を埋み爰に加夫刀比古を置き命じて曰く風濤大に起らば禦ぎて陸へ上すことなかれ又先づ人に報じ知らしめ之を職とし罪を贖ふべしとなり命巳に船倉能登を平均し給ふ五の神孫も各丹誠を抽んで日鉾を捧げ渾沌を整ち給ひしかは雲將雨師隊を乱して奔走し飛廉雷公は深山幽洞に隱れ海童波臣は尾閭に遁げ入りけれは積陰忽ち披て陽光明かに天地位し萬物育して北陸靜寧なり

柿梭の宮は柿澤といふ所にあり神の業を傳へて中古まで柿澤より柿の梭紡などを作り出せり姉倉比賣八搆布を織りて世に敎へ給ふ今に傳へて越中より八搆布を出す是れ名產なりと三才圖繪

にも記せり又布市に一條の流れあり油川化粧川驟川の三つの名あり油川化粧川とは姉倉比賣能登を攻めんとして此川に臨み沐化粧し給ふゆへに名くとぞ又驟川と稱ふるは布倉媛葛粉水を以て布をさらし給ふゆへなり又布倉媛栽給ふとて布倉山に葛を生ず之を鐵山葛と云ひ名ある產物なり

能登の補益杣木の神中古まで二月初午より神輿を海濱に遷し驟して祭禮とすと云へり又今に砲車雲起り能登の海あれんとする時に加夫刀山に燧燧の如き氣を生ず是れ神の告なりとて海中の船急ぎ陸へ避るとなん又討罰の事畏りて五行の日鉾各功ありし所に納めしが後に至り五の神孫も玆に神とし祭れり手刀王比古は大田保手刀王寺水無宮是れなり紡子姫命は月岡野月尊宮是なり後此處に潔き水沸き出でゝ池となり月の清水と稱せり、釜生彦は礪波郡遊善山の下風神雨神の宮是れなり風雨を司れる神にて今に風の出づるを願ひ風神の宮の樹を撼せは風忽に起り雨神の池水を搏は雨驟かに至る曾て商人の利を貪り米の價を昂んとて樹を撼かし池水を搏しかは俄然大風雨となり尽く禾稼を害せしとあり故に稼穡終るまで山中に入を禁せり、貞治命は射水郡關野松田江の火の宮是なり海上風波惡しく船覆らんとし又暗夜に方角を辨まへざる時此宮の森に高く火燃へて海上を照らし船を陸へ導き昔より北海の旅船度々難を免るゝに云ひ傳ふ、伊勢彦は下村の神社是なり今に至り祭禮に牛乘をなすこと加茂の競馬に似たれども其實しからず玄古の遺事なりとぞ

淮南子曰、往古之時四極廢、九州裂、天不兼覆、地不周載、女媧氏鍊五色石、以補蒼天、斷鼇足、以立四極、と洪荒の世を語るは癡人の夢を說くに類すと雖も和漢相同じ、船倉能登の神闘諍の事傳へて人口に膾炙す姉倉比賣礫せしより船倉上野に一拳石を餘さず奇とすべし又小竹野に流刑ありしにより延喜式にも姉倉比賣神社は嬬負郡七社の中に入れり此餘尙ほ遺跡の存する者多しと云ふ

○大彦命越中へ下向并に保郷庄の事

崇神天神即位十年癸丑詔あり四道將軍を定め給ひ諸州を治しむ北陸へは大彦命下向し先づ若狹へ至り給ふ緒濱といふ所に筍富貴、飯富貴といへる夫婦の者あり共に長壽にして人その接み來るを知らず命に見へ詳かに北地の風氣民俗を告げ參らせ扈從地下の人に我濱子を十人添へ奉り命を祖僊すといへり大彦命越中に至り給ひ伊豆部山の下杉野に玉趾を留め大田郷中地山に保を築き推摺彦を置き又荒地山に庄園を定め手刀摺彦を副とし畠さ給ふ推摺彦手刀摺彦保庄に在りて民に教倫の道を敎へ能く稼穡を奬勵したり時に黑牧彦と云ふ者あり亦能く力耕し農功殊に勝れければ命賞し給ひ郷將とし早稻比古と名づけ且其功を永く示さんとて黑牧を村號とし給へり其後田野次第に辟け夫れ〳〵功勞によりて郷將とす室生彦居し所を山室郷と稱し豊生彦居し所を三室郷と稱す又八千彦は能州羽咋郡釜生彦の後にて其居處を糸岡郷といひ(礪波郡に在り)吉田久美彦津地幸比古居し所を加積郷と云ふ此餘八川郷、熊野郷、蜷川郷、宮川郷、高柳郷、松倉郷、寒江郷、駒見郷

關野郷、山田郷、長澤郷、井波郷、田中郷、野積郷、爲成郷あり又日宮保内、富崎保内、檜原保内、倉垣庄、寒江庄、宮崎庄、大野庄あり孰れも後に至り村里多くなり或は城築たる所又た寺領地などにて保郷庄の名ありと云ふ

古事記に崇神天皇の御時大彦命武淳川別、吉備津彦丹波道臣命等を北陸、東海、南陽、西道へ分ち遣されしは北陸東海などいへる始なりとぞ又筍富貴、飯富貴の夫婦後に神階を給はる若狹の一宮是れなり又濱子とは海陸の事に慣れたる者にて地下の者濱子の居し處を地下村濱子村と云ふ伊豆部山は嬬負郡小井波夫婦山の事にて命居給ふ所は内裏村なり

荒地山は今の八尾邊なり

保は堡なり小城を云ふ又保庄の地を本郷と云ふ即ち大田本郷館本郷にて是れ郷の始なりと云へり郷とは和銅の詔延喜式に里の字と同じくさとゝ讀めりさは狹とは所にて共に狹き所の謂なり大化の詔及其後代々の令式に見へし造戸籍の法に依れは凡五十戸を里とせり又郷の廣狹同じからざるあり周禮に万二千五百戸を郷とし又百家の内を郷とすと云へり

黑牧は村名の始なり

豊生彦の後壽永年中侍となり五十嵐小文治と云ふ源平盛衰記にも見えたり早稻彦の後相繼ぎ畔田某の代に侍となり三室郷湯端に城を築き歴河上中務と戰ふ畔田入道圓空の時に至り戰ひ疲れて農に復し同苗寒江村に別居し本郷を冒て寒江本郷と稱す、八千彦は銅鐵を鑄、鍛冶を善くす末

孫能登越中の間に在り久美彦幸比古の後繼て魚津に住す久阿彌幸因と云ふ

○大若子命阿彦を征伐する事

垂仁天皇の御宇越の國に阿彦と云ふ者あり布勢の神倉稲魂命の胤布瀬比古の後東條彦の孫なり性高邁にして人の上たることを好み己れに從ふを愛し背けるを殺す一州の人民畏服しけれは次第に驕奢の心起り自ら立て阿彦國主と僭稱し法制禁令を專らにし隨從せる大谷狗、强狗良も無双の曲者なり又阿彦の姉に支那夜刃と異名せる女あり猛さと虎の如く前に越後に嫁し一男を生む支那太郎と號す這兒母に似て幼より生けるを殺し力量殊に勝れ山に入て猪熊を徒捕にし驅盡しけれは猛獸も畏れて捜み隱るゝ所なし父之を愁ひ屢叱り戒めけれは却て憤り母と語らひ父を弑さんと企てたり父之を聞きて大に怒り母子共に追出せり是より母子は阿彦の家に住み込み虎に翼を添ゆる如く阿彦に種々の惡行を勸めけり阿彦暴惡日に增長し人の財寶を奪ひ人の妻孥を偸み來て奴婢とし恣に田禾を麥取り之を防がんとすれば衆を率ひ來て斬害せり民怖れて四方へ逃げ散す椎摺之を愁ひ制すれども服せず却て椎摺の中地山に迫り岩峅に城柵を搆へ賊徒を集め椎摺の保を攻む手刀摺椎摺を拔けて共に防ぐといへども勢敵ゑ難く遠く東して三谷と云ふ山中に遁れ急ぎ早稻彦をして大和國珠城宮へ遣し阿彦が乱暴を奏牒す時　垂仁天皇八十一年春奏牒天聽に達しければ事忽にす可らずとて即ち大若子命に勅し阿彦を討罰すべしとて標劒を賜る命勅を受け急ぎ京都を發し難波津より艤して越の筒飯濱に着給ふ（今の敦賀なり）爰に嬬負郡杉山といふ所に佐留太郎といふ者あり猿田

彦の胤にして氣骨凡ならず勇力殊に勝れけり命兇賊討罰として下り給ふと聞き越前の大野の福泉といふ所に迎ふ命佐留太郎に見へ給ひ是より越中に至らんには海陸何れか便ならんと問ひ給ふ佐留太郎答て陸地は賊の妨あらん舟行然るべし我友珠洲の近藤と云ふ者能登にあり舟港をよく知れり渠を召はんとて急ぎ使ひ遣はしけれは近藤翌晡時に來て命に見ゆ命喜び給ひ急ぎ舟に乘り程なく越中石瀬の濱に着き給ふ保郷の將迎へ奉り夫より小竹野に供奉し椎摺兄弟縱虔を造り待奉りしまゝ命在し給へは各命の發向を賀し奉り阿彦が乱暴を詳に申上けり斯く大若子命斥候をして阿彦が岩峅の城柵を伺せ給ふに賊徒頃日命の發向を聞き王命を恐れたるか柵を出でず物靜なり斥候歸て斯告けれは命士卒を率ゐ岩峅を攻め給ふ支那夜刃支那太郎强狗良禦ぎ戰ひ夜刃の猛さには寄手の面々辟易せり甲良鉾を撚て夜刃と戰ひ夜刃の鉾を打れとし已に突き倒さんとせしが夜刃妻手へ廻り甲良に組付しが甲良夜刃を壓伏せ短刀を拔て刺んとせしに夜刃の尋なる髮風に捲れて甲良の面を蔽ひ猶豫する間に夜刃起立んとす佐留太郎馳せ來り夜刃の髀を突く强狗良夜刃を拔けて佐留太に渡り合ひ夜刃は此間に遁げ去たり强狗良佐留太の鉾端を恐れ逃けるが佐留太追かけ鉾を延べ肩先を突貫きけり支那太郎は賊徒と共に之を見て大に怖れ悉く城中へ逃入ける命諸將を勵し手痛く攻め給ふ賊妖術あり魑魅を驅て大石大木を投け懸け士卒進み得ざりしかは美麻奈弓の弦を鳴して鏑矢を射しに過たず賊の胸に中り倒て死しければ魑魅と見なしも消て失にけり命遂に城柵に乘らんとし給ひければ城上雲忽ち起し雷雨河漢を傾け流潦一時に漲り箭よりも疾く士卒多く溺る將

帥熊さ避け殿に攀ぢ上り溺るゝ者を援け又命を護し別に路を求め山を下れは賊多く逐ひ來るより急き川を越へ西南を指し上野に走り避け雲時憩ひ給ふ賊又た圍ざるに火を縱ち野草山林を燎き命を取り圍み免難くぞ見えける（此所を燒山と云ふ今の八木山なり）天助け給へるにや俄に風あらく起り賊に向て吹き返へし猛火却て賊を燒きけれは命を始め諸將危を逃て昏黑の中に上野を出で小竹野に歸り給ふ斯て大若子命阿彦の岩峠に見へざるを訝り給ひ斥候をして探らせ給ふに阿彦先に命の下り給ふと聞き枯山に寨を築き出張せしが命船にて至り給へは空しく爰に在りと聞き知り諸將と評議し先枯山を攻めんと宣ふ（枯山嬬波郡淺野谷なり）然るに霖雨晴れやらず遲引し給ひしが一日瞻を窺ふ折柄忽焉として老嫗一人命の前に來れり命怪み何爲者ぞと問ひ給ふ嫗答て曰く我は此あたりの者なるが民久しく凶賊に虐せられ窮厄を極めけり今命討罰として下り給ふ雖か之を歎ざらん然に兇賊妖術に長せり恐くは命彼に欺かれ給はんことを我大已貴命昔此地へ天降り給ふ時日鉾を捧げ將を此地へ配り給ふを知れり命若し古に從へ給はゝ賊の妖術空しからん我に八撫布を貯ふこれを八幡とし又國勝長挾が栽たる八節の竹此野に在り截て幡竿とし八將八隊に分ちて各幡を以て標とし給はゝ進退度を失ふことなく妖魔の禁厭ととなり賊徒直ちに亡ぶ可しと即ち八撫布八折を出し自ら截ち纏て白幡八流を作り命に與へ去らんとす命留めて異なる哉老嫗神の古を知れるとゝ宣ひけれは嫗答て我は從來船倉山の神なるが罪ありて此郷へ竄せらるると云ひ舍て姿を見へずなりにけり命神の教と喜び給ひ諸將に告げ幡を示して直に野に出て八節の竹を求め給ふに容易く求め得ざりしが白髮翁八竿の竹を擔ひ來て命に與へ我住吉の翁なりと宣ふまゝ跡なく失にけり命奇異に思ひ給ひ急き歸て竿に幡を結垂給ふ是を手長白幡と稱すといへり斯て命は神の告に從ひ幡を揚げ將を配り小竹野を打立ち一舍を經て已に枯山に押寄せ給ふ甲良先鋒しけれは賊將大谷狗衆を率ゐ討て出で甲良と戰ふ谷狗突立られ柵をさして逃げけれは將卒追ふて馳せ入らんとせり谷狗鞭を揮ひ犬を嗾すれは數千の狼犬潮の湧が如く縱横に飛廻り人を嚙む諸將疼なず斬捨て突伏せ進みける阿彦大谷狗賊徒を率ゐて打て出るを諸將擊取らんとて前後左右より圍けれは阿彦進退茲に谷まり危く見ゑけるが城中頻りに皷を擊ち經天地に震動し驚然として雲霧起り溟濛として暮るゝが如く忽ち阿彦の行術知れず諸將城柵に乘入りけれは賊已に岩峠指して落行ける命即ち將士に命じ城柵を燒拂ふて凱旋し其夜は命を始め皆甲良の辻城に宿し（里郷に在り）明くれは岩峠を攻めんとて辻城を打立給ひ諸將命の前後左右に扈從し白幡を靡かし押向ふ已に大岩川を渉り高野に陣を取り先づ斥候をして窺はせ給ふに賊將鄭霍徐章命を擊んとて衆を率ひ血掛の森に在りと告く命川に傍ふて南に登り望み給ふはや泊野近く進みける諸將は馳せ向ひて相戰ひけるが鄭霍徐章驍勇奇策多く勝敗いづれとも決せず日已に虞淵に迫りけれは命を始め諸將泊野に宿し給ふ（是より此處を一夜泊と稱す）命諸將に告げて曰く霍章二人を擊取らは阿彦を獲ること容易なる謀やわらんと佐留太爾々の策を出す命其意に從ひ翌未明に岩峠の柵に逼り霍章を挑み給ふ兩將衆を率ゐて打て出でけれは命弱を示し退き給ふ霍章進んで泊野に至る佐留太、近藤、霍章の城柵を離れたるを見て間道より岩峠の柵を攻め火を縱ちけれは霍章之を

見て岩峠へ歸らんと巽に向ふて廣野の東へ馳行けり命の軍及甲良、推摺、手刀摺一同に追ひかけ美麻奈の一隊槇谷より出で前後より夾んで遂に霍章二人を擒取りけり夫より岩峠へ推寄ける支那太郎は已に近藤に討れ大谷狗は佐留太の勢に生捕られけり阿彦今は是までなり殘卒を從へ討て出韋馱天の暴たる如く縱横に當り命を目懸け本陣に蒐入を前後の備常蛇の援をなしければ勇悍無雙の阿彦も詮方なく竟に討死をぞしたりけり、はや城柵に火を掛け勝鬨を行ひ給ふ甲良佐留太は支那夜叉强狗良を求れども見へず虜大谷狗に問ければ兩人手負の疵の重ければ禰裏谷に隱るといへり甲良佐留太谷狗を鄕導とし禰裏谷に至り巖の洞を搜求けるに賊四五人在けるを斬殺し更に强狗良を求るに洞の中暗ければ刀にてみだりに左右上下を突けるに强狗良の背に突きあたり洞の上より墜けるを引出し斬てぞ捨たりけり支那夜叉在所の知れざれども渠は女なりとて急ぎ命の陣に歸り此よしを告げゝれは命喜び給ひ諸將も命の苦心今日に解けたるを賀し奉り命は泊野にしばらく休ひ給ひ將卒を勞ひ又た凶賊退治のよしをあまねく民に知らしむ曾て阿彦の暴を遁避し民我先にと家鄕へ歸り欣事限なし大若子命鄭鶴徐章尋常の者ならざれば大谷狗に問給ふ谷狗曰鄭鶴の父を鄭命といひ徐章の父を徐範といふ唐土渤海の人なり各乱を避け妻子を携へ越の海濱水口といふ所に來り住しが其子鄭鶴徐章に至り各阿彦の恩を請け遂に阿彦に從ひけるが後阿彦が暴惡增長しければ終に滅亡せん事を愁ひ二人數々諫れども容れ用ひず然れども各阿彦の恩を荷ひ去に忍びず今度命を援けて死せりと語ければ命聞き給ひ二人の忠貞にして死せるを感じ尸を水口に葬神とすべしと宣へは二人の尸を求め水口に祠を造り神とし祭けるとなり又た支那夜叉は大野の廢の洞に隱るると聞きて（大野は後に吉祥寺野と云ふ）谷狗に問ひ給ふ谷狗曰夜叉髀の瘢癒ず跛となれり心猛きも今は衰へ又何をかせん渠は女なり死刑を宥恕し給はれとひたすら賴みければ命憐み許容し給ひける大若子命是より中地山に暫く滯留まし〳〵猶殘賊を探索し脅され從ふ者は罪を赦し人の奴とし更に人民に惠みを加へ給へは蒼生歡樂し洲塡靜謐になりにけり浩りければ農民野に出で荒畝を犂ひて粢麥を耕しけるに狠の所々に暴れ出で民わつまつて制せんとすれば却て嚙殺さる、民怖て白昼に戶を閉ぢ復た出ざりける命大谷狗はよく狠を制し狠彼に畏服すと聞き給ひ防禦せしむべしと宣ひて佐留太、谷狗に此旨を命じける谷狗敬で諾し急ぎ野に行き狠を制せしに群狠忽ち山澤に退きふたゝび野に出ざりけり命喜び給ひ依て谷狗の刑死を赦したまふ、されども世の交を斷ち大野に穴居せしめらる又た阿彦考を神とし岩峠の南山に傍ふて高く石塡を築き大社を建て越の一の宮と稱す（前に異形の石燈籠あり阿彦の作なりといふ）命聞て邪神何の德かある社祠を毀ち神を流すべしと宣ひけれは卽ち小き祠に移し水口に流けり又た新川郡布勢山中に上條中條下條の三家あり皆阿彦の一族なり先祖東條彦を東條敎荒神と稱し一鄕の氏神と尊崇せしが今度岩峠の宮を破却し給ふによつて東條彦の宮をも毀ち給しかと三條を始め一鄕皆々恐ける權摺彦之を聞ひて命に告て曰我聞く東條彦は生て善德あり人其敎に化して淳厚となり又よく稼穡を務め一鄕富饒なり是れ東條彦の德澤によれりとて遺魂を神とし永く尊敬せり必ず東條の宮を毀つことなかれと命聞き給ひ功を賞し德に報ずるは王者の急務東

條彦は靈神なれは何ぞ毀つことをせんとて却て推摺をして命じて神階を進め布勢の地に封じ上を神職とし永く神に事へしめ中條下條は長として一郷を司らしめ又た小竹野姉倉比賣の八幡を制し兵法を敎へ給ふ是に於て全く凶賊退治まし〳〵姉倉の宮を改造り神德を永久に示さんと其地を擇び給ふ、小竹野に神奈といへる翁あり甲子週回三百歲を過ぎよく神代の事を知れり命召で渠に謀り給ふ神奈曰他に求る事なかれ此所固より靈境なり其故は往昔越の東北に賊起つて皇家を蔑に州民を虐殺す時に神日本盤余彦の尊越路に發向まし〳〵北臺野に陣し給ふ前驅已に東せしかば賊將叢鷲鹵看怖れて兵杖を棄て降を乞へりよつて尊凱旋の時物部の持たる弓を樫にねさめ北臺野に瘞み天神を禮り永く越の地を擁護し給へと祈願まし〳〵歸洛し給ふ尊刃に血ぬらずして北陸平均民の賦稅山海の貢も豐なれは是れより世々の天子御府國とし給ふと命も此吉例に從ひ給ひ姉倉の舊社を修補し又た八幡の神社を新に造り祭り給はんに何れか爰に勝る地あらんと答ふ又た曰昔大巳貴命此地へ天降り平國たまひけれは新に宮を造營し越の一宮と祀給へりと命何れも諾し給ひ速に姉倉の舊社を繕修し八幡の神社を造り又た射水郡一宮村に八千戈神を鎭坐し氣多大明神と稱し越の一の宮と定め給けり斯くて大若子命垂仁天皇八十四年夏歸洛まし〳〵今度阿彦の黨を容易に亡せしは全く姉倉の神の擁護と保郷の將純忠にして勳ありしとによる越一々奏聞ありければ頗る叡慮にかなひ命幡を揚て征伐し給へは大若子命を改め大幡主命と名け賜はり又た保郷の諸將の功を賞し後又神階を給はる八幡の神社に四十二の末社ありとは保郷の將の神社の事なりとぞ

杉山今猴田と云ふ佐留太舅の後梅野某天正の始まで存せり佐留太舅の鉾は嬬負郡高日付村の神祠に納といへり、越前福泉は今の疋檀なり又た能州珠州郡に加志波良比古の神社あり近藤は其神胤なり後近藤濟上といふ人加州に在り其子帶刀父死して遺魂を神とす濟上神社と稱す能美郡にあり越中藤仁人守護たる時仁人の三男非ロ太郎實茂の筬下に近藤右衛門あり皆其後裔なり又た呉山の下古鵜坂川の流あり姉倉比賣舟にて人を渡し給ふ所は今五艘村邊なり後爰にかきりて女の舟を渡したるは古に繰るなり又た鵜坂川宮城の方へ流しより古川のあたり五艘村の名となりたるとぞ（神通川昔は鵜坂川と云ふ）又た命に幡竿を授けし翁は住吉村の神なり傳て今に至るまで住吉村吉祥寺邊の竹を旗竿に用ゆるは此所謂なりとかや又た禰裏谷は浦山の上なり此巖の洞に人の手足の痕馬の蹄の痕あり今がうかしら谷と誤り稱せり是强狗良の住し所なり又た水口とは今の草島也鄭谷、徐範船に葱を積載て食とし來れり是より爰に根を托して今に名物とせり又鄭鵠、徐章の祠は西岩瀨より東海邊にありしとなり此社地に唐草を生じて和草をまじへず彼唐土の王昭君匈奴に嫁せしを怨んで死すとも夷の土とならじと云ひ死て後ち漢の土を以て葬けるに塚を限て匈奴の白草を生せず漢土の青草を生ず是を青塚と云鶴章の事も之に全じ奇とすべし又た大谷狗は犬の司にて唐に所謂犬戎の類也我が國古より黛蛇犬神あり黛蛇は蛇を祖とし犬神は犬を祖とす大谷狗の子孫繼て大野に穴居せり谷狗の流は今の藤内穢多なりと云又穢多に秦姓の者もあり久ふして後谷狗の末に大谷平と云者あり富豪の稱あり又大野後ち吉祥寺野と云大谷平の子孫髮し

潛に高野山に登り修學し學成て鄕に歸り大野に一菴若を建立し吉祥寺と號し淸覺阿闍利と稱すといへり大谷平檀那となり貨財を多く附與す後ち大谷平穴居を厭ひ時を伺ひ大森と云所に家造して住めり或る夜盜人來りて大谷平を刺殺し妻子を縛り財寶を奪ひ去れりよつて吉祥寺も大拔を失ひ次第に衰微せり木曾義仲神成鄕を放火せし時吉祥寺も燒失せりとぞ今は礎のみ殘れり又た東條の宮ある所を東條村といふ今東城と改む上條神職となり繼て今に至る、中條は後ち桃井直常の筬下となり中條下野守と稱す、下條は六郎右衛門といふ者大力の聞へあり後ち中條下條と唱ふ下條七郎二良と云ふ者嬬負郡へ出で耕作し一村を成し氏を以て村號とす下條村是なり又た姉倉比賣小竹野へ流刑も限りありて船倉へ歸り給ふ故に世人小竹の神と船倉の神と一躰なりといへり又た北臺に蜆の宮といふあり社中地に滿ちて蜆の殼あり是は姉倉比賣機織給ふに蝶の群り來りて糸を取しを比賣愛し給ひ是れ蜆の蝶に化したるを知り船倉へ歸給ふ時我が御手洗にも蜆のあれやと宣ひければ蜆悉く蝶となり船倉山へ飛び行き又た蜆となれり是より船倉御手洗に蜆多く夏至の比蝶となり徘徊す翅青黃赤の彩あり北臺蜆宮の神の昔を知るもの稀なれども蜆の蝶と化せし殼の今に殘れるは奇とすべし又た此地婦女の俗語に機織窓に蝶飛び入は船倉の神の使なりとて織機の丈尺を增すの吉瑞とせり所謂ある事なりとぞ又た神奈は小竹野に住み來れり姓は阿曇といひけるとなり古事記に阿曇の連は綿津見の神の子宇津志日金拆の命の子孫なりと云ふ神奈は阿曇姓にて住吉を祖とし神孫なり此人の子孫繼て住吉村にあり嘉左衛門といへり

又た越後の賊蔑鷲の住みし所を鬼伏といふ盤余彦尊東夷征伐として越の國に發向まし〳〵越の宮崎國勝長挾は先驅せしに凶賊怖れ退き蔑鷲降るといへり又た北臺野今北代とゆらたむ白鳥城より北に臺の淸水といふあり臺の字なる事明かなり尤も白鳥城より北は皆北臺と稱すとぞ又た射水郡氣多神社の氣多は北なり或は萬物澤山なる義ともいふ八千戈神は大巳貴命の別名なり後ち故ありて延曆年中礪波郡高瀨大明神神階三品に昇め越の一宮となり給ふとぞ高瀨の神元と大巳貴命なり又た田中村の神社も大巳貴命にて氣多の舊社なり此社後ち小竹村へ遷せりと云ふ私に案するに阿彦の事舊史に載せず喚起泉達錄に書せるを疑ひしが日本紀神代卷講述鈔に阿彦の事を引けり講述鈔は勢州外宮の神主度會延佳が國津島の神主高松氏橘吉重、釜屋氏秦正好北越の山本廣足なるものゝ求めによつて講せしを寛文壬子八月九日山田の旅館にて書し遂に梓に上せしなり神代卷に「素戔嗚尊乃拔二所レ帶十握劒一、寸斬二其蛇一、至レ尾劒又少缺、故割二裂其尾一視レ之、中有二一劒一、此所謂草薙劒也、」とあり延佳講して曰此所謂草薙の劒なりとは古より劍を草薙武皇子より以前垂仁の御宇越の國阿彦といふ者を平げに罷れと大若子命詔して標劒を賜はる則ち幡を揚て退治せしかは大幡主と名け賜はり大間社と祝ふ其標劒も大間社と一所に草薙社と祝へり然かれは草薙は劒の事にて上古よりの名とせりと斯の如く阿彦の事を慥かに引けり復た疑ふべきにあらず尤も此地の遺蹤も今に依然たり然るに阿彦の事垂仁紀にも見へず上古の事なれ

は記錄もなきが舊史を見るに都おたりの事を記して遠くに及はず又舊史といへるも多くは追て擬作せる物なり古は都より東北は皆な毛の國と稱して今の蝦夷をみるがごとし上毛下毛などの名によつて知るべし唐にても大和より西南を本邦と思ふて夫より東北は毛人とせり東北いまだ辟かざるゆゑなり後漢書倭在韓東南大海中依山島爲居百余國自武帝滅朝鮮使譯通於漢通者三十許國國皆稱王世々傳統大倭王居邪馬臺國

唐書東夷傳天武死子持統立咸亨元年遣使賀平高麗後稍習夏音惡倭名更號日本

使者自言國近日所出以爲名或云日本小國爲倭所幷故冒其號使者不以情故疑焉

又妄夸其國都方數千里南西盡海東北限大山其外卽毛人云

斯く漢書に山島によつて居ると云へるは西國四國などをいふと見へたり又た唐書に日本は小國倭に幷せらるといひ又た南西海に盡く東北大山を限とは則ち大和より西南を本邦としていへる者にて是れ皆東北いまだひらかざるゆゑなり然れは阿彦の事記錄なきもむべなり是れのみならず同垂仁の御宇にありし事にて皆川愚の記に築前國博多の崇福寺僧宗嘩來りて京の大德寺某院の主となれり小石道と素より善ししば〳〵造る物語の序に筑前にて掘出せし金印の事に及べり則ち印する所の數紙を出して道に覩す道二枚を乞ひ得て一枚を皆川へ貽る其言に曰筑前那珂郡志賀島の民田に大石あるを思ひ數人にあらざれは去るべからず天明甲辰の二月是を掘しに石の下小石を以て柱として中空し是を探て一物を得たり形ち方にして土蝕す水にて足を滌へは純金にして且文あり因て是を藩府に獻ず府其儒臣龍井道濟をして其文を覩せしむ曰漢委奴國王印と大さ七歩八厘厚さ三分にして其鈕形蛇に似たり高さ四分重さ二兩九錢卽ち數十紙を印す嘩は道濟の弟なり故に其數紙を頒ち印し是を其府庫に藏むと云ふ是れ築前國委奴郡より金印を掘出せしによる日本紀によつて見るに垂仁の御宇怡土郡縣主の祖五十跡手漢に服し委奴國王の印を賜りたるなり委倭と音通す委奴郡を倭奴國とし本邦と思ひたると見も此事又た舊史になし印を掘出せしによつて考ふれは怡土郡縣主五十跡手漢に服し漢是れに金印を與へしこと明かなり又た神日本盤余彦尊とは人皇第一神武天皇の御事なり天照皇太神五代の孫鸕鷀草葺不合尊の第四の御子御母は玉依姫海中朱山の宮和修吉龍王の女なり天皇十五歳にして太子に立せ給ひ四十五歳の時日向國筑紫の兇徒を平らげ夫より讃州の賊を滅し給ひ六年を經て歸路なし〳〵五十二歳にして御卽位ゆり宇摩志麻治命道臣命を武衛とし給ひ道臣命の職を物部といふ日本武將の權輿なり天王御在位七十六年御壽一百二十七にして大和國橿原の都に崩と給へり唐は堯舜二代夏世十九代曆數四百余年殷は三十一代六百余年周は三十八代八百余年神武天皇は周の惠王の時に當れり唐土開らけしは日本より千年前なり盤余彦尊越後の賊を征伐の事は神武紀に見へず神武紀に明道見命又た率天物部以剪叛逆賊復帥軍兵平定海内とあり越後の賊を征伐せしも此中ならんか

○美麻奈彦爲越國造事

美麻奈彦才德衆に超たれは大若子命推舉ありて越の國造に封せられしとなり美麻奈人民を撫育し德義を敎けれは庶民次第に善きに化せり美麻奈又數學に善し世に美麻奈算と稱し今に傳ふ其胤射水郡草岡といふ所に在り久しく續て後草岡の康守といふ者あり其子康成幼稚より才智勝れ十八歲の春京都に赴く實に後冷泉院御宇治歷二年なり算學の博士善爲長を師とし算術を學べり康成美麻奈より傳へし算書を爲長に披露し精を研思をつくして算學大成し進士明經の二科までも學び得たり堀川院御宇寛治二年爲長に代て算學の博士となる同五年朝儀太夫に至り姓名を改め善爲康と號す元亨釋書にも算學博士善爲康晩年浮屠の法を信ず越中射水郡の人なりと書せり又新川郡荒川神社は八幡の神社の中にて美麻奈の神なりとぞ此神躰は土を雞胥の如くにして茅にて包み函にたさめ封じありしとなり其後爰に上野太郎左衛門と云ふ者あり新川郡を押領し荒川に邑郭を搆へ改ためて祝上刑部と名乘猶ほ武に秀ことを此神に祈る其驗のありけれは宮を修補す時に神体を見れは年を經て茅破土碎く即ち碎る土をあつめて人形を作り函に納め上に巳が姓名を錄す此人父祖の菩提のため大森といふ所に一精舍を創造し海岸寺と號す祝上大檀那なれは寄附の物多し海岸寺後富山へ移るといふ、荒川神社久ふして後又た修造し神遷せしに禰宜神躰人形なるをみて神道は幣を神躰とす何ぞ此人形を用んと云ひ之を棄て新に幣を作り祭りける時に村老あり古の事を知りて止めけれども用ひず村老勿躰なく思ひ潛に棄たる方へ行きて取あげ、捧げ來て荒川の東なる野の高みに瘞み後ち祠を造りて遷し奉り八幡宮と崇けるとぞ今新庄の八幡宮是れなり

柴ずるに美麻奈の神土を茅にて包めりと白虎通に載せり方色の土を茅に包み諸侯を封すること我國の古も唐の古の如くなりしにや

○武内宿禰地理撿察幷藤津の事

景行天皇二十八年武内宿禰をして北陸東道の諸州を撿察せしむ新川郡三邊といふ所にわたり暫く留る宿禰去る時藤津を殘せり藤津は宿禰の三男なり父に肖て才智あり時に林野辟されば鄕將をたすけ民に農務を敎るは思ふに自ら勉め率るにありとて三邊に田廬を作り丁壯をあつめて敎ゆ星を戴て出で星を戴て歸る浩りけれは新蓄多く辟て成熟も豐なりける然るに夏日民ひとしく病に罹り死せる者多し藤津炎天を侵し耕耨せしゆへならんと考へ夫より午時に休ませ晝寢せしめ未の刻より又出で務めしむかゝりけれは病る者なれにして農功も亦全かりしとぞ今に此地の農夫晝寢せるは藤津の示敎せるとなり藤津後ち病にかゝつて世をされり民之れを貴び神とし祭り武弟神社と號す或る夜里人の枕に立て告て曰く吾生て民をひきゐ稼穡を勸む今尙は暇なし社中に在るも僅かに午より未に至る一時なり此間に祭るべしと是より毎歲今に至るまで午より未まで祭れり民の餘に武弟の神は農に障なきもへ祭も一時なりといへり

藤津民に農を敎し所を敎場といふ後新田となり敎場開と號ふ三邊是れより武内鄕と稱す後ち高野鄕と稱し村號となれり今又竹内と改め藤津の後は竹内村の農民九郎右衛門にて後ち大野左京と號す、布市村神家山内美作も其類葉なりといふ藤津十九歲にて此地へ來り百八歲にて死せり

今に祭は春三月三日なり是藤津の來れる日なり

○皇輿御幸越民産物を奉る事

仲哀天皇越前角鹿の行宮に在し給ひ夫より越中へも御幸まし〳〵大臣武内宿禰大連大伴氏持供奉し礪波郡二十九日村と云ふ所に暫く鳳駕を駐めさせ給ふ（都を出させ二十九日にして越中へ御幸ゆへに村名となりしといへり）越の民山海川澤の物を献ず新川郡より千葉生の蒟蒻を奉り（千葉生今の血懸なり）礪波郡より小矢部川の支流祖父川に大なる魚ありしを捕て献せり巨口細鱗四ッの腮あり其名を知らざりけるに帝叡覽まし〳〵御笏にて魚の背を壓へさせ是は鱸なりと宣ひ庖丁を命せられ供御になりたり是をそぶ川笏の鱸といふ其後天皇征伐の事により筑紫にて崩したまふ應神天皇の御宇にれよんで越前の角鹿に神とし祀せ給ふ筍飯宮と稱せり

○南方書記大牧幷荷前祭の事

履仲天皇諸國の事を知しめさんとて南方といふ者を越に下し給ふ新川郡牧谷といふ所に來り居て一州の山海川澤村里民屋貴賤賢哲牛馬魚鼈に至るまで悉く書記して帝へ奉りけり是を南方の大牧と云ふ後ち此所を大牧村と稱せり又南方は鍛冶を善す鎗に似たるものを打ち山人猪熊を突く用に充て利してよく通り六寸より三尺許なるわり身に指にてれしたるようなる痕わり又龜谷山の鉄を取て鎖を打ち三邊の東南若狭川に鎖にて丸木數百を繋て橋とす是れ越中に橋を架たる始といへり越の船橋とて京人の歌に咏せしは是なりとぞ今爰に船橋村といふ古は大川なりしを多の溝洫に分

ちけれは今は大きなる川にてもなし又立山の一の谷といふ所絶險なれば南方鉄の鎖を作つて崖に懸けて攀縁をたすく今の人此鎖を小鍛冶宗近の作なりといへどもしからず又鉄の針金を作れり南方が傳にて後ち能州鍛冶に針金を作る者あり鉄を針金とするは他になし南方針金と云ふ能州の名産なりとぞ又南方民に荷前祭を敎へたるがこは先きなる君父又功德わりし人に報謝する祭なり南山の下に假屋を造り中に棚を架け新に豐たる禾稼黍稷時菓などを供へ炬火を以て先づ其靈を山に呼び迎へ一辨の香を炷きて祭る二夜三日にして退る又衆人炬火を燃し川澤に呼び送り歸つて火を縱ち仮屋を焚く南方始て祭し所を荷前村といふ櫻井邊の村里なり土人四天施祭齋事祭ともいひ復た野に祭らず戸ことに祭れりとぞ　齊明天皇即位二年勅あつて盂蘭盆會をれこなふ荷前祭は諸國にありけれども靈を祭るは盂蘭盆會に同じ趣意なれば自然に荷前祭は廢れたり上古は是を恩頼と云ふ大已貴命平國し給ひ恩澤天か下に及びければ靈を祭り恩德に報せしを恩頼といふ古語なり清輔の鈔に曰く曾丹の歌に

いとまなみかひなき身さへいそくなり恩頼とむへもいひけり

南方晩年舛霞せり里人神とし本郷に祠を造り武國神社と稱し祠れり

貞享の頃瀬戸の邊より化物出で人を喰ふよつて村々より人多くあつまり長鎌鎗など持て向ひ化物を見るに尺七尺余形人の如く面は馬に似て髪白く長く垂れたり皆怖て逃げるが化物追來て人を抓裂けり大勢引返し鎗にて突けれども通らず却て鎗を奪ひとらる中に高野村無量寺の番僧全

正といふ者あり鎗端をれそれて化物進み得ざりしが皆怪み化物全正を畏るゝにあらず鎗にあらんと各々鎗を見れば赤く錆て鉛の如じ全正の鎗は新研を發するが如くなれば是れ鎗の利にあり人とて鎗の來由を尋ぬるに矢野隼人といへる侍南方の鎗の利を知り求め得てありしが死後檀那なれば無量寺にねさむとなり化物は後ち瀬戸の巖窟に死せり數所に疵のありしはまさしく全正の鎗の通りしならんといふ

○御宸翰忠孝二字札幷に八幡村八幡宮の事

文武天皇忠孝の二字を自書せられ甲良人麿に命じ越路に下して民に忠孝を敎へ給ふ人麿忠孝の二字札を齎し越へ下りければ越の民之を聞て急き高梨野の丑寅内山といふ所に高く石壇を築き假屋を造つて爰に迎へ甲良御宸翰の忠孝なるを民に示し、詔を傳へ、夫より二字札を高梨野に高く建て置き民庶に敎諭せり久しく留る間に侍妾あり内山人麿を生り内山の字を大野人丸といふ相繼て爰に住す甲良死て塚を築き檀を植へ標とせしが後ち村となり馬見といふ又た舍人親王第三の御子越中へ下らせ給ふ事ありて暫く此所に在し給ふ故に内裏とも稱ずとぞ又た馬見駒見同所なれども馬見は上古よりの名なり駒見とは中古此所に駿馬を得たるもゆゑに號ずと聞けり忠孝の二字札年を經て磨滅せんとを恐れ祠を作り取れさめ其跡へ新に制札を立て置けり此社は今の八幡村八幡宮なり嵯峨天皇天長八年八月十五日神宮御創造あり別當は布目村眞福寺前堂々社人は嵯峨某なれて八幡割初め上野といへり後ち兵燹に罹らせ給ひけるが明應年中菊野の一族に有澤孫六郎忠治と云ふ者あり大野人丸の後ち大野某の女を娶る孫六郎武威逞しく婦負郡も彼に服し從ひければ猶更武内に秀ることを思ひ幸ひ妻の勸によつて八幡村八幡に祈願じ社堂を修造じ神階を昇め二字札の八幡を尊崇し社料として田十二町を寄附せり此田制札のありし所なれば札田町と稱す八幡宮より半丁ばかり南東の方なり浩りければ宮居も繁昌なりしが又た謙信守山城攻の時放火じ堂宇烏有となり神器も燒亡して纔に湯花の釜と鈴殘れり姓名を刻みあれば孫六郎が昔を證するに足れるのみ忠治が子孫孫六郎忠禍は阿尾の住人菊地が聟なり其子唯成母卒せし時阿尾の正光院に葬る正光院其頃日蓮の宗に轉じて正顯寺と改號す後ち當地寺町へ移り唯成佛像を刻せ母菩提の爲めに正顯寺へ寄附す臺座に菊地安宣の女正顯院日英及び年號月日刻みありしとなり

○長澤村各願寺の事

婦負郡長澤山各願寺の草創は文武帝御宇なり越中は天武帝第九皇子經宮の御領地にて經宮又越の宮とも稱せり皇子浮屠に歸依ましゝて祝髮し給ひ女犯肉食を斷ち白佛の像を刻み朝夕供養じ給ふ御年三十にして越へ下らせ三川島といふ所に宮を造り暫く爰に在じ文武帝即位の年長澤山に伽藍を建立じ給ふ是れ各願寺の開山白信院一品親王佛性聖人なり全寺は帝都勅願所にして北陸に冠たるより北叡山と號す文武帝北叡山の額字を御手書ありて下し給ふ文武帝崩じ給ひ元明帝の御宇和銅三年關東の縉徒官度の儀勅許ありて益々盛なりしとなり佛性聖人秘藏じ給へる瑠璃の半頭を北臺野に安置し宮を造りて民の爲めに田土の水用乏からず五穀の豊熟するを祈り給ひ三位長者

松森讃岐守を爰に置て領分の政務を委ね給ふ孝謙天皇天平勝寶三月十五日佛性聖人齡八十九にして遷化し給ふ其後何時か詳ならず關東の緇徒官度に比叡山に赴んとして越中を通りけるを各願寺の僧徒之を沮む此事比叡山に聞へければ叡山の徒大に怒り互に諍論に及けるを時の帝勅使を下し給ひて各願寺の僧徒を諭し給へどもきかず遂に勅使を害し更に比叡山と爭ひけるよつて比叡山の衆徒來つて各願寺を攻撃し遂に燒亡すといへり後ち再建もありけるにや太平記に建武二年十一月廿七日越中の守護普門藏人俊清ならびに井上野尻玄蕃元と長澤波多野の者ども尊氏の御教書を以て兩國の兵をあつめ叛逆を企つる間國司中院少將定清要害に就て長澤に楯籠れるに十二月十二日叛逆の徒雲霞の如くよし寄れば各願寺の衆徒義卒に與みし身命を輕んじ防禦せしかど一陣全きを得ず遂に定清戰死し寺院悉く兵火に亡びたり

三川島とは有澤村より井田村邊を云ふ西本郷村を島の内といふも當時よりの稱なりとぞ越の宮御所ありし處は島の内にて内裏といひ田面今にあり川を御門川といふ又た牛頭天皇の宮は今の針原村にて松森の居りし所今に長者屋舗といひ北代村に在り、里人の歌謠あり何の事か其義詳かならず「うるし千ばい朱千ばい金の鷄の一番朝日かゞやく夕日さすみつ葉うつぎの下にある」と傳へて今に至る、長者子孫に讓るべき寶の在所を知らすべき爲めに朝日かゞやく夕日さす三つはうつ木の下にあるとの意を表せるにや、又た松森長者の居宅庖厨の流しあり し邀は舊によつて鳥多く集るといへり三十年前此あたりより大なる瓶を掘出せしに駒率錢瓶に滿てり小竹村社家若宮も二三錢を乞ひ得て今に所持せり各願寺昔は山上にあり勅使を殺し葬りし所を勅使塚といふ又た花水谷釣鐘谷あり經坂は佛性聖人經を書寫し埋み給ひし所なり兒落とは比叡山の徒兒を谷に追ひ落して殺せし所なり又た經坂の西なる山の頂に佛性聖人の廟あり

各願寺庭中に數圍の櫻あり春三月富山より貴賤とも花見に行きて盃を擧げ吟賞し詩歌などを枝毎に繫げり

正市公御放鷹の時各願寺に御腰を憩られ花見の宴を設け給ふ南部景春陪從し櫻花の詩幷に長澤の記あり左に錄す

遠見如雲近似霞、仙顏含露玉消瑕、傾城自在無言裡、不用懇懃解語花、

長澤記

粤中富城之西、緣山行三里、有村名長澤、有寺曰各願寺、其爲境凹方山足所會也、其山勢逕綿至于東北、而窈然幽映者安養山也、山脉不斷自南走東彌遠彌高、巍峨崛起于雲表者立山也、遠汀幽渚綠水分流、而映帶于寺前者神通川也、登其西岡回首焉、西則俱利伽羅石勒之兩峯、堆然如雲鬟霧髻之並出也、北則蒼溟滌漫、長天一色、而岩瀨與方能州之海嶠、悉在一顧之間是勝地之大觀也、若夫朝暈夕陰、風煙花鳥、四時之異觀則千態萬狀焉、能筆力之所得盡乎、村之父老相傳言、此寺古爲叡山之屬、其詭麗之極、實冠北陸道、因號之北叡山、後醍醐帝時、會關東緇徒赴宦度于洛之叡山、道出于此寺、寺僧沮之、叡山之徒大怒來侵、帝遣使勅諭不可、遂害勅使、其葬所

尙在、俗呼爲二勅使塚一、自下後屬中于密宗上而寺淀敗、後又經二寇火一、化爲二空原一者久矣、至二寛文二年一、釋
政宥者再興二此寺一、比二之於古一、雖二堂宇狹隘一、猶足レ存二十一於千百一、嗣二于政宥一、曰二秀遍一、嗣二秀遍一、曰二
寛仁一、以至二今僧弘賢一、富城　嘗使君聞レ之、召二僧弘賢一而問二其事實一、對曰、實之所レ聞、亦不レ過二父老
所レ傳也、舊記與錯悉罹二兵火一、寺之遺事今無レ知二其詳一、獨其足レ徵者、唯有下寺僧玄弘勸二化檀越一、書二
補闕若干之書上耳、其文曰、文武帝大寶元年、創二立此寺一、開山曰二佛上上人一、其末題曰二大永三年玄弘敬
白一、此書□得二之民家一、初知二其創立時一也、而其所謂玄弘者不レ知二佛性弟幾世之僧一也耳、觀閱遺跡今
尙在二山谷間一、而耕耨之民得二佛器一者、往々有レ之、嗚呼自二大寶一來千有餘年、世事已變一何至二于此一、
當時寶閣金刹之地、今欲レ求二其片瓦尺材一、而不レ可レ得、徒見二荆棘蓁蕪狐狸奔走一也已、加之并二其遺
事一而亡矣、登臨之間豈可レ不レ傷二其心一哉、
使君聞二賢之言一、愀然大有レ感二于興廢一、因使下畫工圖中其地于屏上、命二臣景春一曰、宜下作レ記書中于其上、
景春謹應レ命、收二父老及賢之所レ言、以爲二之記一、

○六治古孝行龍女妻となり若干の新田を闢く事

幷に六治古弟三人の事

長澤山古へ篠山といふ、時に真治古なる者住めり國勝長狹の胤なりといへり四子あり伯を六治古、
仲を村治古、叔を真兒古、季を羽根兒古といふ真治古死て六治古繼ぐ弟三人別居し各黍稷を作り家
業とせり六治古生得質朴にして資食に足れるほど黍稷を作れるのみ力を竭して母につかふ鄕里至

孝と稱せり六治古常に思ひける家貧ければ母を養ふも心のまゝならず幸ひに今年は黍稷の取得も
例より多ければ交易し魚を求めて母の膳に供んと急ぎ市に出でしに折しも魚なし獨生ける鮭魚の
ありけれは是を買得て苞とし擔ひ歸りしに窮冬の事なれは雪積む路のはかもかゞ日暮に下須川の
ほとりに至り暫く休ひ、擔ひし魚のあかりたるやと試みに苞を解きみしに少しも動かでありけれ
ば忽ち痛む心れこり苞のまゝに水に浸しけれは少頃あつて鮭魚腮をうごかし水を呑むと見へしが
忽ち鰭ふり立て波に入て失せにけり六治古驚き捕へんとすれども影も見へぎれは爲方なく茫然と
して家に歸り其よし母に告げゝれは母の曰く其方の孝心魚を感むるよりもまさりて嬉しけれは必
ず愁ふることなかれと常よりも快けなるに六治古心も落付け年も漸々暮れけれは來る春の用あ
りて六治郡村へ行き留守には母ひとりありけるに二八ばかりの美目よき女の來て宿を乞ふあり母
怪み何許の人ゾと問ひけれは女の曰く我は魚津あたりのものなるが降り積む雪に路をうづみ迷ひ
あるきて日を暮せり一夜を明させ給はれとうちしぼれてゞ頼みける、雪にまみれてしよぼ濡しそ
の形勢も哀れなり母見に堪へかねさあらは此方へと打つれ内に入り柴火にあてゝもてなしける程
なく六治も歸り來れは母ありしよしを語れるに六治聞てよくも宿し給ふといひけれは母も女もよ
ろこびて其夜は明し侍りぬ明日にもなりたれども女歸る氣色もなく母にかはりて機轉よく朝饗暮
炊の營みより透間かゞへて母の起居を問ひけるほどに六治も母と諸共に嬉しく思ひ女の歸りを問
ふことゞなかりし斯て春も迎へ三人共に齋きて物がたりなどしけるに女母にむかひ云ひけるは我

身一夜と頼みまいらせしに歸る心もなかりしは我里に父母も在さず兄なる人に養なはれしに嫂の我をうとみてかげの噂もわしけれは兄人とても情けなし浩りしはどに久しく外へ出でたりしが今又歸らん事のかなしさよ母人の御情けに下婢ともし使ひ給はれと頼みけるを母熟〻聞てされは社此方よりも問ひ申さんとぞ思ひつれ不思議に宿しまいらせ一日二日の其内に千世も馴たる心せり今又歸り給はゞ嘸や名殘のれしまれん里にまたるゝ身にしなくは心まかせに留り給へといと懇ろに聞へしからに女婿しく思ひ心も落付く、春五ッ日も過きぬれは紡織の業に精出して人の十日は一日に果敢ゆくことのたゞひなく殊に老母に敬ひ事ふるは六治が孝心も及びがたく六治が三人の弟へも心を尽して深切なれば彼等もかゝる人をして六治に妻はせたく思ひあへりもとより老母は六治古の三十に及んでいまだ定めの妻もなく常に辛苦に暮らしければ老の心のやるせなく或日女に云ひけるは世に思ふ事のまゝならば其方を六治が妻として二人が中をみるならば露の命の夕日に消ゆるも何かうらみん、もし佗しき住居も厭ひ給はずは六治が妻となり我をあはれみ給はれといひければ女しはしは返答もなかりしが顔ふりあげ老母の情けは我が身の面目なればいなみ申すはなけれども六治古の思召、御兄弟もよしとは思ひ給ふまじ何とか答へまいらせんといひければ母かさねてれちこちの思ひはせさせ給ふなよ今いふ事をいなみ給はずは我らにしたがひましませとて六治并に弟等へも母此よしを語りけるに何れも母人の御心に適ひましまさはともかくもよきにはからひ給へといひけるに母喜び驚く吉辰を擇び婚姻をゞ整へける幾程なふしてたゞならぬ身となり已に十月を彌りて男子を生みて是を天兒六郎忠清といへり六治古の妻思ひけるは黍稷のみ作りては取得も少なければ廣く田を辟き秧を植にんと囊中より多く布を出し六治古をして農具牛馬にかへしむ妻云ふ馬は宮崎にいたり給はゞ賣人あるべしとよつて六治古宮崎へいたる幣川の邊に老翁の白馬を牽き來るあり六治古を招き馬を求むるならば賣らんといへり六治近よりさあらば布に易て給はれと數端の布を授け馬をうけ取て歸らんとす翁曰此川に蛇ありて人馬の脚の嚙む毒ありて人馬忽ちに死す是をさけんには此蛇藥を嫌ふゆへ藥を以て履を織り之を足に着きて渡らば其患なしといへり六治答謝し敬のごとくして難なく家に歸りける夫より六治の妻多く人を備ふて墾闢し西山に行きて水を引き若干の新畓に漑ぎ秧を挿み三時怠りなく精力を勵ましければ禾稼穣〻として秋成多かりける年を經て六治家資豐裕となり鄕里肩を比ぶる者なく老母の老養足らざる事ぞなかりし兒七歳にたゝる比に老母病に罹りつゐにはかなく世を逝れり後ち少日あつて婦、夫に辭して曰我は是龍女なり君が至孝によつて龍王君が供養をたすけしむ今まさに歸らんとす兒もし我を慕はゞ山中に來て新池を求むべし是我歸る處なり再び相見ることあらんといひ訖り空を凌いで去る時に雷雨晦冥なり六治古父子哀號して留めんとすれどもあたはず卒にいかんともすることなし、兒母を慕ふの切なるより其言にしたがひ行きて池を求め其畔に臨めば母の形影髣髴として水面に走り過ぐ今是を稱して走影池といふ已にして六郎壯年に及び志封侯にあり復た産業を治めず博く衆藝を綜べ最も兵策に善〻時に天下擾乱闘伐止まず六郎瀧山の險に依て城を築き姓を天兒

と稱し威を北陸に震ふしかるに齢傾き竟に志を得ずして死す六治古の弟村治古は針原村に住せしとなり貞兒古は小沼と云ふ所にあり馬術に善し兼て馬の監訂すぐれたれば諸方より多く馬を牽き來て監訂を乞へるゆゑ又愛にて馬を賣買せり後ち小沼と稱せず駒市と云ふ今市村にて中古まで駒市のありし所なり又貞兒古高梨野に駿馬を得たるゆへに是より此所を駒見村と稱したるとなり羽根兒古居りし所は羽根村といふ羽根兒の田六七月の旱に水涸れ秧盡く稿んとす六治古の妻龍骨車を作り水をあけて是を救ふ今べろ川といふ羽根川の事なり俗に龍骨車をべろと稱すといへり羽根兒古後ち繼て羽根村にあり農民文兵衛六左衛門といふ

貞治古の妻は今の麥島の神是なり此神五穀豊熟を守りた誓ありて我を祈らば試みに社樹を拆べし其樹枯なば誓ひ空しからんと宣ひける是より農民鎌を社樹に打ちこみ祈願せるに靈驗あり今に社樹は數多の鎌打ちこみありしかれども其樹枯ずして榮へり此あたり古は篠野倉野野宿野の名あり篠野は今の三田村邊にて倉野は笹倉野宿野は金屋安田邊なり、六治古に宮崎にて馬を授けし翁は今の踏懸の神なりと云ふ此時藁履を着きて水を渡り毒蛇を避くる事を教へ給ふゆゑに今に此宮に多く藁履を懸け、踏懸の明神と稱す又た六治古のを始めて田を辟きし所を早稻田町といふ又た走影の池の流れは各願寺閑伽の水に汲みたるゆゑ花水と稱し溪を花水谷といへり分れて北よと西へ流るゝを北川といふ龍女歸し所はそれより上の山間なり爰を走影の池といふ曾て龍女六郎へ遺言し汝成長し侍となり城を築かは瀧山は堅固の地なり山中に白瀧といふ井あり深きこと十丈其水脉東なる谷より通じ一日に數斛の水を得、乏しき事なかるべし又た蓮を植へ花の咲ける紅白によつて其年の水の多少を知るべしとて蓮の實を六郎に授く教の如く東なる水脉通ずる處に蓮の實を種るけるに次第に繁りて大なる蓮池となれり然るに久ふして後ち飛州國司姉小路宰相頼綱の末子富丸成長し有原勘解由左衛門尉安信と名乘り瀧山に住せしが蓮華池をうづみ父祖の墓地とし寺を建立し池の名によつて蓮華寺と稱すといへり又た天兒六郎の後ち若林雅樂介忠久と云ふ者あり六郎を去ること幾世なるをしらず下間筑後入道の逆に與みし天正年中越前にて戰死す天兒若林同性なり其子孫農に服し相繼て長澤村に住し當代の孫七に至る予曾て孫七の需めに應じ其家譜を書けり左のごとし

越中婦負郡長澤村若林氏者、其先世曰二國勝長狹一玄古神胤也、嘗佐二神功皇后一征二三韓一者、其後曰二貞治古一嗣二貞治古一曰二六治古一少喪レ父、獨與レ母居、爲レ人謹厚、尤以二巨孝一稱二鄉黨一家貧躬耕、僅以給二資食一年已三十、母爲求レ偶未二之得一也、忽一日昏暮有二女失レ路來乞レ宿、母憐レ之止宿焉、至二明日一女猶不レ去、遂跪二母前一言、我養二於兄一兄信二嫂讒一而數謫レ我、餘レ是久出在レ外、今不二復欲一レ歸レ家、幸以レ我爲レ婢、以代レ操二井臼一敢不レ辭二勞苦一辭氣悽惋有二足レ感二動人者一母即許レ之、留委二內事一、黽勉不レ怠、績レ麻織レ布、功十倍常婦一母之意大悅、遂欲レ與二六治古一爲レ妻於レ是乎鳳占協レ吉、合巹禮成、居無レ何有レ身彌月生レ兒、是爲二六郎忠清一婦更欲二廣レ田多畜レ穀、因以レ布易二牛馬一自率二傭夫一墾二闢境埴地一行二西山一開レ渠引レ水、以溉二瘠新畜一者若干頃矣、今之山田川是也、於レ是乎稼穡大

成、家資豐盛、比及二兒之著亂、姑已頹齡、一朝寢疾、奄忽遊世、後少日婦亦辭夫、曰、我是龍女也、緣二君至孝一、龍王令助二君供養一、今將婦、兒如幕、我、須下來三後山一求中新池一、焉是我歸處也、我得二再相見一、言訖、凌空而去、時雷雨晦冥、六治古父子哀號欲二止之一、卒無二奈何一、迺從二其言一、行求二池一、果在焉、四郎之母之形影髣髴、平走二過水面一、今尚稱之曰二走影池一、既而六郎年益壯、志在二封侯一、不二復治二產業一、博綜二兼藝一、最善二兵策一、每見二高山大澤一、輒規二度旨一、畫軍營處所一、時天下擾亂、英雄割據、鬪伐不止、六郎依二險于瀧山一、築二城一、稱二姓天兒一、震二威北陸一、馬齒已長、莫不二得志而死一、厥後有二若林雅樂介忠久者一、不二知下距二六郎一幾世上也、與二下問筑後入道之逆一、戰二死于越前一、時天正八年也、忠久之後復二干農一、連綿在二長澤之地一、元和五年夏、三州刺史中納言利常公、嘗一田二其地一、乃駐二驂若林氏一、時當二戶者稱二喜兵衛一、爲二鄉長一、公問二家之來由一、喜兵衛對以二神胤連綿繼至二千今一、公歎嗟者久、乃導使二言其意所一欲焉、喜兵衛拜稽首曰、山田川者龍女之所二開也一、幸使下我一家而得上漁二此水一、是享二龍女之遺利永久一也、如得二請則歲稅二銀芳千一、公手書許二之一、其書辭之下印二滿字一、圓經一寸許、它收票二、其一亦公之手書、紙尾龍馬之印、亦圓經八分許、其一寺西若狹守、永原土佐守、時稱二大臣一者連署、有二印章一、皆藏二諸家一、喜兵衛之後曰二市兵衛一、數世至二孫七一、孫七天資聰敏、營生之餘歷二覽我國史籍一、略通二古今之事一、可二謂二好事者一矣、邇使下畫工摹中真治古及六治古伏儷、并六郎五人之像上爲二一幅一、又欲下請二其家系一、以詒中之子孫上來請二之余一、因取下所二載二泉達錄一及他所二傳聞一者上刪潤爲二一通一、以應二其需一云

○牛頭角力來由の事

村治古は針原村に住みし子孫相繼て農を業とす其家兄弟の耆田の中より瑠璃の牛頭を掘出せり何物か知ざりるも人にも見せ問ひけるに或人曰是は各願寺開基佛性聖人の法主たる時愛に牛頭天皇を安置し給ひしが後ち兵火に罹つて亡びたり是其牛頭ならんと果して然り因て家に秘藏し春秋祀けれは其靈ありて五穀豐熟次第に家富榮へ後ち弟叔父の養子となれり叔父は新川郡猪俣野といふ處に居れり今の新名村なり弟兄にひかひ牛頭は二人して掘出したれは我家にも遷し祀たしと云ひ兄許さゞれは諍ひとなれり兄云ふさわらは角力をとり勝ちたる方に藏むべしと弟諾し夫より每歲角力をとり勝ちたるかたに藏め來りしが其後三年續きて弟負け牛頭を久しく遷し藏めざれは五穀の取得も少く次第に窮しける兄憐み今年は汝の方へ遷さん藏めて祀べしとて弟のかたへ遷せり是より兄弟隔年に藏めしが後ち兄の田地に祠を造り牛頭を安置じ秋八月十六日牛頭を掘出せし日を以て祭り兄弟各奴僕を出し角力をとらせ五穀豐熟を祈ける是今の百塚村牛頭天皇なり後ち其事の絕たるが近年今市村の農夫與四兵衛と云ふ者の工夫にて廣く田地を闢き遽く水を引きて稻を養ふ是を四万石用水と云ふ又た牛頭天皇に稼穡農熟を祈り舊によつて八月十六日の祀日に角力をとらせけるとなり

○大件家持の事幷に名勝倭歌

聖武天皇御宇天平十八年閏七月從二位中納言大伴宿禰家持越中守に任せらる此卿は淵才雅思にし

成、家資豐盛、比及二兒之婚娶、姑已頹齡、一朝寢疾、奄忽逝世、後少日婦亦辭夫、曰、我是龍女也、緣二君至孝一、龍王令レ助二君供養一、今將レ婦、兒如幸レ我、須下來二後山一求中新池一焉是我歸處也、我得二再相見一言訖、凌空而去、時雷雨晦冥、六治古父子哀號欲レ止レ之、卒無二奈何一、廼從二其言一、行求レ池、果在焉、聞レ之母之形影髣髴平走二過水面一、今尚稱レ之曰二走影池一、既而六郎年益壯、志在二封侯一、不二復治二產業一、博綜二衆藝一、最善二兵策一、每レ見二高山大澤一、輒規二度旨一、畫軍營處所一、時天下擾亂、英雄割據、鬪伐不レ止、六郎依二險干瀧山一、築レ城、稱二姓天兒一、震二威北陸一、馬齒已長、竟不得レ志而死、厥後有二若林狛樂介忠久者一、不レ知下距二六郎一幾世上也、與下問筑後入道之逆一、戰二死于越前一、時天正八年也、忠久之後復二干農一、連綿在二長澤之地一、元和五年夏、三州刺史中納言利常公、甞一田二其地一、乃駐駕若林氏一、時當レ戶者稱二喜兵衛一、爲二鄉長一、公問二家之來由一、喜兵衛對以二神胤連綿繼至二于今一、公歎嗟者久、乃導使レ言二其意所レ欲焉、喜兵衛拜稽首曰、山田川者龍女之所レ開也、幸使下我一家而得上レ漁二此水一、是享二龍女之遺利永久一也、如得レ請則歲稅二銀芳千一、公手書許レ之、其書諱之下印二滿字一、圓經一寸許、它收票二、其一亦公之手書、紙尾龍馬之印、亦圓經八分許、其一寺西若狹守、永原土佐守、時稱二大臣一者連署、有二印章花押一、皆藏二諸家一、喜兵衛之後曰二市兵衛一、歷世至二孫七一、孫七天資聰敏、營生之餘歷二覽我國史籍一、略通二古今之事一、可レ謂二好事者一矣、邇便下畫工摹中真治古及六治古仇儡、并六郎五人之像上爲二一幅一、又欲下請二其家系一、以詣中之子孫上來請二之余一、因取下所レ載二泉達錄一及他所二傳聞一者上刪潤爲二一通一、以應二其需一云

○牛頭角力來由の事

村治古は針原村に住みし子孫相繼て農を業とす其家兄弟の耆田の中より瑠璃の牛頭を掘出せり何物か知ざるもゑ人にも見せ問ひけるに或人曰是は各願寺開基佛性聖人の法王たる時爰に牛頭天皇を安置し給ひしが後ち兵火に罹つて亡びたり是其牛頭ならんと果して然り因て家に秘藏し春秋祀ければ其靈ありて五穀豐熟次第に家富榮へ後ち弟叔父の養子となれり叔父は新川郡猪俣野といふ處に居れり今の新名村なり弟兄にひかひ牛頭は二人して掘出したれは我家にも遷し祀たしと云ひ兄許さゞれは諍ひとなれり兄云ふさあらは角力をとり勝ちたる方に藏むべしと弟諾し夫より每歲角力をとり勝ちたるかたに藏め來りしが其後三年續きて弟負け牛頭を久しく遷し藏めざれは五穀の取得も少く次第に窮しける兄憐み今年は汝の方へ遷さん藏めて祀べしとて弟のかたへ遷せり是より兄弟隔年に藏めしが後ち兄の田地に祠を造り牛頭を安置し秋八月十六日牛頭を掘出せし日を以て祭り兄弟各奴僕を出し角力をとらせ五穀豐熟を祈ける是今の百塚村牛頭天皇なり後ち其事の絕たるが近年今市村の農夫與四兵衛と云ふ者の工夫にて廣く田地を開き遠く水を引きて稻を養ふ是を四万石用水と云ふ又た牛頭天皇に稼穡農熟を祈り舊によつて八月十六日の祀日に角力をとらせけるとなり

○大件家持の事幷に名勝倭歌

聖武天皇御宇天平十八年閏七月從二位中納言大伴宿禰家持越中守に任せらる此卿は淵才雅思にし

て倭歌の先達なり此地に詠草多し又た餘所にかはりて物の名の異なるは皆此卿の名け給へるなり
家持屋敷とて今に射水郡氷見の丸山にあり抑も此卿は大納言贈從三位安麿の孫旅人の子にて天平
元年己巳に出生し給へは此地へ下り給ふは十八歳の時なるべし從三位中納言、東宮太夫忠、大辨大
宰少貳などを經、征夷將軍に任し給ふ又た桓武天皇延暦四年大伴繼人竹良等東宮太夫陸奥出羽の
按察使鎮守府將軍大伴宿禰家持を射殺しけるとも見へたり果して延暦四年に薨じ給へは行年五十
七なるべし家持卿より越中は大和あたりに次て名所多し萬葉集秋の雜歌などに載する所を以て見
るべし又た其名所の今に詳かならざる所もあれは萬葉集布勢の湖二上山の賦などのうちに名所よ
みつゞけたる所にて見れは大概知れるなりゆゑに名勝の證歌を左に錄す

伊豆部山　わかこゝに忍はゝしらす郭公いつへの山を鳴き越らん　慈鎮

卯花山　四十あまり衣はかりをぬきかへて心は同し卯花の星

契沖云いつへの山をいつれの山と見、又た卯花山うの花の咲ける山は皆稱すべしと是は名所を
うちけしたる說なり家持卿歌よみ給ひしより名所となりたれは契沖の說非ならん

礪波山　妹か家に蜘のふるまひしるやらん戸波の關をけふそ來れは　顯季

戸波關　いつくにか我宿はせんやまたちの礪波の關に越そかねぬる　衣笠大納言

越路にはそり行はとに成にけり戸波の關の雪の曙　仝

名所方角抄にそりといふ物して北國の雪中にのりて行なりかぢきといふものは別の歌などには
みゑすとあり

遊覽布勢海水一賦一首并短歌在射水郡舊江村

物乃敷能夜蘇等（八十伴）母乃乎（男）能於毛布（思）度知許巳呂也良武等宇麻奈氷底宇知久知夫利乃之
良奈美能安里蘇爾與須流之夫多爾能佐崎多母（徘徊）登保理麻都太（地名）要能奈我波麻須義底宇奈比河
波伎欲吉勢其等爾宇（鷗）加波（河）多知可由吉加久遊岐見都禮騰母曾許母安加爾等布勢（地名）能宇禰
爾布禰宇氣須惠底於伎弊許藝邊爾巳伎見禮婆奈藝左爾波安遲牟良佐和伎之麻末爾波許奴（未來）禮波
奈左吉許巳波久毛見乃佐夜氣吉加多麻之久氣布多我禰夜麻爾波布都多能由伎波和可禮受安里我欲
比伊夜登之能波爾於母布度知加久思安蘇婆牟巽麻母見流其等
布勢能宇美能意枳都之良奈美安利我欲比伊夜登偲能波爾見都追思努播牟

（四月廿四日）

右越中守大伴宿彌家持作之

立山賦一首並短歌

安麻射可流比奈爾名可加須古思（越）能奈可（中）久奴（國）知設（中悉）登其等夜麻波之母之（繁）自爾安
禮登毛加波波之母佐波爾由氣等毛須賣加未（皇神）能宇之波伎伊麻須爾比可波（新川）能曾能多知夜麻（
立山）爾等許奈都爾由伎布理之伎底於波勢流（所帶）可多加比河波能伎欲吉瀨爾安佐欲比其等爾多都奇
利能於毛比須疑米夜安里我欲比伊夜登之能播仁余曾能未母布利佐氣見都々余呂豆餘能可多良比具
佐等伊未太見奴比等爾母都氣牟於登能未毛名能美母伎吉底登母之夫流我禰

多知伎麻爾布里於家流由伎呼登巳奈都爾見禮等母安可受加武賀良奈良之
可多加比能可波能瀬伎欲久由久美豆能多由流許登奈久安里我欲比見牟

大伴宿禰家持作ゝ之　私考天平廿年ナルヘシ　（四月廿二日）

二上山賦一首　在射水郡

伊美都（射美）河伯伊由伎（往）米具禮流。（同）多麻久之氣。布多我美山者。波流波奈乃佐加利爾。安吉乃葉乃（紅葉）。爾保弊流等伎（時）爾立出底。布里（振）佐氐見禮婆可牟加良夜（從神）。曾許婆多敢刀伎（貴）夜麻可良夜。見加見（欲保）之加良武須賀加未能（皇神）。須蘇末乃夜麻乃。之夫多爾能。佐吉（崎）乃安里蘇（荒磯）爾。阿佐（朝）奈藝爾。餘須流之良奈美。由奈敢藝爾。美知久流之保能。伊夜麻之爾。多由流許登奈久。伊爾之弊由。伊麻乃乎都豆（現）爾可久之許曾。見流比登其等爾。加氐底之努波米（乎都豆ハ現ナル「之外ニモ目メリ）夫多爾能佐伎能安里薄爾。與須流奈美。伊夜思久思久爾。伊爾之弊於毛保由多麻久之氣敢多我美也麻爾。鳴鳥能。許惠乃孤悲思吉登伎波伎爾家里　雅公鳥ノ聲ナリ

右三月三十日依ゝ興作

大伴宿禰家持

須蘇末山　谷の戸は夕鹽さしてゐる衣すそまの山に秋風そぶく　光俊
菅　山　心にはゆるふ時なくすかの山すかなくのみや戀わたりなん　家持
鵜坂杜　いかにせんうさかの森に身はすとも君か偖の數ならぬ身を　俊成
木葉杜　しくれ雨なくしふれは名にしれふ木葉の森も色かはり行　光俊

石瀬野　伊波世野爾秋芽子之努藝馬並始應獵太爾不爲哉將別　家持
鷹かりは契沖鷹のとや出したるを云ふ小鷹にまさらはすべからず
三島野　やかたれの鷹を手にすへみしまのふかふぬ隈なく月そへにける　仝
杉　野　杉のゝにさほとるきふすいちしろく音にしも鳴ん籠妻かも　仝
杉野は嬬負郡豆麻は雉のつまとひて隱つまのやう灼なくなり菅雄云さほとるきふすは雉をとる事なり又只とりたる雉ともいへり
雄神川　をかみ川ねしろ高かやふみしたきとる芦つきもせなか爲とそ　俊頼
片貝川　片かひの川の瀬きよく行水のたゆるとなくおりかよひみん　家持
碎田川　紅の衣にかひしさきた川たゆるとなく我かへり見む　仝
賀比川　めひ川の早き瀬とにかゝりさしやそともものをは鵜川立けり　仝
叔羅川　しくら川瀬を尋つゝわかせこはうかはたふさねこふろなくさに　仝
射水川　朝とこにきくはるけし射水河朝こきしつゝうたふ船人　仝
藪並里　やふなみの里にやとかり春雨にこもりつゝふむと妹につけはや　仝
夜夫奈美里の居所都追牟はつゝしむ雨をつゝしむとつくるやとなり
田子浦　多枯の浦の底さへにほふ藤浪をかさしてゆかんみぬ人のため　人丸
長　濱　松田江の長濱過てかなひ川清き瀬ことにうかはたち（下畧）

松田江の濱の遠く長きなるべし

有磯海　いはて思ふ心ありその濱風に立白浪のよるそわびしき　讀人不知

奈古湊　浪さはくなこの湊のうら風に入江の千鳥むれて立なり　伏見院

雪島　雪島の岩ほにねふる撫子は千世に咲める君かかさしに　家持

雪島はから島なり

垂姫崎　神さふるたるひめの崎漕めぐりみれどもあかすいかに我せん　田之史福丸

澁谷磯　駒なへていさうちゆかん澁谷の清き磯をによする波見に　家持

越湖　恨ても何にかはせんあはてのみこしの水うみみるめなければ　俊成

古江村　五月雨はなるえの村のとまやかに軒までかるゝ田子のうら浪

大野路　大野路はしけらはしけし茂くとも君しかよはゝ道はひろげん　無名

伊久里森　伊毛我伊弊爾伊久里乃母里能藤花伊麻許牟春毛都禰加久之見牟

伊久里の森南部十丁ばかりにありと云此歌の前後に澁谷の磯二上山奈古の蜒などあり其上越中にいくり谷といふ所あり秋猿鬼に長伯越中に出したりむべなるべし

奈古海　奈呉能安麻能都里須流布禰波伊麻許曾婆布奈太那宇知底安倍底許藝泥米

顯照云舟柵は舟の南方へ板を打付て其上をわりくと又安倍底を契沖あへき潤なりと云へりこゝはこき出してとわれば敢にもや

延槻河　立山のもきしくらし母這槻の河の渡瀬あふみ都加須毛　家持

雪のとけて來りしもといへり馬の鑑を衝となり此次に萬葉集に氣比太神宮へ赴き參り給ふ海邊の歌あり其うち羽咋の海とあり能登にも氣比の宮あるが又た其次に能登郡香島津より船を發すとありて二首のうたあり其次に鳳至郡にて渡二饒石河一のうたあり其次に從二珠洲郡一發レ船還二大沼郡一の時泊二長濱灣一見二月光一の歌あり契沖云大沼郡といふは越中にもなし和名集を考ふるに羽咋郡に大海郷あり是は延槻河を渡り羽咋郡になします氣比の神に詣てそれより鳳至郡にいたり又た珠洲郡に至り又た舟にて羽咋郡へ歸給ふなるべししかれば海郷の二字を誤つて沼郡となせるなるべしとぞ又大沼郡を大海郡と誤りしはさもあるべし家持卿氷見に在り遠く延槻河を渡て能登の羽咋の氣比の宮に詣り給はんや契沖國學に於ては古今獨歩なれども其國の地理を知らざるゆへならんといへる人あり

見奈岸山　宮崎の事といふ薮並の里は倶利加羅の邊なり又た堺御關所に薮並の神社あり爰をもしか云へりとぞ、又叔羅川は堺川の事なり此川宮崎より海に入り此所に生ずる海苔は叔羅海苔といふ名物なり、賀比川は今の若狭川、碎田川は婦負郡にて此はとりに昔碎田神社あり後ち田屋村へ移せりと云ふ、伊豆部山は小井波の夫婦山の事、伊久里の森は八尾邊にいくり谷あり、卯花山は八尾にあり、又た氷見にもあり、又た五箇山の中松尾邊にもあり何か是ならん大野路は高岡の邊蓮華寺村しやくし橋より北放生津までをいふといへり越の湖は堀岡の窩なりとぞ垂姫の崎、

松田江の橋、平布崎、宇奈比川、宵の山、木の葉の里、皆氷見邊なり射水川雄神川は六道寺川をいふ萬葉に二上山、奈古海、天田山、國府の風景をつゞけたり奈古は放生津なり仝所に今も奈古町あり三島野は小杉の北の方をいふ信濃濱、立島うなひ川は氷見の邊か、戀山詳ならず伺飯古宮は越前、いや彦の神は越後羽咋海は能登なり

過二澁谷埼一見二巖上樹一歌　樹名二都万麻一

磯上之都万麻乎見者根乎延而年深有之神佐備爾家里

東風伊多久布久良之奈古乃安麻能都利須流乎夫禰許藝可久流見由

越の俗東風を安由乃可是と謂ふ

乎敬乃佐吉許藝多母等保里比禰毛須爾美等母安久倍伎宇良爾安良奈久爾

伎美我等波須母は君が問ふの意にて不問にはあらずとも云ふ

伊可爾世流布勢能宇良曾毛許已太久爾吉民我弖世武等和禮乎等登牟流

いかにせるはいかほど面白きふせいなればいくばくもとの意なり

○鵜坂神社の事

鵜坂神社は弘仁十一年　峨嵯天皇勅願所にて越の大社と勅定ありけるとなり然るに其亡びしは各願寺隆圓阿闍梨死後暫く住職も定まらざるゆへ隆圓の弟子隆性僧都を願ひ住職とす時に領地も減せられ礪波郡は武士の領となる此頃安養寺順慶より堺を改めしに經界漫りなりければ爭ひれこりける各願寺隆性大に怒り山内の衆に申されけるは鵜坂神社は婦負郡に屬するにより今度安養寺へ替地ありて各願寺の領たる鵜坂川を堺とし押領せんとす其上近年丹波の局を申下し寺院の作法を乱る開く所に依れば順慶越一國を領すべき望あつて常法坊法印、九里權藏二人に事を謀らせけるよし旁以て猶豫すべからずと院代權僧都惠春を上洛せしめて訴訟せり訴牒天聽に達しければ速に安養寺順慶が暴慢を禁止ありて水谷藏人の指揮を受くべしとなり（水谷は天子の代官にて婦負郡館本郷村に住居す）水谷へも此事勅宣ありければ水谷堺を檢察し鵜坂の社は各願寺之を受持しすべて鵜坂の寺院は安養寺へ移すべしと即ち毀へき寺院等を指圖し此節水谷常法坊に止宿せり安養寺各願寺より人數を出し假屋を作り留り居けるが或夜常法坊より失火し折しも風烈敷猛火燃んになりければ水谷驚き何事やらんと召迎し者共を引纏ふて避けんとす各願寺の僧徒は安養寺より遺恨にて燒けゐと思ひ安養寺方よりは各願寺より燒とこゝろへ急ぎ防げと人數を出す、藏人は館へ歸らんとしけるを安養寺方より各願寺の將と心得、無二無三に切て懸る藏人なりといへど耳にも入れず藏人手の者共に下知し防ぎ戰ふ各願寺の衆徒は馳せよる者を切立て社堂燒かじと禦ぎたり、藏人は不虞の變にて手の者共を討れ主從三人落行を安養寺方より夫あますなと追懸けたり各願寺方には是を見て藏人を救はんとし跡を蒹ふて萩野の中に戰ける九里今宵の事は水谷の仕業ならんと思ひ竟に追懸け、萩の島にて藏人を斬殺せり兩守の人數もたかひに戰ひしが夜も明ければ各疲れ相引に川を隔て息をいれたり常樂院見願は失火と聞き倉皇馬に打騎出んとせしに伊頭邊といへる郷士見隨を引留め各願寺受

持の神社なれは急き神輿を移し避け給ふべしといひけるを見瞻は尤も然るべしとて立歸り社殿に馳せ入り神鏡を始め十二善神、未社の酒神、三河の藥師等を神輿に納め又た勅書の櫃箱を庫より取出して之を捧げ伊頭邊と毛請は神輿を舁き出して普門僧都順政が多賀康の堂へ移し奉る斯て鵜坂は火を防がんとする者なかりけるまゝ本社拜殿を始め坊舍殘らず灰燼となれり是れ天長八年九月廿日の事なり水谷兵部亟之重は父殺されたるを聞き取ものもとりあへず手の者を率ゐて馳出し是安養寺が所爲ならん天を戴かざる讎なれは坊主を八裂にせんと急ぎけるを臣越智五郎左衛門いひけるは九里が手に死し給へは先九里を討給へと之重諾しさらはとて萩の島へと馳向ふ九里尙在ければ逃すなといふより早く越智は駈よせ九里へ切て懸る九里心得たりと互に戰ふ越智は大剛の勇士にて遂に權殲を抓み大地に擲と投けるが起あがらんとする所をすかさず首を討落せり九里の勢是を見て越智圍み擊んとしけるを兵部亟と共にあざ笑ひ奴原蹴殺せといふまゝに馬にてかけ倒し雜立ければ蜘の子をちらすがごとく逃ける川を隔たる各願寺方是をみて馳加はり悉く討取けり兵部亟は越智に命し父藏人の骸を取れさめ館に歸るべし自らは是より各願寺へ行事の樣子をも聞合すべしと即ち各願寺方の僧徒を引連て馳行けり各願寺隆性は此度受持せし鵜坂神社を順慶惜んて燒き棄て藏人を虐殺し其上故なきに各願寺を攻むべしとの風聞言語道斷なりと大に怒り會下の寺院、山に從ふ武士等を召集め寺院には鷹寺の蓮能寺玄海黑郷吉祥院專稱寺良惠蓮臺山土代寺亮範三田山常樂院見隨普門僧都順政五時谷光嚴院安寧坊山際眼智坊杉谷太子院善海坊荒川遍照院金乘坊武士には三位長者松森讚岐守同右辨同左馬介同松若同縫殿村兵部卿一郎入道同宮内三位同一九山本茂宦者坂野下長官者玉井武部卿、町一郎三良土方下總、國侍には安賀筑前、堀田左京、長谷雅樂神尾主計何も山内に集る浩る所へ水谷兵部亟到りけれは事のよしを委く語り兵部亟にも力を合せ給はれと戒め備をぞなしけりしかるに水谷は急ぎ館に歸り父の仇なれば齒嚙をなし安養寺へ推寄せ順慶を討んといひければ越智思慮ある者にてとゞめけるも時を伺ひ猶豫せり安養寺順慶は各願寺に鵜坂の寺院を燒れ其上九里を殺せし事にて安からず兵部亟も長澤に在と聞しまゝ各願寺を攻め隆性と兵部亟を生捕り來れと常法坊に命しけれは常法坊人數を率ゐて長澤へ打向ふ此事各願寺へ聞ゐけれは衆徒悚へず馳むかひけるが双方大田にて逢ひたがひに戰ふ、水谷兵部亟もはやく聞て越智と共に手勢を隨ひ馳來り即時に懸散ければ常法坊支へがたく逃歸れり是より安養寺方には所々の邑郭を堅固にせり中にも福井九郎右衛門岩城太兵衛の搆へたる白木の邑郭こそ堅固なりと聞へたり、しかれども双方搖を守て出で戰ふ事もなかりしなり

多賀康は今の布瀨村なり順政は順正寺の古なりと云ふ又た毛請は布瀨村父助の先祖なり順正寺後ち一向宗に轉せしが毛請も亦同宗となり順正寺旦那たり大閤の時毛請の姓憚ることありて多賀康と改め後ち又高安とあらたむ十二神の畫像は又た各願寺へ移す後ち兵火にも金剛夜叉大自在天の像は燒ずといへり酒神の像は布瀨多賀社是なり神鏡櫃箱は僧都順正金剛が嶽へ移したるとなり、元龜二年金剛が嶽の僧鵜坂再建勸進帳の文は泉達錄に載せたり常樂院見隨は三田村淨

樂寺の古なりといへり又た鵜坂の祭は七月廿三日なり古は神職祭の日に楷をもつて參詣の女の尻を打つ是は女の男をもちたる數ほど打ちけるとなり江州筑摩の鍋かゝり祭に同じ楷祭り名高き事にて八雲抄にも記せり楷とは木の若枝にて杖とし打なり

○諏訪神の事

光孝帝御宇近江國伊吹山に惡龍と云ふ賊ありて近國を押領す越國にも彼の徒れはく最と騷がしかりければ越前の國の住人甲賀の三郎唯直に凶賊退治の詔あり又た援兵として越中宮川庄高柳の住人郷田次郎員成を添へらる兩人伊吹山の賊を討ち平らげ飛越に押入り悉く賊徒を滅せり已に上洛すべき所に越中は員成の郷なれは暫く唯直を留て饗應しける或日唯直馬に打騎り舍人をもつれず只ひとり四方山の面白さにあそび行きしに廣き川原に出たり只見れは楓の一村あるのみにて其余は渺々たり、頃しも秋の末霜に染たるもみぢ葉錦を曝すが如きながめもありしがさもあれいかなる所か名もありやきかまはしく思ひぢも里人も來らず、家居もありやと楓林の中に入りしが傍をみるに大なる穴あり駒をよせ窺ひけるにさも美はしき姫の在けれは三郎あやしみいかなる人ぞと問へり、姫はれぢろきたる氣色にて顏ふりあげ我は爰に棄てられしものなり君もし情けあらはたすけ給はれといひもあへず泣きしづみぬ、三郎情け深き者なれは之を聞き事の仔細はしらざれとも見るめも哀れにましませはたすけあげてをいらせんとやがて鎧の總角を解き下けれは姫もかしこくすがりつき三郎難なく曳きあげたり三郎つく〳〵見れば二八ばかりと覺しく容色殊に美はしく凡人とも思はれず尋ね問けるはいかなる御かたにて何たる咎のをし〳〵かく難面も棄られしぞ、つゝをす語給ふべし父母の御方へ某伴なひよきにわび參らせんといひけれは姫は喜びたすけまします御事さへ淺からざりし次第なるにいとゞ深き御情け、何かはつゝみをいらせん、さりながら又も我を害せんと今にも人の來るならは君の爲めさへわしくなり我身もいかゞなりもかん語るそのまもわらざれは一先爰をたちさりて何れへなりと伴なひ給はれとありけれは三郎もさあらはとて姫を馬にかきのせ川原れもてに打出しに姫又たいひけるは君我をたすけ給ふとき事にぞあはてまいらせて母人の形見とせし銀の鏡の侍ひしを忘しなり、とても事に取得させ給へやとかきくどきけるほどに三郎聞ひていとやすき御事なり暫くこゝに待給へと馬をかしこに繫き走りもかんとする所へ郷田次郎員成は三郎が歸りの遲けれはあやしみ尋來りしに三郎唯直しか〳〵の事を語り共に鏡をとらんと穴に臨み三郎總角の端を握り片端は員成に持せ穴の中に下りけるが員成姫のあまり美しきに慕ふ心のありけれは姫ひ取て妻とせんと思ひ唯直かれはこそあしからめと握りし總角をはなちけれは三郎は忽ち穴の底に墜ちて影さへみえず成にけり、員成姫の方へ走り行き三郎誤つて穴の中へれちて死せりと僞り此上は我ちが方へ供しまいらせんと姫を馬にかきのせ高柳へまでは歸けり夫より員成姫をなぐさめんと種々もてなしけれども怫然としてものをもいはでありけれは今は員成も便はてゝ下人に姫を棄てよと下知すれば下人姫を抱きあげ馬にのせんとせしかゞ盤石よりも重く怒れる色面にあらはれさもすさまじく見えたり郷田は最とゞ怖しく身の

毛もよ起つばかりにて走出んとすれは四肢も竦縮み今はせんかたなく姫にむかひ何事もやるし給はれとひたすらわひけれは姫面色すこし和さて汝知らずや我は是諏訪の神なり越の地に跡を垂れ甲賀の三郎に値遇して楓が原に出顯す然るに汝が横難に妨げられ唯直は已に信州に去れり我ひとりこゝに留る池水濁らは人も清むまじ我誓ひを空ふするなかれと宣ひ姿はみゑずなりにけり員成始めて諏訪の神なるを知り急ぎ詣でゝ拜謝せんと楓が原にいたり、ありし穴を見れば潔き水湧て激湍たる池となれり員成神に罪を謝しかさねて池上に祠を造り神を勸請し諏訪大明神と崇め奉りけるとなり甲賀は穴の中に墜ちて死すべかりしが神の擁護の渥さにや地中に一道あり其れに沿ひて辿り行きしが飢もる心もなく已に一千百日に當つて駿州江尻松が根といふ所に出で程なく世をされり依て此所に神とし祭れり彼地越法寺の傳記に此事委しといひ、甲賀か珍とせし珠斑杖も此寺に藏むといふ又た諏訪河原昔は楓が原といへる名所なりとかや、諏訪の池其深きこと幾尋なるを知らず夏日の旱魃にも水少しも減せず中に尺余の魚多し、人若し捕へて喰へば必らず顛狂し又た癩病となれり、此池の主は守宮に似たる物にて腹赤く背黑く四肢あり尺は丈に餘れり水面に顯るゝに胴より上を出し眼の光すさまじく見るもの驚怖す又た池中より夜更けて燐火出て水上に燃ゆしはらくして滅せりされは諏訪の祠いつの頃よりか頽敗して山王の社地に移せり

正市公御代儒者南部草壽景信（景衡とも稱す俗名初平右衛門）爰に住めり然るに神祠のありし跡に常に鳩あり留つてさらず景信神祠の跡なるを知つて些の地は神にかへしまいらせんと彼所に小祠を造り諏訪社と額字を自書せり是より鳩來らざるとなり毎年秋八月祭けるが景信門弟に酒飯などもなてし此所は楓か原の名ありしなど咄しいざや詩作を見んとて池上秋思といふ題を出しけれは思ひ〳〵に律絶句などを賦せり一二を左に記す

池上秋思

想見洛陽萬里秋、蕭條景色却消愁、吟風池上楓林晚、片々殘紅濯錦流、

仝

金風蕭瑟楚江秋、夫婿此時奈客愁、紅葉滿枝懶題句、徒將雙流寄長流、

遺稿あり喚起漫草と云ふ又た大和忠經を著述せり、景信既に沒し嫡子權藏景春初め豊太郎家を襲ぐ幼にして穎悟長じて博學父祖に超へたり十一歳の時　君命にて即席に長澤各願寺の記を作れり又た東叡山百韵の詩あり白石先生も大に感賞せらる、景春庭隅の神祠めんどうにもと思ひけるや毀ちされり、其跡へ又た前の如く鳩來り留まる景春あやしまず過きたりしが或日景春菅家後集を門弟に講じ居けるに忽ち痰血を嘔き夜に至り胸痛煩悶し遂に癒ゑず二十四歳にて死せり偶然なるべけれども神祠をこぼちし咎めなりと云ふ者もあり

○越中守護藤仲遠の事

天祿の頃越中の大守を藤仲遠とぞ申ける天性慈悲和順にして仕官せしと元享釋書にも載せたり利

仁將軍に三子あり長子は越前に在て齋藤といふ是長井の齋藤別當實盛の祖なり二男は加賀國に在て富樫といひ三男は越中に在て井口と云ふ其枝葉はびこりて石黒太郎光弘、高堅次郎光信、泉三郎、福光五郎、仙石太郎實高、水收四郎恭高、同小太郎安常、中村太郎忠直、福田次郎憲高、吉田四郎、鳴島七郎、宮崎太郎、南保次郎、入膳小太郎などいへるあり皆越中の國侍にて親類一門ならざるはなく中にも石黒太郎光弘は大身なりき光弘の後石黒左近、泰高の後水收采女久しく續ひて天正年中まで存せしが信長の時兩家斷絶せり又石黒は礪波郡木船の城主にて水收は同郡水收村に住し皆利仁の葉類なり

○美島野末社稲荷の事

福田太郎安重といへるは藤利仁將軍の孫なり新川郡三島の庄を領し爰に居住せり（美島とは今神川邊と云ふ名所の三島にあらず）曾て安重先祖を神とし三島に社祠を建立し福田稲荷と稱す茲に又末社稲荷といふあり今の滑川南街道の傍にて何の頃よりか化物出ると云ひ觸れ人若し之に逢ひは忽ち病づき復た癒ずして死すと傳へ絶て詣づるものもなかりけり浩りければいとど宮居の淋しく神さびわたり森々として木陰暗く幣まばらする神樂男、鈴をさゝぐる八乙女、祝を唱ふる祝部子もたへて影をもさゝざれは神も憂しとやねぼすらん玉の瑞離いつしかに澄ず、濁れる世の人の疎かに見る堅祖木は光もなく自から神の和光もかげ薄く屋にまじはる神社はあるか無きかの如くなりし斯る宮居にましませばさぞ狐理の栖み家とし人をねどし侍らんと思へるも多けれども實はさにもあらず、風雨殊におらく北なる海に難船あるへき其前に此社に十四五歳なる兒と十二三なる女と二人美はしき衣裝し髪もめでたく櫛笄を飾り唐戸を啓き其前にていそがしげに互ひに衣裝をなをし女は眉つくり紅粉をわたし或時は立ながら粧ひ或ときは座して粧ふ若し此所へゆき逢ひは二人ははぐらふ面色にて影さへ見へずなりにけるが見人も亦思ひがけなき事なれば驚きたるまゝ病出せるよし偖て是を福田の末社といへるはいはれなきにあらず福田安重盛んなりし頃安重の内豎に櫻井四郎といへる者あり容顔美麗にして殊に發明なれは幼稚の時より安重嬖幸ありて側にそだて資性柔順にしてわるびれず一輪咲きし梅の花雪を帶びたる如くにていかに野心の人とても見かへらざるはなかりし又た安重の北の方の腰に佐子彌といへる女あり幼けなかりし頃よりも智惠才發人にすぐれ能く貴賤のけじめを知り慈悲の心の實深く柔和の姿れとなしく物に馴たる糸竹はれとなまさりといふがはの末の盛のいかならん倘や菩薩の再來かと怪むまでにありけるゆゑ北の方の御惠みもふかゝりける十三四の其頃は歌の會にも除かれず琴の連にも夜とゝもに御側さらずと聞へ流石それとはつくろはぬ著なせしまゝの振袖は二八の春の花盛り容色ことに艶はしく尺なる髪のめでたさを誰とりあげてゆふ人のなき親かこつ色ざかり雨まちがほの郭公初音ゆかしき風情なり櫻井佐子彌ふたりが中の戀風はいつの秋にか吹き初めてさそふ色葉の散ぬるも心のほゞを櫻井に汲みて知れとの玉章の思ふ心をとゞめかねて千束にあまるかねことの起證の烏啼わたる曉の鐘だに心憂くせめてよる瀬も荒磯の波の枕にことゝはゞ消ねてもかなと雪の朝、四郎は奥への御使折節佐子彌取次の序よ

し野の花紅葉そゞろ言葉も色みゐて約束かたき私語忍ぶにあまるばかりなり斯て佐子彌は四郎が
ことばの嬉しく女心の一すじに其日の暮るゝを待ちわびたり漸く夜も更けゝれば直侍番所の屏風
圍もそこ〳〵に音すみわたる奥坐敷福田も寢所へ入り給へは時分はよしといふ波のよせくる戀の
やるせなくうたに習の忍ぶ路ときけば旅へももくごとく小袖の裾を高くとり身ふり輕げにつくろ
ひて椽をつたひの跡は四郎の部屋へと思ひつめ杉戸障子に吹風はいつ〳〵よりも音あらく身の毛
いよだちさむけたち月はあれども戀闇のくらき心に思ひなく、廊下のたり居踏みちがへ安重の寢
間の椽にぞ出たりけり、はつとせきあげ身を縮め息つきあへず憂さは夫とも人はしら糸のむすば
られたる心より向をきつと見渡たせば寢間の燈火影さへて行べき方はあられふる椽の下にやかく
れんと猶も靜かにさし足にて障子をそつと覗きけり福田はいまだ寢もやらず燈火にさし向ひ書物
を讀みてありけるが物かげをあやしみ透間より窺ひ見れば誰とも分ちしらねども寢所をねらふ風
情なり安重はこは心得ぬ曲者と障子に傍ふて待つ折しも佐子彌はそれと白雪の薄き椽板ふむごと
に軋る音さへ恐ろしくわな〳〵顫ひ浮わしに障子に磯と行きあたる、安重得たりといふ儘に障子
一間を蹴倒して下なる佐子彌を疑と蹈み伏せ誰かあるとぞ呼びければ物音の裂げしさに在合ふ番
の侍入膳五郎、加積九郎走り寄る、安重怒て奴張縛れとありけるゆゑ入膳つゝと寄り小手差縄にか
らめつけ椽の下に引据へしが余り手弱く覺へしもへ頬被を引とれば奥につとめの佐子彌なり安重
慌さ已れ佐子彌にあらずや何ゆゑ寢所を覗ふぞ心得がたしと詰め立ればはつと答ねていひ譯の言

葉の塵も出はこそ兎角に顔をもたげ得ず涙に咽ぶばかりなり安重熟〻其狀を察し事をかなへし躰
にもなし若きもの〻思慮計なく色に耽りてかゝりしとは察すれどもわざと聲を高くして已尺に餘
ることをなし不所存もの、さし置き難しとて大に怒り加積九郎を呼び汝に預け渡すもへ一應罪を
責糺し海に沈めて殺すへしと云ひ舍て其儘寢所へ入にけり此騷に近習外ざまの侍我も〳〵と走來
りしかど安重已に寢所へ入たるゆゑ皆已が當直に歸けり櫻井四郎は唯一人椽の上にさしうつむき
涙ぐみて居たりしが安重窺ひ見て四郎は何ゆゑ殘たるぞと咎むれは四郎承り佐子彌が今宵のあや
まり某が仕業にて主を畏れざる天罰蒙るべきにあらず同しく罪に行なひ給はれと誠に思ひ入たる
体にぞ申ける安重之を聞き素より察しの事なれは心に可笑しく思ひながら彼が相手は汝なるが二
人の無禮家業を犯せし罪は重けれども今汝等を殺すに忍びざれは宥し遣はすなり今日より後を慎
むべし佐子彌は奥にも不便を加ふればよも殺せとは思ふまじかくいふうちに加積は性躁がしき者
なれは速に殺さんもはかりがたしと云ひ入膳五郎を召び四郎と共に此事よきに謀るべしとの仰に
二人は謹み畏まり加積が宅へと急ぎけり加積九郎は安重より佐子彌を預り聽て引立て我家をさし
て歸りしが余所にはしらぬ人心四郎佐子彌か其中を妬む心のありける故罪を糺すまでもなく郎等
天野藤藏を召び佐子彌を今宵のうちに殺すべしとの仰なり汝美志摩の沖に連行き沈め殺すべしと
言葉荒らげいひつけしが藤藏は怪みて一二往も論すれども九郎さらに聞き入れず其上は爲方なく
小舟に佐子彌をとり乘せて沖のかたへと漕ぎ出すさるにても佐子彌の歎きを見るにつけ仕官の我

身も思はれて共に涙にせきあへずされども藤藏案ムかき男もゑ若しや宥めのあるらんと渚の方に目をつけて時を移して漕ぎめぐる斯て入膳櫻井兩人は夜の明がたに九郎が方へ走著き佐子彌赦免早く伴ひ參られよと怠つきあへず中にぞ九郎は驚き佐子彌は罪を糺し已に舟を出せしといひければ左あらば急ぎよび戻さんとて三人追懸け船に取乘て人の命はしら波に浮つ沈みつ漕ぎ出して遙の沖をみわたせば小舟一艘みへけるが三人それぞといふ體に扇さしあげさしまねく藤藏是をみるよりも佐子彌に向ひ云けるは君の宥めの使ならんと共によろこび聽がて舟をも漕きもどす追手の舟をさしよすれは四郎小舟に乘移り赦免の仰を申すにぞ佐子彌はさながら夢の醒めたる心地して悅ぶ事ぞ限りなし二艘の舟をよせならべまづ〳〵陸へと急ぎけるに俄かに海上あしく大風しきりに吹きれこり逆浪山を捲て陸も渚もみへ分かずこは何ゆゑぞと驚て二艘は二ヶ所に吹きわけられ手に〳〵なりて諸聲の渚によらんともだもれども又た來る波に綱手絶ゑ遂に舟をは覆へし櫻井佐子彌諸共に底の藻くづとなりたるはあはれといふもねろかなり入膳加積が乘る船は風に渚へ吹き着けられふしぎに命をたすかりて難なく陸へあがりたりさればにや四郎佐子彌が亡魂茲にとゞまりて海だに荒るれば二人が幽靈あらはれ歎きかなしむといへり安重之を聞きあはれとや思はれけん二人が幽靈いかなる神とも祭るべしとありければ入膳承り二人が塚にちゐさき祠を造り丸木の華表に舟玉明神と額を懸け祭たれば夫より一郷の農民年毎に初午祭りを欠かざりしが世のとし月も末行きし昔を今に知る者なかりしなり然るに元錄二年四月廿二日大坂の町人打栗屋長左衛門といふ者の船能州より越後へ行かんとせしに美志摩の沖を過ぐる時俄かに難風に逢ひ遂より夜に至つてやまざるゆゑ水主梶取檣を斬り船己に覆へらんとせしに渚に大勢の聲して舟をよびしまゝ水主梶取力を得て夜半に美摩志の浦に船を漕ぎよせ難なく渚にあがり呼びたすけたる人を尋ぬるに若き男女の其容貌貴げなるが二人在り汝等を救はんと聲をかぎりに呼びたりしが悲なかりしてこ嬉しけれといひ此方へとありしゆゑ皆悅こび行きて禮をも申さばやと二人が跡を慕ひ行けるが森の中の宮にいたり給ふゆゑこは心得ぬ事ぞと互に目と目を見合せしと云ひけるが其間に二人の姿を見失へり孰も驚き拜殿の格子をそゝとさし覗けは內殿の扉磯と閉づる音のみしでしん〳〵と心も澄るばかりなり扨は神の我々をたすけ給へるかと忽ち信心膽に銘して有難く頓首禮拜し夫より在所の者にたより如何なる神ぞと尋問ひけるが爾々の由來を物語れりさては疑もなき船を護りの神にてたはしますぞと急ぎ大坂に歸り主人にもかくと物語し神の加護を拜謝し奉り神階を一品に進め翌年來り祭れり夫より舟玉明神と崇め奉りけるとかや

○渡部綱親薗宮を保護する事

後三條院第三の王子薗宮御即位まします可かりしを後三條院實は後朱雀院第七の宮にて後冷泉院の御讓りにて位を踐ませ給へり故に後三條院の御讓後冷泉院第三の宮喜仁親王繼がせ給ひて白河院と申奉る依て薗宮御即位なく嵯峨に閑居ましゝて嵯峨の宮とも稱せり白河院承歷年中帝都騷がしく嵯峨宮御住居も穩かならず御領地なれは越中へ御下向ゆるべしとて京都を忍び出させ越路

へ下り給へり供奉には有栖中將公忠、天國太郎、森茂、廣部只、土師冠者星丸、藤原冠者五郎丸なり宮帝都を出させ給ふは御謀叛と流言せしゆゑ官軍を差下さると越前疋檀にて聞せ給ふ廣部只は陸地はしかるべからず次船にて越中へ入らせ給ふべしとて急ぎ立たんとせり然るに官軍宮を追けるが宮は若狹へ落給ふと聞き官軍又た若狹へ赴けり斯くて宮は越中泊の濱へ着かせ給ひ先づ大村の邑郭へ入らせ給はんと使を遣はされしに大村の住大村左官時高官軍宮を追ひ來るよしに申しければ宮越後へと志給ふ大村左官宮を討ち奉らんと所の者に風聞させしは官軍越後より着船と知たるゆゑ避け給はん事を知らせ參らせんがためなり宮は高原野に出で如何がすべきと躊躇せ給ふに日已に暮にけりされども月升て南の山も明らかに近く見へ廣部はこゝを踰ゑなは直ぐ美濃路へ出でんと思ひ宮をすゝめ奉り中將土師有栖藤原申けるは人目を忍べは大勢はあしかりなん只一人御供仕るべし各は後れて御跡を慕ひ來らん事然るべしと南を指して行きけるが夜已に明け南の山も近くなれり時に一つの大河あり奔流岸を嚙み深潭藍を揉み幾百尋とも知れざれは剛氣の廣部も見るに驚き渡らん事ぞ難かりし去れども追手の後ろに在り進退こゝに谷まり宮へ申上げるは迚もうしない給はん御命ならは此川に溺れ給はんもましならんと御輿を水中へ昇き入れ逆卷波に輿丁は流れ廣部御輿を抱き漂ひけるにさすが宮の御事なれは河伯も擁護ありけるや俄かに風の起りて御輿を廣部ながらに向ふの岸に吹き着けたり廣部少し氣力を得て先づ御輿を岸へ引上げそのまゝ轉び臥してぞ居たりけり爰に薄島と云ふ所に住める渡部刑部綱親といふ者御輿を見付け又た見慣ざる男の前に伏しければ怪み立寄り誰人ぞと問ひしに廣部口噤じて答ることもならず綱親輿の内を覗きけるに衣冠正しく容貌常ならず見へさせ給ふ何人にて在ますと問ひしかば蘭宮と答へさせ給ふ又如何がして斯る御事ぞと尋ぬれば川を渡らんとして溺れたるよしを宣へり刑部驚き痛はしく思ひ奉り賤が家なれども我等の方へ供し奉るべきまゝ御心を安せらるべしと急ぎ一兩人を得て御輿を舁せ遂に我家へ入れ奉り粥なとを調へすゝめ參らせ廣部をも同じく介抱すれば人心地つきて綱親に厚く謝し偖て始終を語り出れば綱親聞ひて縱令追ひ來るとも綱親に力を合せる國人郷士も多ければ御心易かるべし此所に御留り帝都へ答なきよしを仰譯られましませと夫より茨木といふ所に茅葺きの宮を作り御所と嵩め蘭宮を移し奉れり又た布市の住篠塚道有は富豪なる者ゆゑ綱親彼に謀て粮米金錢の費を賠ひ給はるべしといひしに道有易く承け引けり綱親又た郷士郷民に告げ知らせ各々宮を守護せんと謀り豫め備へもなしたれども更らに追ひ來る者もなし宮後ちに歸洛ましゝ綱親道有に賞賜ありて綱親に越中總庄官を免るし道有へは長者の號を給はる故に篠塚代々長者を稱せり

茨木は今の城生なり宮の在せし所を茨木の宮といへり、宮に供奉せし天國太郎森茂は天國といふ鍛冶の後にて越中に留り新川郡松倉に住す郷義弘是れなり、土師冠者星丸の後ち天正の頃土師左近貞成と稱し其子忠左衛門芹谷といふ所に住す後又加州公へ奉仕す、藤原冠者五郎丸の子孫僧となり專稱寺の廢せるを再興しけると云ふ又た渡部綱親は源五の末裔なりといへり初め武

藏守綱兵庫の頭公時美濃近江の勢を率ゐ近江國飯が峯に屯し頼親を攻む頼親越前國霧が城より湯尾枥が峠に橋を渡し矢石を以て防ぎ戰ふ綱公時百戰利あらず遂に兩人越中立山の麓に隱るといふ其後太郎綱邦の三子忠邦綱定親邦あり忠邦の後ち綱重帝都に赴き居ること三世、綱義に至つて屢々戰功あり常甚だ嘉みし甲斐の郡司を勅許あり其孫甲斐太郎源忠成武州豐島の地を領す其子成綱其子忠綱相繼ぎ十三代將軍の時渡部太郎忠綱勇將として名あり豐島郡長井に住す綱より萌黄の腹卷岩切といふ太刀を傳へ受け父祖の菩提のため眞言の一寺を建立し忠綱寺と號す忠綱の後ち神君に仕へ渡部清十郎といへり親邦の後ち渡部源三郎邦綱越中猪谷に在て飛州國司姉の小路宰相公綱越中諍戰の時之を援け遂に姉小路に仕ふ公綱の後ち後藤山賀牛丸渡部等なり、邦綱の子渡部筑後守綱高其子主水正邦信牛丸山賀等と逆心にて主人を追ひ出せり後藤のみ姉小路の爲めに忠死す綱高父子後三木大和守に滅されたり刑部綱親先祖より越中にあり今の布谷村左五兵衛其後なりといへり謙信越中へ切入るゝことに鄉士等に困れるより桑野に屯し鄉士等に頼む事ありと觸れける因て鄉士等桑野に集る謙信欺ひて之を殺し左五兵衛の先祖も柿澤より出來りしが高原野にて坂田九藏に逢ひしに謙信亦欺ひて戕害し豐田父子羽根合間も殺傷せらると聞き即ち逃て布谷村に隱るといへり坂田の後ち柿澤にあり六兵衛といひ公時の後にて公時の兜太刀を傳ふ何として土中に瘞みしや其所池となり今に水澄める時は兜見もるといふ

○以仁親王の御子の事

後白河院第二の御子以仁親王の御子をば治承の乱の時以仁親王の御めのと讃岐前司重秀北國へ供しまいらせたりけるを木曾義仲もてなし奉り越中宮崎といふ所に御所を作りて据へ參らせこゝにて御元服ありければげんぷくの宮又は木曾の宮といへり

以仁親王と申すは高倉の宮の御事なり治承四年源三位頼政の勸めによりて兵を擧げ給ひ遂に矢にあたり失せ給ひしなり

○源平俱利伽羅の合戰

爰に又た天下の大乱に及びける根元は人皇七十四代の帝鳥羽院が位を第一の皇子顯仁親王に讓らせ給ふ御母君は待賢門院の璋子にて即ち崇德院の御事なり然るに鳥羽院又た美福門院の御腹に皇子誕生せられ近衛院と申奉る纔か四歳にならせらるゝを御位に即けとて崇德院を推しれろし給ふ然るに近衛院御在位十四年、十七歳にて崩せられしかは今は崇德院重祚ましますべきを美福門院の御はからひとして第四の皇子後白河院を御位につけ給ふ崇德院最と怨み給へども父帝の御はからひなれは是非なく空しくすぎさせ給ふ處に鳥羽院も程なく崩じさせ給ひけれは今は何をか憚るべきとて御兄弟の合戰始まり源平兩家父子兄弟思ひ〳〵に別れ院の御所へ參るもあり内裏へ參る人もあり是ぞ保元の乱にて遂には崇德院打負けさせ給ひ讃岐へ配流なし奉る長寛二年八月廿六日御年四十六歳にて配所に崩じ給ふ又た打續て平治には源氏左馬頭義朝藤信頼に與みし平家の安藝守清盛に打負て尾張の内海にて討れたり斯て清盛威を天下に逞ふし大政大臣に經上り我娘を高倉

院の中宮にそなへ一門の人々皆公卿となる日本六十餘州の中平家の知行所三十餘國にわたり越中も平家の知行所にて譜代の侍次郎兵衛盛嗣之を領せり又た壽永二年には木曾義仲信州に旗を揚げ平家を討んと北國を經て攻め上る平家より木曾追討のため十万餘騎を二手に分げ搦手の大將には越中前司盛俊上總介忠清飛騨守景家三万餘騎を具して志雄山へぞ向ひける彼の山は能登加賀越中三ヶ國の境にて能登の白生を打過ぎ日角、見室尾、青崎、大野、德藏、宮腰までぞつゞきたり追手の大將軍には三位中將維盛、左馬守行盛、薩摩守忠度、侍には上總判官忠經、河内判官季國、高橋判官長綱、越中權頭範高が一黨五千餘騎を先として都合七万餘騎は加賀と越中との境なる倶利伽羅山へぞ向ひける加賀國井家、津播多、荒井、閑野、竹橋、大庭、崎田、森本までぞ打ちつゞきしが木曾殿の方にも國々の軍兵馳せ集る越前には木庄、樋口、齊藤が一族加賀國には林、富樫、井家、津播多、能登國には土田、關、日置、越中國には野尻、河上、石黑、宮崎等參りたり木曾は六勳寺の國府に着じ兵具をくらへ勢揃へをなし其軍勢五万餘騎とぞ注じける爰にて軍の評議ありしに平家は大勢と聞き味方は無勢なり彼礪波山を越て松永邊、柳原、小矢部川原へ打出なは馳合ひの軍なるべし馳合ひの戰の習は必ず勢による次第なればやゝしき大事なり去れは先義仲倶利伽羅山の北の麓に陣をとらんと思へり其やゝは源氏礪波郡倶利伽羅山の麓に陣を取なは平家はあはや敵向ふたりとて山の峠猿の馬場の邊に控へんずらん其時義仲搦手へ廻りすゝして追手搦手北南より押合せ平家を倶利伽羅南谷へ攻め落さんこと上策なり去れは急ぎ馳せ向つて陣を取らんと云ひ信濃の國住人星名の黨をさし遣はせり、已の時ばかりに礪波山の麓に着し日宮林に旗三十ながれ打立てけり、倶利伽羅山の頂上に一字の伽藍あり昔越の大德、諸國を修行し倶利伽羅明王を行ひたまひけれは此山をくりからとも申すとかや越中の國礪波郡の内なれは礪波山とも云へり谷深ふして山高く嶮岨にして道細し馬も人もやゝ遠ふ事容易すからず偖て五月十一日には平家十万餘騎を二手に分けて礪波志雄二ツの道より越中へ打入らんと聞へけれは木曾殿乳母子の今井四郎を召び去頃信濃國横田川原の軍には三千餘騎にて四万餘騎をも追ひ落せり是は敵拾万餘騎、味方は五万餘騎の少數なれど彼等は馳せ疲れたる京家、西國の駈り武者のみ、味方は在國案内の荒手なりし爲めと知らる去れは今度も必定勝利ゆへ吉例に任せて初は七手に分け後ちに一に寄合せ揉にもみ伏せ南の谷に追ひ落すべしと云ひ諭し夫れ〳〵手をぞわかちける一手は十郎藏人行家、足利矢田判官代義兼、楯の六郎親忠、宇野彌平四郎行平、成合落合を始めとしてしかるべき者共一万餘騎志雄山の搦手へさし向ひ一手は根の井小彌太を大將として二千餘騎を引具し越中の住人蟹谷の次郎は案内者となり鷲島を打廻り松永の西のはづれ小耳入を經て鷲の尾へ打上り彌勒山を引廻らせり、一手は今井四郎兼平を大將として二千餘騎を隨へ越中國住人石黑太郎光弘、高楯次郎光延を案内者とし松永の日宮林へ差遣はし、一手は樋口次郎兼光大將にて三千餘騎を率ゐ加賀國住人林、富樫を隨へ笠野富田を打廻り竹橋の搦手にこそ向ひけれ一手は信濃國住人余田次郎、圓子小中太、餘訪三郎、小林次郎、小室太郎忠兼、同小太郎貞光を大將とし三千餘騎にて越中住人宮崎太郎、向田荒次郎兄弟二人を案内者に充

て安樂寺を通り金峯坂に打上りて北黒坂を引廻し倶利伽羅の峠の西のはづれ篠原へさし遣はせり一手は愛妾巴御前大將となり一千餘騎にて越中國住人水牧四郎、同小太郎を案内者とし鷲嶽下へさし向へり、巴女は木曾中三權頭の娘なり心も剛に力も强し弓矢取ても打物とつてもすこやかに、荒馬の上手にて去りし養和元年信濃國横田の軍にも向ふ敵七騎を討ち取り高名何國へも知れ渡れり一手は木曾自ら將となり三万餘騎にて小矢部川を打渡り埴生の庄に陣を取り軍勢のかさを見せんとて胡類子原に引き隱せり又た平家は礪波山くりからが峯を打越へて坂を下り東方へ進みつゝ遙に麓を見渡せは日宮林に白旗四五十流れ立ちしかゞ此山四方岩石なれはよも打寄せまじ能登路志雄山を指固めなは西は味方の勢にて東口は一方なるばかりか最と高嶮にして道狹けれは源氏に矢種を射盡させよとて倶利伽羅の堂、國見、猿の馬場の塔橋の邊に扣へて赤旗山々に立ならび龍田山の秋の暮時雨に染めたる紅葉もかくやと愛しく源氏の謀に少しもたがはず平家扣へて左右なく寄せず源家も陣を合せ相距る二町に過ぎず義仲は毫も動く色なく屹と四方を見渡せは北山はづれに當つて夏山の緑の木間より緋の玉墻夙見へて片割造の社壇あり山林高く聳ゑて鳥居久しく苔むせり義仲當國の住人池田次郎忠康を召んで彼は何宮と云ひ又たいかなる神を祝奉りたるぞと尋ねたまへは答へて申すやう八幡を祝進らせ侍るが埴生庄にましませは埴生の新八幡と稱し合へりと義仲大に悅び手書にて太夫坊覺明を召されたり此僧は本勸學院の文章博士進士藏人道廣と云ひける者なり出家して西乘坊信救と號し南都に便宜の物書して居ける程に高倉の宮御謀叛の時三井寺より南都へ牒狀を遣はす返牒を誂へらる其文中に大政入道淨海は平家の精糠武家の塵芥と書ぜるを入道安からぬ事にれもひ如何にもして其信救めを打ち殺せよとて內々伺はれければ南都に安堵し難く漆を沸して身に浴び膨脹して癩人のごとく成り果てゝ東國へ落下り三河國にて十郎藏人に行き逢ひしかゝくの事を賴みければ行家不便に思ふて勞りけり其後行家兵衛佐と不和を生じ信濃へ越ける時太夫坊を義仲に付けたり義仲云ひけるは幸に當國新八幡宮の御寶前に近づき奉りて合戰を遂げんとす今度の軍勝つこと疑ひなし後代のため且は當時の祈に願書一紙社殿に進らせばやと思ふもへ何分よきに計らひ給へと覺明馬より下り義仲が前に跪いて籠の中より矢立取出し樣紙を押ひらき古き物を寫すがごく案にも及ばず之を書す其狀に曰く

歸命頂禮八幡大菩薩、日域朝廷之本主、累世明君之餘祖、爲守寶祚、爲利蒼生、改三身之金容、開三三所之權扉、爰累年之間、有平相國一者、忝管領四海、惱亂萬民、蔑萬乘、焚燒諸寺、已是佛法之讎、王法之敵也、義仲苟生兵馬之家、値繼寶祚之應、見聞彼暴惡、不能顧恩慮、任運於天道、投身於國家、試起義兵、欲退凶器、鬪戰雖合兩家之陣、士卒未得一塵之勇、之處、今於一陣上、旗之戰場、忽拜三所和光之社壇、機感之純熟已明、凶徒之誅戮無疑矣、降歡喜之淚、銘渴仰於肝、就中曾祖父前陸奥守義家朝臣寄托身於宗廟氏族、自號名於八幡太郎、以降、爲其門葉、無不歸敬矣、義仲爲其後胤、傾頭年久今起此大切、喩如嬰兒以蠱量巨海、蟷螂取斧向奔車、然則爲君爲國起之、爲身爲私不起、志之至神鑒在嚴、感哉、悅哉、伏願冥應加威靈、神合力、

勝決二一時一、怨退二四方一、然則丹祈相二叶冥應一、幽賢可二加護一者、先令レ見二二之瑞相一、仍祈誓如件、

壽永二年五月十一日　　源義仲敬白

とぞ書しけり此願書と十三の表矢とを抜き折節雨降りければ蓑着る男に蓑の下に隠くし持たせて忍びやかに八幡の社壇へまいらする憑哉八幡三所誠に志の深きを納受ありしにや白鳩空より飛び來つて白旗の上に翩翻す義仲馬より飛び下りて甲を脱き首を地に付けて之を拜み奉る大將軍斯しければ兵卒も皆下馬して拜みたり義仲は礪波山黒坂の北の麓埴生の社八幡林より松永柳原を後ろにし黒坂口に向て陣を取り平家はくりから峠猿が馬場の橋より黒坂口に進み下りて北に向ひ陣を取る兩陣相隔たること五六段には過ぎず互に楯を突向へ木曾勢を待ち受け合戰をば急がず平家の方にも源氏の樣を守て進み戰ふことなく三度鬨を合して後は兩陣しづまり返てぞありけり良暫くありて源氏の陣より精兵十五騎を出し十五の表矢の鏑を同音に射さすれは平家も十五騎を出し是も合して十五の鏑を射返す二十騎出して射さすれは又二十騎にて會釋し三十騎五十騎交る〳〵射合ひけれども互に勝負なしかくて夜に入り後の山より追手搦手押寄せて南の谷へ追落さんと計りけるを平家之を知らずしてあいしらふこそ無殘なれ五月十一日の夜半ばかり五月の空の癖なれば朧に照す月影夏山の木の下暗き細道に源平互に見分かず平家は夜討もこそあれ打とけ寢べからずと鑾めけれども疲れたる武者なれば甲の袖をかたしき冑の鉢を枕とせり源氏は追手搦手さま〴〵用意をなし牛四五百疋取集めて角に縞松結び付け夜の更くるぞ相待ちける又た樋口今井根井

小室太郎巴女の五手は一手に寄合せ總勢一万騎にて北黒坂南黒坂を引廻し鬨を作り大鼓を打ち法螺を吹き立て木の下萱の本まで打ちはためき蟇目鏑を射上てとゞめき懸けたれは山彦に應へ幾千萬の勢とも覺ゆ義仲すはや搦手へ廻しける鬨を合せよとて四五百頭の牛の角に松明を燃して平家の陣へ追入る胡頼子原柳原上野邊に扣へたる軍兵三萬餘騎鬨を合して喚き叫ぶ黒坂表へ押寄せし前後四萬餘騎の鬨の聲は山も崩れ岩も摧けんばかりにて道は狹し山は高し我先〳〵と進む兵卒も多く人馬共に壓にれされて矢をはけ弓を引くに及はず打物は鞘をはづして急きたり追手は搦手に押合せんとせめのぼる搦手は追手に一ッにならんと喚き叫ぶ平家は中に取籠められたり軍は明日ゆあらんと思ひけるに夜半の事なればこは如何せんと東西を失ひ周章騒ぎて弓取る者矢をとらず矢を負へども弓を忘れ冑を着けて甲を着ず太刀一には二人三人取付、弓一張には四五人つかみ付けり馬には逆に乘て後ろへあがらせ或は長刀を倒に突て自ら足を突き、切て立上らざるもありけれは蹈殺され蹴殺さるゝ者も多し主の馬を取ては主を忘れ親の物具を着ては親を顧みず唯我先〳〵にと爭へども西は搦手なり東は追手なり北は岩石高し南は深き谷なり闇さは暗し案内は知らず如何がすべきと方角を失へり爰にふしぎぞありける白裝束したる人三十騎許南黒坂の谷へ向て落せ殿原過ちすなとて深谷へこそ打入たり平家之を見て五百餘騎連れて落しけれは後陣の大勢我劣らじと馳せ進み父落せは子も落し主落せは郎等も落す馬には人、人には馬いやが上に落重つて平家十萬餘騎十餘丈の倶利伽羅谷をぞ埋め込みけり偶ま谷を通るゝ者は兵杖を免れず兵杖を免る

ゝ者は皆深谷へこそ落入けれ斯やうにして死げれども大勢の傾きたる習にて敵と組んで死ずといふ者は一人もなし唯我先にと藤塚今添安宅を指してぞ落行ける

巴女と云るは木曾殿の愛妾なり木曾滅後關東へ下り和田義盛の妻と也朝比奈三郎を生む和田亡びて後ち又た越中へ來り石黒太郎に親しかりけれは爰にて出家し九十一歳にて臨終ずといへり

○頼朝公時代の越中守護

元暦には參河守範頼、九郎判官義經西海の戰に奢る平家を悉く討滅し源氏の世となりにけり斯て右大將頼朝公征夷大將軍に任じ日本六十餘州の總追補使となり給ふ又た文治元年八月十四日大内冠者惟義越中の守に任せらる仝年十二月六日の記に云平家滅亡以後義經行家謀反の聞へあるにより つて鎌倉殿より折紙越中は光隆卿に可給とあり文治三年丁未三月二日の記に云越中國吉岡の地頭成佐不法等相累るに付早可令改替の由經房の奉書到來により則被仰御請文とあり又た是より前平家の侍越中の前司盛俊當國を領せしより源平盛衰記に見へたり

○打出湊の事幷義經北陸經歴、越中三街道の事

打出は岩瀬の森の戌亥に當て一里餘もあり岩瀬のわたりといふも爰なりとかや今は三里も沖となりたるが古は湊にて三千軒もありし繁昌なる宿なりといへり長が家に華といへる白柏子あり容色すぐれ才能あり倭歌の道にも暗からず情け殊なる女にて遠近人迄も慕はぬものはなかりしなり而かるに風の心地となやみけるが遂にはかなく世をされりよつて打出の濱か南燕野といふ所に葬り塚を築きて標に松を植へ花塚といへり燕野とは今の打出村なりとぞ古の打出濱といへるは數度の高浪に潰へて六度迄村も南へ移避け岩瀬の海禪寺といへるも元打出にあり今に海中に寺跡見ゆるよし打出とはこゝに出れは佐渡能登越後までも一願にみゆる故に駿河の打出濱に比べて稱すといへり去れは源義經東國落の時北海の浦傳ひに通り給ひ往々に遺跡あり氷見より伏木の間赤坂山の下海岸に判官雨やどりし給ふ所あり辨慶置きたりとて大なる磐石を以て岸窟を覆へり又た義經鎧掛の皂角樹あり夫より六道寺の渡を過ぎ奈古の森より打出濱にいたり華塚の松の下に憩ひ給ひしが下須川の船守久太郎に此松いはれやありと問ひ給ふ久太郎華が全盛の事を委しく物語りけれは義經聞召しいと慰さみとて紅染の袴を下し給へり是より先加州安宅の關を過ぎ給ひて所の童に越後信濃の街道を尋ね問はせけるに童さがしく答へ上道下道安計呂踰ゑの三すぢをれしへまいらせしと義經記にも書きたり上道といへるは越前彼庄より鳴子道を歴て立山の麓長途越より信州小市へ出るをいふ中道は加州津幡より六道寺を渡り常願寺川高橋より立山の北廣野の瀬戸を經て揚路踰龜割坂を過ぎ信州諏訪へ出るなり又た下道は加州小松より親良濱へ出で安宅より津幡黒澤船の入江を廻りて北なる能海の邊を去り岩瀬濱を經て泊浦能生鬼伏を過ぎ越後今町扇の港へ出るなり義經の通り給ふは下道なれども越後扇の港へは出で給はず糸魚川の上深山越の間道を廻り龜割坂へ出で信州へ越し給ふ斯く中道へ出たまへるは越後直江の浦鳶が巣に平家の侍城左官是清が妻二子小太郎をもりたて一たび源家にうらみを報はんとて此巣にあり義經を支へんとす是清が

は名高き大力のはんがく女なり此窟が峯の寨を直江の城といひ濱に關を据へ往來の人を視察す加賀の富樫は義經と知て見逃しけれども城は敵なれは之を避け間道を經て中道へ廻り給へるなり義經記にも京の君龜割坂の產の事までも書きたれども糸魚川より末の道は書かざるなり又た三日市邊にて逗留まし〳〵たり是は其頃櫻井庄一箇を領せる北面の侍に水橋安藝守といふ者あり彼れ義經なるを知て止め申せしとなり去れども義經なるを人に知らせじと我が一人の娘の折ふしものゝけのつきたるを行者の姿なれは祈禱を請りよつて山伏十三人上野川に出で幣を流れに立てゝ祈りけるが其所を今に御幣が淵と稱せり祈る驗のありしにや水橋は義經を知め十三人を久しく留めて饗應せり時に水橋が娘京の君の姿を山伏にやつさせ給ふを女とはしらで世にかゝる人もわるものにやと夫より戀慕ふて側なる女にわかし花鳥の使たび〳〵せしかども曾て御いらへもなし娘せんかたなく又た狂ひとなり遂に櫻井に身を投げて死せり水橋一人の娘なれは歎き悲み又た戀に狂ふて死したりと聞きしかは京の君を强面と恨みしまゝ思ひの外の事にて留り給ふこともなり難く十三人は夜にまぎれて去り給ふ又た中道は佐々陸奥守成政天正年中　神君の援けを賴まんとて此道より信州下の諏訪へ踰ゑ給へり此處を俗に成政のさら〳〵越といふ主從二十七人なりしが六人になりて諏訪へ出たり成政無字錢の策又た梅山ありといはれしは此時の事なりといへり獅子が洞千丈が峯葡萄が橋なぞいふ絶險あり千丈が峯は夏の日も千尋の雪あり葡萄橋は生茂りたるぶどうの谷にわたりて橋となり之を渡るに難なく越る者稀なり又上道は木曾義仲北國より攻め上り給ふ時木曾を出で信州下の諏訪を過ぎ小市を上り長途を踰ゑ月岡野に出で給へり長途踰ゑには虎走、雪が嶽、硫黄が谷、畜生原、あり皆絶險なり盛夏堅氷銀盤の如く此を涉れは一跌人を戴せて千萬丈の溪に墜とす雪が嶽は峻嶒たる積雪千岳と埋みたとひ橇に乘るとも行くことを得ず硫黄が谷は一遍の炎消ゆる間に走れども火傷せざるはなし畜生原は人行けは再び歸らず斯る絶險を義仲通り給ひ人馬多く損し一千餘騎と聞へしは五百にたらずして踰ゑ給ひしなり木曾殿血氣にてかゝりしを人々不吉なりと愁ひけれは埴生の八幡宮に願書をこめ給へり去れども終に功なかるべき前表にて粟津にて死し給へり義仲月岡野より鳴子を越へ山田川鐘掛の瀨を渡し野宿野に上り爰に陣屋をなし宿して馬を求め此所にて馬の毛付をなし中老田に近き、ぐみの木原に馬を求めて繫ぎ給ふ是時今市村農民茂右衛門が先祖天兒刑部といふ者小沼駒千疋出せしとのことなり又小沼は駒市にて今今市村なり、義仲功ありて天下を管領し給はゞ天兒に賞賜あらんとの證書を下し給へり義仲糠塚を立て海老山を踰ゑ黑郷へ押出で中老田の邊にて軍勢渴しければ外波郡の農父松原大助と云ふ者に水ある所を知れるやと問ひ給ふ大助御馬の前に跪き此所に清き水ありと申上ければ義仲馬より下りさせ給ひ弓にて地を穿ち給へは水忽ち沸き出で是にて軍勢の渴を救ひ給ふ今尙は弓の清水といへり是より古國府へ赴かれし上道中道の險は上件に語るがごとし、中道は上古日本武の皇子東夷征伐の時安計呂越へなぞひらけしと前代舊事本紀に載せ又た山姥の杖の大木となりし事も書けり然れども此安計呂越へも其後道絶へ殊に黑部川の支流多くして行こと難しといへり下道は義經

糸魚川より先越後へは通り給はず此の間の險、親しらず比丘尼轉、狗戻、駒回、赤岩、追立、長走などいふ個處は風波あしき時過ることなり難く中にも親不知駒回は常に高浪地を捲いて斷壁を撲ち濺げる浪のさる間に人々前後もかへりみず走過るなり慶長二年關白秀吉公薨じ給ひ利家公天下の御後見たり同四年利家公御逝去あり此節石田治部少輔三成叛逆の謀計を以て　利長公を加州へ歸し奉り三成諧して利長公御逆心にて國へ退けりと申せしゆゑ神君疑ひ給ひ加州を攻めらるべき憂悟あり此事はやく加州へ聞へければ横山山城守急ぎ江府へ赴き御逆意なきよしを神君へ申し上げり神君御許容ありて今や天下靜かならざれは人質あるべしと仰らる山城守御請して國に歸り利長公へ天下の諸侯安堵の爲めなれは御母君を關東へ御下向然るべしと申上げたり利長公止むを得ず芳春院殿には關東へ御下向あり山城守の嫡子數馬は供奉し同じく關東へ下れり此時親しらず駒回の難所糸魚川より中屋鋪までの道始めて加州よりひらかれしが是れ慶長四年の事なり同五年に關原合戰ありて天下已に神君に定りし芳春院殿御供の横山數馬關東に留まり御旗本となれり

○佐野常世安養寺を燒き亡す事

新川郡神成鄕櫻井庄安養寺といふは安の宮御祈願所にて釋空海造立の靈場とかや然るに此寺ほろびし起因は仁治元年十一月北條時房相州鎌倉に薨じ給ひ其幼稚なるにより舍弟時賴之を補佐して政を行ひ天下の風俗人情坐から知りがたきを愁ひ康元元年入道し最明寺と號す其より邊土遠國を行脚し給へり然るに正元二年の冬越中に至り嚴冬の事なれは風雪祁寒に堪へがたく安養寺をたのみ暫く逗留せんと尋ね求めて寺僧に乞ひ給ふ折しも大僧正隆範阿闍梨は來春の御講法の爲め上洛中なれば僧侶許さず最明寺强て乞ひ給ひければ盜主得法寺了源僧都に其委細を告げしに僧都之を聞き旅僧の行き暮たるならば一夜の宿を得さすべしといへり左あらばとて最明寺に一宿を許しけるが其夜盜人ありて了源僧都を殺し側に臥たる雜僧等を縛り貨寶を奪ひ去れり雜僧の叫ぶ聲を聞き僧侶は賊なりと騷ぎ立ち薙刀長鎌などを提げ追懸けれども二十日餘りの闇なれは行方知れず去れども後ればせなる盜人壹人捕へて寺に歸り黨類を責め糺し又た今宵宿したる坊主をは引入れしやとて盜人に問ひけれども答へず僧侶等最明寺を引立て來り嚴しく責めけるに罪なきよしを宣へり少頃して盜人白狀せしゆゑ最明寺は罪なしとて盜人を斬殺せり最明寺は不慮の變に逢ひ刀の閃めくには宛ながら牲へに供へられたる心地して居給ふを翰回といへる僧猶も疑ひ奴も同類なるべしとて斬らんとせるを老僧之を止め罪なきを殺すは凡人すら爲さゞる所なり況んや僧としてなすべけんや第追放すべしといへは翰回最明寺の衣を剝ぎ取りて追出せり最明寺の危きを免がれ村家のあるを便り難儀を說き給へは村老いたはり一棉衣をわたへしが夫より鎌倉指して下り給ふ時に上毛國佐野源左衛門常世が方へ立寄給ひ安養寺僧徒の暴虐を憤り常世に燒拂へと命せらる正元三年佐野常世手勢を卒て安養寺に押入り隆範阿闍梨を始め僧侶殘らず搦め捕り隆範を赦るし其餘は一々首を刎ね夫より火を縱ちければさしも名高き伽藍一時に灰燼となれり初め安養寺僧正順慶住僧たる時飛州千光寺と飛越の境をあろそふ千光寺よりは白木嶺は境界なるゆへ谷を境谷とも稱す

と云ふ安養寺よりは白木嶺は立山より續きて越の山なり千丈峯こそ境なりと互に辯論止まず各々帝都へ訴へありければ天奏に達し源敏行朝臣勅使として下らせ給ふ上古面足尊越中金剛嶽に鎮座しければ寺ふところなく千丈峯を攪とせり又た古より金剛嶽を鵜坂の奥院と稱すれば是亦紛れなく越中の山なり敏行越へ下らせ鵜坂川を渡り給ふ時詠歌あり

鵜坂川渡瀬あふみあが駒のあがきの水に衣ぬれにけり

鵜坂川は神通川の事なり敏行渡り給ふ所は今の鵜坂邊にあらず青水村にて今の余川村邊なり古へ村中に川通りたるが洪水にて川除きたるゆゑ除川と改むといふ、渡瀬あふみとは一瀬にあらず、あが駒はわかこまなり、是より此所の川は歌瀬の稱あり、此うた萬葉集に家持の歌とありたれども實は敏行のうたなりとぞ又た最明寺安養寺の難に守袋と笛を失ひ給ふ守は北條四郎時政三島の神に授り給ふ中山金山彦の守と龍鱗三枚あり三島の守時政に告けて曰汝世天下の權を執るべし此三枚の鱗を旗の紋とすべしと爾しより北條九代權勢あり右の守と鱗は北條家の至寶なり、最明寺時賴之を失ひしに青木左内といふ者拾ひ取後伊勢新九郎が家に傳へたり又た笛は微城といふ僧得て珍重し後ち古國府勝興寺に傳へしが是は源賴朝卿愛せられし蛻蟬といふ管なり又た新川郡熊野川邊に安養寺村あり爰にも安養寺ありと云ひ田畑の中今に寺跡あり、或書に越中の大坊安養寺とは古國府勝興寺の古なりとあり又た神保非波安養寺瑞泉寺など礪波郡栃榎野に坑を作り長尾爲景を蹈し殺すとあり北國太平記には信長の命にて柴田勝家一向宗一揆の徒を平ぐる爲め越中安養寺を越して能州へ赴くとあり依て案ずるに礪波郡今石動より一里餘南に土山といふ所あり爰に安養寺跡あり此うしろの山を過るを安養寺越といふ上方より來る捷徑なり又た貴布禰の石黑左近水牧采女神保など勝興寺を攻め僧侶侍等を多く殺せり其後佐々成政越中を領せしかは緣を結び息女勝興寺へ入輿ありて成政古國府神保が城跡に勝興寺を移せり勝興寺は即ち土山にありし安養寺なりと云ふ

以上の事多くは泉達錄に載する所にて繁文を删り脫事を補ひ浮辭剩說は大略芟莫せり上古の事薩事記古事記日本記類集國史延喜式其餘の諸書を參考するに正を取るところなし泉達錄は俱利伽羅東光坊の越中記によつて書すといひ東光坊の記は越中風土記によるといへり又た風土記東光坊記亡ぶて今はなし

○桃井播磨守直常の事

太平記に名越太郎時兼近國に猛威を震ひ北國大半朝敵となりぬるよし天聽を驚かし奉りしかば諸卿僉議の上にて楠正成を討手に下し給ふことに一決しける處に准后あながちに内奏し給ひけるは楠といふ男は恐しき者なれば朝敵を亡しなん後は北國は又た楠に隨はん去ればいかなる心が出來るやも知らざれば外の武士に仰付られ然るべしとぞありけれは君實にもやと思召けん楠を閤き桃井播磨守直常に綸旨を下され今度北國の朝敵を亡しなば忠賞として越中の國を給はらんとの御事にて北國へぞ下し給ひ其勢幾かに六百餘騎とぞ聞へける然るに楠正成は君の爲に忠なり曾て私な

き人なれは之をねたましとも思はれす却て直常の宿所に至り對面して砂金五百兩伺立てたる馬三疋其上北國へ下りての七重の謀を細まゝと示されしに直常北國に下り朝敵をゆるなく退治せらる直常後ち楠に對話して今度北國退治は偏へに楠殿の宜ひし所ろ符を合せたるが如しと拜謝せられけるとなり又た綸言なれはとて越中を桃井にぞ給りける

太平記大全延元二年越中國桃井播磨守直常下代普門藏人俊清松倉に居住す越後大井田驛正少弼中條入道烏山左京禰津掃部介大田瀧口を始めとし都合二万餘騎にて新田義貞の加勢とし越中へ打越しけるを普門藏人國の境に出で之を支へんとし黒部川を前にして陣せり然るに桃井が成敗をあしと思ふ國人田子藤六神保左京進覺田平川等廿七人義貞に屬し七月十三日陣々を拂て所々の城に籠れり普門が兵疑ひを生じ國人馳集りて押寄せ普門戰ふと雖ども遂に殘少に打なされ松倉に籠城すといふ其後新田足利諍戰し建武延元の大亂となりしが新田義貞遂に打負け越前の足羽にて箭にあたり越中住人氏家中務丞重國といふ人首を取れり浩りし後は足利尊氏天下の武將と見へ給ふといへども南朝の帝まし〳〵て楠和田等を守護し奉り或時は京都へ攻入り或時は芳野へ追返され闘戰暫くも止むことなく、五畿七道大に亂れて騷がしき世の中となれり越中の桃井直常初は足利に隨ひ勳功他に殊なりしが尊氏を恨むる仔細ありて本國に立歸り宮方に屬しつるゆゑに後は越中の守護職を取放され處々に徘徊して時節の來るを待てり延文元年四月廿六日尊氏將軍薨し給ふ贈從一位大政大臣等持院と稱し奉り世子義詮將軍は尊氏公の三男なり貞治六年三十八歳にて薨去し嗣子義滿公幼稚なり南朝には猶和田楠の子孫守護し奉り間を伺ふ最中なれは西國より細川右馬頭頼之を上洛せしめ將軍を補佐しける元來頼之は純忠にして思量深き人なれば義滿公の威嚴次第に天下に輝やけり足利十五代の基を強くせしは偏へに細川の忠義によるものにて後ち武藏守とぞ申けり爰に又た筑紫の目代菊地武光九州を騷動せしめ京都へ攻上るよし聞へけれは急き鄰國の武士に援を乞ふて防戰すと雖ども事難儀に及ぶよし聞へけれは今は將軍自御馬を出さるべしとて諸國の武士をぞ召されける武光一に武政と稱し南朝の御味方にて芳野を討取べしと企しなり應安七年戰負け義滿將軍に降參す依て筑紫の目代に今川了俊を置きぬ　桃井播磨守宮方たるによつて先年越中の守護を取放され此方彼方を流浪せしが義詮將軍の薨去に乘じ一族幷びに嘗好の者を相語らひ直常が弟修理太夫直信其弟三郎直弘が息刑部少輔詮信直常が嫡子中務亟直和一味同心して其勢七百餘人國民を追捕す實に應安二年九月なり越中の守護斯波義將折ふし在京なれは此事を聞ひて我父足利尾張守高經入道道朝執權たりし威勢に蒙つて嫡子左兵衛佐氏頼を執事職に補せられたるに道朝入道氏頼を惡んで執權の事を妨く氏頼父を恨んで遁世し玉田莊主心勝と號す依て義將家督を繼ぎ九州の探題に補せらる陸奥守家長加賀國に住す兄弟悉く國々の守護となる武恩の忝ふする所なり然るに我が守護の國に敵の足を溜めさせんは忠なきに似たり二つには勇なきに似たり三つには大將の器にあらず早々馳向つて誅すべしとて二千餘騎直常の屯を襲ひ打てり直常も爰を先途と戰ひしが小勢なれば打負けて松倉城へ引籠る子息直和猶も素懐を遂げんとし三百餘騎にて長澤へ出張し所々へ放火したる折しも義將又た二千餘騎にて馳せ向ひ直和は不意に鮎河の

砦より起つて斯波方を打ち斯波方の死者三百人餘其將織田朝倉甲斐二宮鹿草强く戰ひ終に直和討死し餘黨皆沒落し越中既に平均したり此由京都へ注進しければ將軍を始め皆筑紫發向の首途よしと悅び給ひける應安四年七月直常再び殘黨を集めて松倉の要害を嚴しく搆へ兵糧の料とて近境の民屋を追捕す桃井本國たるによつて好み深き者多く石動山の大衆二千餘人も桃井に心を合せ斯波義將を討んとぞ計りける先年義將直常と合戰し息直和を長澤にて討取り餘黨悉く沒落せしかば今は頭を差出すこともあらじと思ひしゆへ義將大に驚き其勢四千餘人を引率し石動山に押寄せ追手搦手相分つて散々にこそ攻め立てける大衆二千餘人も二手になりて仁王門の坂口に出向ひ爰を前途と防しが桃井は五百餘人を引率し城には二百餘人を留めて七月十六日酉の刻に斯波が本陣へ押寄せ大衆後詰の勢に力を得て二千餘人鯨波を合せ前後より揉立てしかは軍兵ども立足もなく敗北す大將義將も希有にして落行き悉く追討し首四百八十餘級を獲たり其後應安七年將軍九州へ御發向の時義將も御供の人數に催され九州へ赴く時北國を打捨て登ならは桃井隙を窺ふて蜂起する事もあるべしとて舍兄の還俗したる左衞門佐氏頼に軍兵大勢を差添へ越中に留め置き松倉城を押へさせ我身は上洛せり去れは其間にも直常度々討出て郷民を追捕し乱妨狼籍せしかども僅かに足輕追合ひにしてはなゝ敗合戰はなかりけり又太平記評判康安二年斯波尾張太夫入道高經越前足羽の軍忠に依て越中の守護職を給はり代官として鹿草出羽を差き桃井直常信濃より手勢二百にて打越へ神保が城へ入りしかは蓄好の野尻井口長澤倉瀧瀧口等馳集りて千餘となり鹿草を攻め國府に押寄せけるに鹿草の勢少なかりしかば城に籠らんとするに國人椎名孫六左衞門を始め十四人手勢三百餘にて城に乘入り國府の在家に火を懸ければ鹿草は加州へ落行き此時越中半は直常に屬す井口城にて兵を集め加州を攻めんとするに能加越前の兵三千餘騎越中三ヶ所に陣す桃井は下着を討つこと手くせなりしゆゑ送り寄せければ足利勢臭服の峯へ逃げ登り桃井夜半に二里ばかり隔てたる井口城に只一人密かに行ける此時能加の兵三百降り大將の見參に入らんと競ひしも直常に見へざりければ落行きしと誤り陣中騷ぎ立ちて失火す降人等は逃るを追ふて討取ること多し直常は未だ井口城へも行き着かず道にて火を望み立歸る所に逃る兵に逢ひければ今はかなわじとて直常も井口城へ逃げ落ち重て加州を討んと思ひけるも病にかゝつて死すと云ふ井口城とは生地の事か、此條列國雜志に依れは足利上總介義乘が四男兵部少輔義胤始めて桃井と號す其曾孫播磨守直常後醍醐天皇に仕へ楠正成を師とし軍法を學び武略勝れて鎌倉へ下りて義詮の輔佐たり時に奥州の國主顯家鎌倉を攻め來る直常箱根山に籠る上杉民部高駿河守等と武藏相摸の勢を集め奥州勢の跡を追ひ濃州青野原にて顯家と戰ひ利あらずして上洛す其の後顯家都へ攻上る時尊氏の命にて直常と弟直信顯家を討ち遂に打勝ち顯家退去によつて直常上洛す程なく又た顯家八幡山へ出張し高師直と戰ふ顯家利あらず直常又た追て大に戰ひ顯家終に討死す其功扨群なり然れども尊氏の賞の輕きを憤つて直常兄弟不平の心あり時に高師直が讒にて鹽冶判官高貞出雲の國へ落ちしが師直の計として直常討手にむかふ路次にて鹽冶が郎等逃れ難きを知り高貞が妻子を殺して皆討死す其後高貞

をも擊殺せり直常其功によつて越中の守護に補せられ北國に下り住せり又尊氏直義不和となり合戰にれよぶや直常も北國勢を率ゐて攻上り直義に力を合す時に尊氏は鎌倉にあり義詮京にありて直常を畏れ都を落去るよつて加茂川の邊に戰ひしかど直常利を失ひ遂坂に退き又た尊氏を攻め直義は八幡に陣を備ふ尊氏東南の敵を禦ぎかねて京を落去る是に於て直常洛に入て兵權を執しが爾後尊氏と和順し程なく又た不和になり直常直義を勸めて落行き鎌倉へ下り薩埵山に據りて尊氏と合戰す時に直常は宇津宮へ赴きて利を失ひ又た越中へ歸る其後山名時氏謀叛し直冬を取立て上洛の時直常も直冬に同意し越中より洛に入り南朝に降る京都にて尊氏と戰ひしが勝敗なく越中へ引退く足利高經も尊氏に背き近國もゑ暫く直常に同意せしが後ち高經義詮に屬す高經が子義將に命あり越中へ發向す爾後數年越前越中合戰し直常が孫直和が代に至て遂に勢力盡きて滅亡せり

喚起泉遠錄に云く後醍醐天皇御宇桃井播磨守直常を越中の守護に任ぜらる新川郡大田保に邑郭を構へ津毛城と號す

同苗光直は同郡狭の城主浦山庄司光英が養子となり浦山權之太夫光直と號す越中越後に跋扈せる宮崎三郎が黨類を切絶やしたる人なり光英は光直の叔父なり桓武平氏の末にて光直が後に到り織田家に奉仕す時に信長公より氏族の改用を蒙り養父より繼ぎたる爲め津田氏を賜り津田左近信輝と云ひ暫く膳所の城主たり津毛城は福澤村上山城なり狭城は天神山の城なり

桃井直常武威北國に震ひ家名落るく氏族越中にはびこれり直常足利尊氏に屬し後又後醍醐天皇の御味方に在て武功あり茲に天皇の御味方新田義貞は足利一家の親みを捨て王命を承り屢爭戰せり然るに新田勢利を失ひ義貞越前に打出給ふや前年桃井に賴める事あり直常も建武の戰に大功ありて尊氏其賞なきを恨み義貞の賴めるを幸に攝津國より船にて越中へ下り近國へも催促して軍勢をあつめ年内をすごして春の雪消へなば打ち出で義貞に加はゝらんと傳へける然るに尊氏直常の本國へ逃げ下れりと聞ひて急ぎ濃州の軍勢を催がし若狭國の住人大佛若狭守を大將とし直常を攻むべしと下知し給ふ又た信州澁谷の住人澁谷左衛門尉知安に信州の勢を附けて大物の浦より船にて信州へ遣はす上方勢春の雪いまだ解けざるに信州に至り魚津の住人遊佐河内守に内通して直常を攻め康暦二年二月九日津毛城より三里東上野平にて互ゝ戰ふ夫より戰鬪止む日なく春より夏に到るまで爭戰し或は勝ち或は負け上方へは義貞勝利なきよし二月中旬に聞へければ加州より加はるべき約束の軍勢も俄かに俱利伽羅の城に取入り越中の後陣となる若狭勢は能登勢と共に船にて魚津城に加はる直常の味方には飛州の堀田豊前守之信七八十騎にて加勢せる外は直常が手勢國人等ばかりなり山北の國人等は小出五郎景郡が籠れる岩瀬城を守り山本駒市に出張して直常の四男七郎朋儀を大將とせり小出五郎景郡が籠れる岩瀬城を守り山本駒市に出張して直常の四男七郎朋儀を大將とせり山北の國人等能く防禦すといへども敵は日々に新手加はり味方は數度の戰ひに軍兵を損ず已に六月の頃にはよんでは國人等も敵の賄賂に心變じ山本の出張も燒け上野平の固めへも内通し夜討を誘き遂に直常利を失ひ六月二日に津毛城を去り一族悉く小出五郎が岩瀬城に楯て籠る義貞の軍勢江州より後卷せんとて馳せ來るも越前平泉寺の徒に沮まれ四

刀央より越前加賀小松等に在り越中へ越すこと叶はず是に於てや直常岩瀬に在つて戰ひ疲れ今は待べき味方もなければ一族討死と覺悟し六月九日未明より申の下りまで城より二里東奥野の砂川の邊にて戰ひ暫く敵を追退け城に歸る宗徒の人々にむかひ最早軍は是までなり落ちんと思ふ者何方へも行くべし直常が運命爰に窮れり落殘たらん人々はいざや終夜酒宴し夜明なは思ふほどに働きて自害すべし先づ妻子を始め足弱き輩を今宵海に沈めよ我心易く討死すべしと安賀越前入道慶利に宣へは慶利も今は遁れがたきを知り我もさこそ思ひ候へとて直常の北方を始め相從ふ男女七十四人同夜岩瀬の海に沈めり斯くて慶利曉に歸れは猶死を究めたる宗徒の者十二人最期の供と死を定めたる士卒彼是百餘人一所に集り心の及ぶほど戰ひ潔よく死せんとて明くるを待つに敵は早や砂川を越へて押寄たりと告け來れり去れば卯の刻ばかりに城戸を開き何れも蒐出で今日を限りの軍なれば父討たるれども助けんともせず子戰へども見向く躰もなく主人の骸を乘り越へ郎等の尸を跨ひて戰ひけり飯野濱の松原より蓮華野の北までは尸ならざる所もなく直常辰の下の頃城に馳歸つて見給へば宗徒の者纔かに六人郎等三十に足らず今は早や是までなりと城に火を縱てとの下知あり鬼一十郎走廻りて火を懸けたり暫時の間に敵集ひ來たり喚き叫んで城にこみ入らんとす直常屹と見て誰かある我自害せん間敵を追退よとの言に黑瀨左近時重同一郎三郎時之父子二人追手に出で防ぎける直常は爰熾んなるを見て終に自害し給ふ鬼一十郎泰弘介錯し死骸に火を懸れけば嫡子權太郎直政四男七郎庸儀相並んで自害す宗徒の人々には桃井藏殿助庸治畠山平馬重雄鬼一三郎弘仲堀田豊前守之信安賀越前入道慶利同六郎三郎古利大野宮内少補一房小田五郎景郡湯原入道貞安桃井源三郎詮信是等を始めとし都て百餘人同じ枕に自害し終に一城亡びたり直常の二男大炊助直久は山本に戰ひしが城に火を懸けたるを見て一所に自害せんと馳歸りしに直常を始め皆自害し鬼一泰弘一人直常の骸に火を懸け葬り居けるを〳〵直久一目見て遲かりしぞ我も腹切らんずる間鬼一介錯せよとて鎧を脱き棄て已に自害せんとし給ふ所へ大佛次郎廣也山本より馳來たり黑郷の今井彌三郎專稱寺が聟郷士を驅り立て放生津若宮因幡が邑郭へ直常を入れ奉らんとし所の長掛解由左衛門に命じ船にて只今此浦に着きたり昨夜直常の仰せにて北の方を始め皆々海に沈めよとありければ入道慶利承り皆々船に乘せ參らせ沖に漕ぎ出さんとせしに若君方より迎へ奉り御命恙なく御在候なり其上寺崎の御味方に參るべきよし申越候直常此事聞召され給はゝかく御腹めされたるこそ口惜しく候然るに直久の自害おしなさん事あるべからず急ぎ船に召さるべしとを申ける直久此よしを聞き給ひ縱命爰を免がれたりとも入みちたる敵なれば終には賤者の手にかゝり尸の恥を暴さん已に死すべき時なりとて又た刀を取直し自害せんとし給ふ廣也泰弘手に縋がりこは口惜しき御心かな便りもなくは是非もなし今さ迎へ奉らんとあるこそ幸ひなり敵は黑瀨等が防ぎければはや疾く〳〵と勸めける直久も否みがたく鎧抛げかけ太刀れつ取出し給へば廣也御供し泰弘もと御意ありしが泰弘云ふやう我は直常の冥途の御供と志し御死骸に火をかけ御伽仕りしが今曉よりの戰ひに疲れ頻りに睡らんとしければ兩脚の筋を斷てり命ありても甚どなりて直久の御先途

を見屆け候もなりがたく廣也萬事頼み參らすと刀を腹に突き立てうつぶしに火の中へ入にけり廣也直久をすゝめ船に乘せ參らせ勘解由左衛門に申して急ぎ漕がせける程に夜半に放生津へ着き若宮が邑郭に入り給ふ又た直常最期の時黑瀨左近父子若林九郎越知平住等敵を追散らし郷士奥野源五定春と云ふ者も馳加はり五人とも力戰せしに敵保ちかねて敗走したるを追ひ立てしが敵又た多勢にて返し戰ひ若林越知奥野も終に衆寡敵せず所々にて討死せり黑瀨父子は惣身朱に染みて城より東なる子洗川を過ぎ跡をかへり見れば岩瀨城炎熾んに登り二人が身なりは癩ならざる所もなし今は是までぞ心しづかに死なばやと父子馬の頭を並べて子洗川を西へ渉り二本柳の下に父子馬より下り座を組みて自害したり桃井直久は放生津に在つて暫らく京勢と戰ひけるが守山の住人寺崎備中守加勢せしかば能州高松城主大窪三郎忠貫と與力せり然るに上方勢は直常を滅したるを面目として陣を拂ひ歸落せしまゝ暫く戰も止みにけり此時新田義貞も越前に討死と聞へしかは人皆已が所領を守つて天下の安否を窺ふの狀あり直久放生津向ひの山といふ所に直常の塚を築き供養せり此塚今に放生津宿より南にあり塚築きたる日を此邊の祭日とせり然るに祭の前夜此塚より鬼火出で遠く去り祭畢るの夜には鬼火又た塚に歸入る土人直常の靈守山へ行くといへり又た直常の北の方尼となり同地柳の井といふ所に庵を結び居給ひしが死後寺となり柳井院と稱し其墓尚ほ今に存せり直久此より寺崎が守山の城に入給ひ世も靜かになりて上洛し再び秀で給へる事はなかりしかど子孫繼いで後ち德川の御家に仕へけるが世に疎める村正の刀を愛し謂ひなきに主人に傷つけ已に戮せらるべきに歴々たる家がらなればとて神君宥免し給ひけるされども罪の重ければ姓名を削らせ幸若とし纔かに知行し給へり是桃井大炊介直久が後なり

桃井の事は大平記列國雜志泉達錄に載する所ろ各違ひあり大平記には名越を退治せしにより越中を給はるとあり列國雜志には高貞を討ちし功によつて越中を給ふとあり何れ名越を亡ぼしたるによつて賜はりしにあらずと見へたり名越の事も同じく大平記によつて書し桃井の名越を亡ぼせる事明かなり泉達錄に書けるは又た兩說と差異あり是は越中に傳へ來りし記錄なりといへり本文に鬼一十郎泰弘といへるは本賴朝卿の臣澁谷今王丸正尊にて後ち入道し土佐坊正尊といひしが北條時政に亡ぼされ正尊が子越後國澁谷の住左衛門尉知平といふ者の方へ母と共に寄食し後ち同國荒井の住人鬼一大炊介泰信が養子聟となれり斯くて桃井越後に戰ひ荒井泉山等を亡ぼせし時泰信が後胤鬼一若狹守泰舊桃井が幕下に屬す十郎泰弘は其子なり泰弘智勇ある人ゆゑ與力する人多く直常肱股と頼みしなり此人礪波郡淺野谷といふ所に城を搆へて居住す直常關野に戰へる時も後詰して直常を此城へ迎へ入れ敵手痛く城を攻むれども疹まず鬼一驍勇なれば此城を鬼が城と稱せり是れ鬼一が武名の今に朽ちざる所以なり又た泰弘直常と死を同ふせし時其跡に四歳の男子と當歳の女子ありしを泰弘が從弟澁谷隼人が家に養へり隼人は戰場にて眼を射られ馬より墮ちしが敵走來りて右の肘を打落せり隼人が郎等敵を退け隼人を扶け歸りしが不具なる男となり入道し一向宗の法を說ひて安田村に住す爰を安田道場と號す今の中堂寺是なり泰

弘が二子女は同村へ嫁し男は澁谷權吉郎と稱して金屋村に住す今の金屋村長助が先にて代々農を業とせり加州御領となりし頃安田邊は家屋稀れにして盜賊多く人を害せしかは澁谷權三同子長助命を承けて賊を討平らく依て長助所持の田地拜領庄内八ヶ村の長となる川澤山野人馬の課役を免許せられ中堂寺は寺領二千歩山木三百本修補料として下さるゝことゝなれり

○名越時有之事

鎌倉三代將軍といふは賴朝公の長子賴家二男實朝なり實朝に御子なし仍て母儀二位の尼の計らいにて承久元年七月關白藤原通家卿の三男二歳になり給ふを養子として鎌倉に下向ありす是れ四代將軍賴經なり然れども賴經幼稚なりければ二位の禪尼政事を沙汰し給ふ世に尼將軍といへり此尼將軍は北條時政の女なりさるによつて自然と北條權を執れり承久年中天皇之を傾けんとし給へども遂げさせられず却て後鳥羽院順德院の兩帝隱岐佐渡へ流され給へり去れば北條の威勢日を追ふて隆んとなり越中へも北條の一族名越遠江守時有守護として來れり太平記圖經に依れば建武二年名越時兼野尻井口神保を催ふし謀叛の時魚津の椎名源六入道一城を制し宮方にて楯て籠り當國の國司六條正顯卿の下代綴切刑部亟と一手になり越後勢を待つて井口城へ寄せんとするを名越親しらずへ出て勢を伏せ越後勢を待てり大江田早川之を知らず狹き濱邊を過ぎ來る時伏兵起つて官軍を討ち一千餘にして井口城へ引入る魚津城に籠る官軍は越後へ歸へれり又た元弘三年出羽越後より　天皇の味方に參る者多く北陸道を經て京都へ攻め上るよし聞へければ名越之を支へんとて二塚といふ所に陣を取り近國の勢を相催ふしける斯る處へ六波羅已に攻め落させて鎌倉も難儀に及ぶよしさまゝに聞へければ今女で催促に隨つて馳集たる能登越中の軍兵ども忽ち心變りて放生津に引返し却て守護の陣へぞ押寄せけり浩りしかは時有も今は是ぞでなり北條の家運も爰に窮れりとて舍弟修理亮有朝甥兵庫助貞持を始めとし一家の譜代の侍都て七十九人五月十七日午の時一同に腹かき切つて兵火の底に燒失せ鎌倉より六日先つて滅亡せしこゝ悲しけれ

北條時政の嗣子を江間小四郎義時と云ふ義時の二男を名越式部亟朝時といふ其二男を尾張守時章といふ其子は民部大輔公貞にて公貞の子は名越遠江守時有なり

○黑瀨父子黑瀨女の事

黑瀨左近時重は新川郡黑瀨村に居住し日宮の領田四百石を所持し富豪にて鄕士たり渠に二男一女あり女は直常の妾となり日宮の脾折といふ所に家造して棲み嫡子五郎時住を附置けり左近に二男時之と岩瀨城に在に直常を援け終に父子ともに命を隕せり國人多き中に直常彼等に親しかりしは一郎三郎時之幼年の時蟹箇澤といふ所に賊棲み往來の人を惱ませし又た想隨ふ奴原あつて近鄕を徘徊し人の財賄を掠め取り或は美目よき女などを盜んで賣などせり諸人是を歎き地頭頭人へ訴へけれども乱世なればしか〳〵取鎭めもなく愈よ人の難儀となれり黑瀨時之是を聞ひて是れ國家の妨げなり此賊を殺して諸人の難儀を救はんと思ひ從弟桑名龜八に語りければ龜八同意し兩人蟹箇澤に至り遂に賊徒を退治す斯ることを直常知り給ひ時之若年にして勇健なるを愛し時重時之兩人を

親み又た時重が女を妻とし給へり之を黒瀬女といひ直藤を生めり直常岩瀬城に戰死の時直藤時重が家に育てられて死を遁る五郎時住直藤を傅立て再び世に出さんとの志あり一類邑里の者へも父時重が遺言なりと小次郎直藤を主人と尊敬し已に十五歳に及べり正月日宮の社堂にねて元服し主税介と改名す後ち又布市の住長者禪房篠塚道惠が女を娶れり黒瀬女直藤と一所に在りけるが四十四歳の夏の頃病癖に就き秋八月終に世を逝れり時住が家更に富有にて安達桑名が田地三百石太平伊頭邊が田地など都べて千石餘の高を得其身中年にして祝髮し入道良道と號し又た上洛し天子に告文を奉りて年々貢し千石の綸旨を下さる黒瀬の内宮腰といふ所に祠を造りて之を納め綸旨の宮と云ふ良道又た赤田川舩が淵の上森の中に家を造りて住めり然るに毎日脾折の館へ至り直藤が起居を問ふこと怠なりく尊敬せり又た本願寺門徒となり赤田の館に同行の門徒を集め親鸞聖人の一向專念の勤めを朝晡に讃談せり故に爰を黒瀬道場と稱せしなり黒瀬が家其初め何れの時より住み來るを知らざれども左近時重より其子五郎時住入道良道其子左近時逮其子九郎左衛門時尋其子左近入道良徹其子一徹坊貞安其子五郎九郎時景其子左近時員なり桃井直藤が子を源三郎直元といへり勇智勝ちたる人にて諸人是こゝ秀で給はんと思ひける其頃南の山より熊多く出で田畠を荒らし又た餘多の人を害ふ直元是を聞ひて野に行き多くの熊を斬殺し猶南山に至りて搜り出しける燒山と云ふ所にて熊を追ひ斬らんとせしが傍らの松に猿ありて直元が振あぐる太刀の鋒を抓んではなさず此ひまに熊立ち上がる直元早く之を制し難なく引裂きけりとなり人のために害を避けゝれば皆歎きかなしみ死骸を葬り神とし祭れり今燒山の下にある熊野權現卽ち是なりとかや直元の子は直忠にて其子は主税介直綱といへり其頃黒瀬が家一徹坊貞安が代なりしが短氣なる者にて是非を分つことなく萬端無禮多く一族郷里の者も憚み果てたり故に直綱とも惡しく脾折の館も毀ち直綱を已が家に居らしめ僕夫のごとくにせしまゝ直綱深く憤り一徹坊が家を退き尾州に所縁の者ありければ行ひて寄宿せり直綱の子孫後ち姓を改め親見源三郎と名乘り神君に仕ふと云へり直道の二男大炊介直久の後は幸若と家を賤め主税介直藤の胤は今猶ほ越中にありて微賤なり黒瀬が家は左近時員に至つて又た一向宗大に行はれ黒瀬道場も愈よ盛んになり加賀能登までも同行と稱して會合し道如聖人の御書を請ふて黒瀬が家に讃談せり然るに其頃高田派と宗論ありて本願寺の門徒越前に一揆す本願寺の家宰下間筑後入道法橋逆心を以て門主の命と僞り近國の門徒を催促す越中より黒瀬左近時員若林雅樂介忠久行ひて法橋に與みし各一方の將となることに長と爭戰久ふして止まず後ち若林は越前にて戰死し黒瀬は加州尾山城に籠る天正八年三月九日織田信長の將佐久間玄蕃允盛政尾山城を攻め屠る時に黒瀬時員も戰死す猶近國の門徒を亡ぼすべしとて信長の命ありて柴田勝家越前より間道を歷て鳴子越に黒瀬が赤田の道場を攻む此事先に聞へければ時員が一子龜太郎時薇從弟日宮別當桑名孫左衛門荒川權之市助齋木左兵衛松永丹波を始め鄕士門徒同行などいへる者三百餘も集り各々一命を惜まず防ぎ戰ひければ勝家も中々容易ならず士卒死傷多く一先圍みを解き西なる川原に引て備へを直し暮るゝを待てり此時道場より出で備へを破りれば前後の川

に勝家途を失ひ危うかるべきに道場の内に事を謀る者なふして勝家の囲みを解けるを幸と思ひたるは悲しかりし次第なり勝家は太馬を急めて糧食せしめ中の下りより前後左右に勢を配りて攻めければ道場よりも我れ劣らじと蒐出て戰ふたり去れども郷士郷民等多くは歩立ちにて備へも正しからず無三無三の働きなり勝家は備へを乱さず向ふ者を鎧に懸けて蹴散し騎馬を撫討ちにせしかは夜半なる時多くは斬りすかせり黒瀬鶴八郎も討れければ殘る者今は是までなりと道場に火を懸け同行と約せし者は爰に命を墜せ冥途の先ずるぞといひ敵の中にかけ入り〳〵一人も殘らず討死しさしも久しく越中に榮へたる黒瀬が一族さでも爰に滅びたり又た黒瀬日宮は寛德年中飛越の爭戰に兵燹に罹らせ後ち再建すといへども又た天正年中齋藤新五が濫妨に燒亡せり今は唯一林の小祠を護すばかりなり去れども黒瀬が一族桑名のみ殘りて黒瀬の内宮腰といふ所に居れり慶長の頃桑名孫左衛門田地を多く所持し黒瀬の道場を再建し中年にして剃髪し五郎時住が法號を以て良道と名け本願寺門徒同行魁と呼び遠如中人の御背を讃談せり是を黒瀬後の道場と云ふ

○黒瀬村日宮の事并裏鏡

新川郡黒瀬村に鎮座する日宮大神宮の由來を尋ぬるに往古天穂日命越中五箇瑜伽瑪瑙山に始めて鎮在す然るに應和元辛酉年三月壬三日黒瀬へ飛移らせ給ふ金鏡松の梢に降臨し給へば人皆恐尊く拜み奉り先づ仮に祠を造りて移し祠り此の事の遠くまでも聞へければ貴賤群集し詣でける時 村上帝御宇にて此の事奏聞せしかは帝も奇異に思召され宮造りすべしと詔あらせて同三年に神宮を營み御遷宮の上神階を賜はり正二位日宮大神宮と勅額を下し給ふ浩りければ當社の繁榮比ひなく寇に神は是れ本朝開闢の根元日域擁護の靈躰にて天神地神跡を垂れ給ふ所は大宮柱ふとしく立てゝ社のうちに鎮まつり堅祖木のひかり高く現はれ給ひ瑞籬のかげ清ふして八乙女の舞の袖神樂男の鈴の音祝部子が祝のとなへに御心をすゞしめまし〳〵和光の陰塵にまじはりて利生をほどこしたはしませば國の威勢は異國にすぐれ蒙古がためにも奪はれ給はず天下安全の德用を施し給ふはたゞ是れ神にてましますと崇め奉りければ神慮まず〳〵めでたく日々に繁昌ましませり又た此社の東南に一株の松あり金鏡降り留まり日下の松と稱し又た異香薫すれば薫りの松ともいへり幹屈曲して南北各々三十間も枝蔓繁これり黒瀬女此松の下に館を造り脾折の館といふ又た桑名か家に銀鏡を傳ふ是は昔て日宮の神黒瀬女の枕に立せ給ひ是れ汝子なりと宣ひて金鏡を授け給ふ黒瀬女黒瀬女鏡を寫し鑄させて直藤が守とせんと時員にも語り其頃美濃國禾といふ所に上手の鏡師ありければ急ぎ召んで夢に記るせし金鏡を圖し銀にて寫し鑄さしむ是を日宮の裏鏡といふ

○蜷川氏庸の事并最勝寺の創造

蜷川隠岐守平氏庸は河内國野崎の住人にて世々上北面たり後ち小松院に仕へ聊かの事ありて公卿へ軍議を奏し諫めたりしに用ひなく却て身の害となり潛かに帝都を去り薮好に便りて當國新川郡多賀庄に來たり住す氏庸文學武藝及び陰陽醫卜の道通せずといふことなし尤も兵學に姿はしけれ

は庄司國人郷士の輩皆師とし貴べり氏庸に嗣ぐを五郎親綱、親綱に嗣ぐを新右衛門尉親忠、親忠に嗣ぐを新右衛門氏榮、氏榮に嗣ぐを新右衛門尉親榮、親榮に嗣ぐを新九郎親貞と稱す親忠の時多賀庄を攻め蜷川庄と稱し親忠先祖より世々の墳墓を築く文明三年京都紫野大德寺四十七世の和尚一休禪師を招請し一禪宇を造立して最勝寺と號す此寺一休禪師を開山とす又た氏榮後ち蜷川庄司親成と稱す是れ伊勢新九郎を取立し人なり親榮一休と問答せし事たび〳〵なり赤田川の橋は親忠懸け始めしとなり新九郎親貞浮屠を信じて閑居し閑徹菴と號す是れ今の蜷川寺なり親貞の後ち蜷川彦右衛門親重東武に至り御當家に奉仕す最勝寺創造の時經營の所もと枝道にて石地藏ありしを取除け堂宇建立の後ち其所菴となりけれは地藏を外へ移し建んといふ者ありしに一休曰く否な本の所に置くべし併し始めは岐なれは往來の人を濟度すといふ事もあるべし今は菴の側なれば何の用もなし主僧濟度せは又た這の石を恃む事もあらじ打折て榮漬の壓に然るべしとなり時に地藏忽ち汗して流るゝごとし衆皆とゞめけれは一休又曰く岐に立ては岐の役、菴に立ては菴の役、其機にしたがふは元來薩埵の能なりと應て筆を把つて地藏〳〵汗かき地藏石地藏菴の前の火消坊と地藏の背に書して立置けり異なる哉衛後此地藏度々奇特あり或る時寺の爐へ小兒の這入けるを助け上げ又た誤つて庫裏より火出でんとせしが夜半の事なれば僧侶寐て知らざりけるを地藏走廻りて人を呼び起し先づ火を防ぎけると云傳へ今に此地藏を寶物とせり又た一休畫贊の懸幅、一休蟹箇澤の妖怪に示す偈、一休虎の畫、又た唐の牧溪和尚墨畫の觀音、東坡の畫竹、其餘古作の佛像佛器あり牧溪和尚坡翁の畫は宮川庄大垣住最上刑部太夫祐兼寄附せしと云ひ一休虎の畫を加へて三幅對とす又た蜷川家傳に云ふ最勝寺開基蜷川二代五郎親綱元仁元年二月十五日死す其後蜷川治部少輔常嗣最勝寺村に館を搆て住す永正二年正月廿日月岡野にて戰死せり

○陶彦作鞍并伊勢新九郎興起の事

新川郡布市に陶彦あり布倉嶽の神胤伊勢彦の後なりといへり馬の鞍を作り業とせり柿の白鞍にて馬の大小に應じ最と妙なれは世人作鞍と稱し貴べり後ち黑瀨に居を移し今に其所を陶村といひ子孫相繼て鞍を作れり應仁年中伊勢陶一郎といふ者勝ちたる上手なり柿の白鞍又た塗鞍もあり陶の作鞍とて人皆重寶とせり陶一郎成長の後新九郎と名を改め就中十七歳より二十歳迄で作りし八口の鞍世人最も貴んで伊勢の八つ鞍と稱し陶彦が鞍と同じく作鞍と稱せりされは新九郎作鞍の名譽顯然たれども大なる志あり產を破りて蜷川氏榮を師とし文道武藝を學ひ頗る長せり時に天下大に乱れ朝には舊功の家も頽廢し夕には卑賤より起つて國郡の主となる浩る時世にこそ先祖を起さん事易かるべし何卒關東へ赴き明君良將に親み共に謀つて天下を淸寧にし名を武門に輝かさんと朝昏念慮を廻らしかゝる事は神ゑ祈りてこそとれもひ氏神なれは日宮へ三七日詣けるに神も擁護の瞬を垂れ或夜新九郎が枕に立せ給ひ汝多年の願我に謀らんよりは汝が母に問ふべしと宣へり新九郎夢醒めてさまし〳〵神の告なりと喜びけれども亡母なれば是はいかゞと案じ煩ひしが屹と思ひ當りけるは新九郎幼稚の時母のいへるは人たる侍よりよきはなし我汝が長じて武士に秀でんこ

とを願ふなり因て此守を拔けん是は美濃國中山金山彦大臣二十重の守なりければ深く信仰して漫に緘を解くべからず若し汝が身に難ある時之を祈らは難速に解くべしと懇誨せられしが誠に今日こそ解く可き時節到來せりと云ひ自ら盥嗽し緘を破つて見れは則ち金山彦の守に龍鱗三枚あり別に書添へし文もありければ新九郎心に悟りはやく願も成たる心地していそぎ蜷川氏榮に見せ多年望みある事も明かし日宮の告夢母の拔けし守等の事詳かに語り出れば新右衛門氏榮披見し大に駭ひて是は北條家の重寶なり中山金山彦二十重の守鱗三枚は當時三島の神北條四郎時政に拔け給ひ北條家世々傳て家門繁榮せり然るに最明寺時頼に至つて諸國を行脚し失せたりと聞けり今汝が家に傳りたれは能く珍重し多年望の如く關東へ至り一たび武門に秀でたらんには姓を北條と改むべしと開諭せり偖て又新九郎が願も切なれば是より氏榮新九郎を武州へ送り遣はすの用意を急ぎ一日新九郎を招き首途を壽き氏榮いひけるは孤身の大儀は憂束なし同道の人を添へしとて二男小一郎貞朝平三十郎氏範今より兄弟の契約をなさしめ彼の鱗三枚を三人に分ち氏榮又た新九郎を子とし互に父子の約をなし氏字を與へ伊勢新九郎氏陶と名乘る又た路資として百金を與へ日置逸角同舍弟新藏長屋左門河尻與藏本庄對馬を同道せしめ彼是八人黑瀨を出て關東へ赴きけり去れは新九郎武州に到ても身上いまだ定らざれは暫く鞍を作り居しが此鞍關東に殘つて伊勢守が作鞍と稱せり然るに新九郎大田道灌の筑下となり伊勢新九郎氏陶又た伊勢伊勢守と武名を顯はし遂に北條と姓を改め鱗形の筑を揚ぐ明應三年甲寅五月相州小田原の城主大森筑前守實朝を攻め落し小田原城に居て武威を關東に顯はし伊豆相模を手に入れ功成つて後ち祝髮し北條早雲と號す文武の良將とて天下に普く聞へたり其子氏綱繼て武州房州を徇へ其子左京太夫氏康又た關八州を手に入れ猛威を震ふ氏康の舍弟上總介總成故ありて福島と名乘り相州玉縄に居城す武州川越の夜軍に當り復た北條と改めその差物は地色黄にして八幡と書き之を指て數度の戰功ありしも敵黄八幡と異名して怖れけり其子氏繁氏康の聟なり氏繁子六人あり末子左衛門太夫氏勝天正十八年小田原合戰に神君へ降る氏政は自害し息新八郎氏直は神君の聟なれは助命あり高野山へ配流せらる氏勝は神君に仕へて相州玉縄一万三千石に封せられ遠州懸川へ入城せり氏重病死し後嗣なくして斷絶したり

傳て云陶彦が近隣の童二三人戲れ遊びしが陶彦が作れる鞍に騎り柳の枝を策とし三人一同に駿々と驅立てけれは鞍自然にわゆみ出で南を指して行くほどに南山の下にいたり三童子と共に池の中へ馳入けるとかや此池船倉山の下上野にあり後ち此水を引ひて稻を養ひしゆゑ堤を築きて大なる池とし彼鞍此池の主となり大氣露れたる日は水面に浮み游ぎけるとなり此ほとりに船倉山帝立寺といへるあり此池の主たび〳〵人をとれるゆゑ時の住侶此池へ入ることを禁じ札を立てけるとなり今に鞍星の池といふ蜷川小一郎平三十郎の兩人は關東に赴き蜷川は北條左馬允と名乘り平は北條新左衛門と名乘り新九郎と三人兄弟の禮義厚く戰場に駒の頭を並べたるなり後ち左馬允は三浦合戰に程箇谷にて討死す新左衛門の後は神君に仕へ平野三十郎といひ平三十郎

其祖は平相國清盛の庶子なりといへり源平の亂に當歳なりしを五十嵐次郎兵衛盛嗣臣に命して越中新川郡の山家に隱れ避けしむ山人深く痛はり養育し長じて平右衛門尉信正となり武威を震へり子孫繼ぎて平隼人助といへるは蜷川氏榮が姉聟なり新左衛門は隼人助が二男なり長子は畠山に敵しがたく畠山の臣となれり則ち八臣と稱する一人なり畠山滅後平式部利長公に亡ぼされたり又た新川郡布倉嶽は布倉姫の神社あり伊勢新九郎は其神胤なり此神事に山上に赤幟を多く立て大勢凱歌を揚げて祭れり是を平氏祭といへり是は蜷川氏榮新九郎を關東へ送りて後ち援兵として盤澤宮崎の郷士盤澤彌一水野水之助宮崎三郎九郎信樂岩太に五十人つゞの卒を附け都て二百餘人武州へ遣はす時に新九郎戰功あらん事を布倉の神に祈り氏榮祭れるとなり今に此神には赤幟を多く立て輿を揚げて祭れるなり又た伊勢九郎左衛門と云ふ者猶ほ布市に在けるが其子醫となり江府へ至たり石町に住せしが大に行はれ伊勢元昌と稱す蜷川平野一族たる由緒によつて御典藥となり姓名を改め伊關元周と稱せしとぞ

○能州畠山の事幷義則楡原城に來住の事

足利斯波左衛門氏頼越中に在陣し九年を經て一國平均せり其後畠山右衛門督基國管領恩補の國として子孫相承け之を領す畠山は八幡太郎義家の後胤にて義滿將軍三管領の壹人なり三管領ともに天下の政道大小となく與る可き沙汰しけるが其後管領職も衰へ能州へいたり義統の時に加能越三州の政道にて能州穴水に在城し武威甚だ高し應仁年中七尾城長九郎左衛門信連、兜城三宅備前守

連、混田備中守、遊佐河内守を攻め末森城大窪三郎左衛門同伯父三宅三左衛門を殺し越中を蠶食す安住城神保安藝守氏治、魚津城温井備前守景隆、浦山城平式部、城生城伊丹主水、三塚城菊地十郎九郎、奈古城菊地の臣袋井隼人、水落城温井の臣小南内匠、富崎城小山田甚五兵衛、筒井雅樂助、黒瀬左近等悉く畠山に屬す八臣と稱るは長遊佐温井三宅平瑟田甲斐の庄なり或は神保甲斐庄を除き熊來隅屋を列するは謬りなり又た小南筒井小山田廣瀬隼人正を温井の四臣と稱す勇略勝ちたる者なり明應二年癸丑阿州正覺寺表にねて彈正少弼義豐が爲に畠山尾張守政長戰死す此時畠山義統能州に在て越中を併呑せんと手遣ひをなす政長の時は越中目代として椎名神保鈴木板屋を始め土肥倉川甲斐庄村田赤川菊地等の舊臣あり此度各議して云ふやうは應仁の大亂の起りは義統政長に讎憤あるを以て山名宗全をすゝめて天下の劇爭に及び遂に當家の社稷を失はしむる上は義統は從弟ながら冠讎なり然らば政長世を辭し給ふに今れめ〳〵と義統の下知に從はんこと弓箭の本意にあらず詮ずる所ろ能州より襲ひ來るを待て一戰し義統の首を取て先君の靈に供じ怨みに報ずべしと衆議一決して所々の要害を固め防禦の備へをなす義統之を聞き枝葉の軍詮なしとて重て手遣ひを止めらる此故に神保椎名以下は越後の齋藤へ便りて上杉顯定の幕下に屬す爾後越中は山の内の支配となれり（享德三戊寅管領畠山左衛門持國入道德本寶子義統をさし既き朔尾張守政長に家督を譲る依て從弟互に家督論あり細川勝元は政長を贔屓し山名宗全は義統を贔屓す後ち大和河内邊にて合戰あり　畠山八臣の）中遊佐加賀守景利は代々の宿老にて更に他の指圖を受けず依て驕奢の心起り修理太夫義續と隙あり故に遊佐私に兵を擧げ越中へ押入る天文十二年癸卯十一月廿五日天神川原に於て倉川肥前守清

房同清經と戰ふ遊佐打勝ち倉川父子を討取り其地を收めて爰に居を占む弘治二年の春畠山義續死去す遊佐之を聞ひて嫡子萬五郎景房（後義房と號す）を携へ能州に至り義續葬送の所に推參し長對島守に因て譜代相傳の由緒を述べ當義則公の宥免を蒙り萬五郎を以て奉公をなさしめんことを願ふ義則許容ありて遊佐父子本國に歸る其年十月遊佐加賀守病死す其節又た温井肥前守景長が女を以て長清連が嫡子重連に嫁せんことを約す然るに義則彼娘の美なるを知りて頻りに戀慕し密かに奪ひ取て妾にせんと計る温井之を聞くといへども知らざる躰にもてなし急き長重連へ嫁し婚姻をなさしむ義憤甚しく事に觸れて風情惡かりしより景長致仕し剃髮して法名承俊と號し執事職を嫡子に讓り二男は三宅の家を繼ひて備後守長盛といふ（筑前守綱廣か養子なり）義則宿意止みがたくやありけん飯河肥前守に命じ承俊を賺し飯河が宅にて殺さしむ故に承俊が弟温井山城守景貞同苗瘋人秀俊兩人甥を供して加州へ出奔す爰に於て長對馬守執事職に補せられ國務を沙汰せり斯て永錄三年に至り義則愚暗にて武事を忌み大將の器なく唯た酒色に淫しけるゆゑ一族幷に八臣相議して退けんと欲す依つて義則舍弟義辰を伴ひ能州七尾城を出奔し石動山の尾崎より船にて滑川へ着せり夫より越後へ渡海し上條彌五郎義春の亭に至て輝虎に對面し君の惠みを以て再び本國へ歸らんことを歎きける（義春は義則弟）輝虎心に叶はずといへども近年輝虎の幕下と稱し已に弟を質とせしかは之を許るし哀憐を加へらる能州には義則嫡子次郎義隆とて七歲の幼童あり長續連傅り立て七尾城に據れり同八年乙丑温井兄弟をも加州より召び返して共に補翼す續連已に衰老に及といへども嫡子九郎左衛門重連次男杉山伯耆守則直三男飯河左京進義賢（肥前守養子）等の武に器量ある子共多く家富み權高ふして目ざましき有樣なり然るに續連が聟遊佐藏人義房（又美濃守）猜ましく思ふて池田日野野田片山（日野一に月窪）の四臣と密かに謀り元龜二辛未三月花見宴會を催ふし畠山右京介義隆を（時十八歲）已が亭に招請して（遊佐の宅は今ま鹿仙寺の地なり）毒殺す去れど遊佐が所爲たるを知る者なし義隆の息春丸財か四歲なりしを長重連輔佐して家督たらしめ先つ義則の舍弟二本松伊賀守を（義有と號す）七尾の城へ移して陣代とす今茲天正四年春丸九歲にて式部大輔義春と號す老臣遊佐長温井三宅を始め神保肥前守（初源次則）同姓周坊守（越前守息）畠田出雲守同彈正忠同加賀守隅屋遠江守甲斐庄駿河守伊丹宗右衛門同孫三郎（遊佐義房弟）飯河若狹守光誠富木小次郎胤盛松波常陸介義親熊來左近太夫土肥次郎左衛門佐脇屋在京亮笠松但馬守西村備前守井上大町德田松崎などいふ佩强の輩相從て國を守る然るに謙信加州河北郡森本宿に於て貴布禰の石黑左近光治鳥越の久瀨但馬守（後ち越前黃門秀康公へ仕へ勘當を受けて討死す）を郷導とし津端の驛に着陣し一揆の城へ手遣ひをなさしむ又柏崎の妙樂寺を使として能州七尾の城へ申送らるゝは舊主畠山義則兄弟數年牢浪して予が扶助を受け越後に蟄居し歸國の事を願ふといへども境遠かに隔たり殊に謙信信上の間へ毎度兵を發して餘暇もなくいまだ義則の本意を達せず今既に飛越を打隨へ加州奥郡へ押入り津幡に在馬す依て使を馳する儀は先主義則を歸國なさしめ永く我幕下として鴨禮を加へ能く支配に從はゞ其國前々の如く八臣の仕置相違あるべからず若又同心なくば謙信速に馳向へ一戰の上にて決すべしと云へり然るに遊佐温井長三宅平畠田等七尾の城に會合して群議區々なり多分は謙信の論しに服

すといへども長對馬守續連同子九郎左衛門重連が一黨頭を掉ふて更に諾せず乘て信長へ通ずる儀なれば只管細川家の後援を頼み連を當城に究むべしと云ひ江州安土へ羽檄を飛ばせ國中所々の要害を固め防戰の備へをなす故に謙信加州の討罰を閣き十月二日津幡を打立ち能州外高松に着馬し土肥但馬守同伊豫守が許へ（能州國侍）味方に屬し兵粮を出さるべしと云ひ送れるに兩人兵粮を出し降參して先陣の列に加はる爰に越中射水郡氷見の庄に菊地伊豆守武勝とて勇士あり九州菊地肥後守武重が二男菊部助敏武が弟伊豆守武本が末にて畠山の部下となり已に八世英遠に住す此度謙信の麾下に參り加州表の合戰に勳を顯はさんとて嫡子右衛門佐二男十郎（一に十六郎）を召供し郎等三百人三本應の羽の旗を押立て險路を經て今石動より津幡の驛へ打越けるに謙信入道は已に能州へ陣替のよしを聞き汗馬に鞭をあげ外高松へ馳付けしか〳〵の由をさうし愚息の内壹人を質とし忠戰を勵むべきよし直江大和守に因て披露したり謙信對面ありて厚志を感せられ紀新太夫行平の短刀を伊豆守に給はる謙信能州へ攻來ると聞へしかば能州の侍大將長譽田甲斐庄隅屋三千餘騎にて鳩場といふ所に打出て越後勢を討敗らんとす依て上條民部少輔義春中條兵次郎景資山吉玄蕃允豊守加治但馬守秀綱上倉治部少輔信綱等馳向て大に戰ひ六百餘級の首を取て殘兵を府中へ追込みけり謙信十月五日七尾城へ押詰め天神河原御塚山の邊に陣營を定め先手の大將に下知して宿城を放火し邑を圍んで攻擊ちける城中素より憂悟せし事なれば諸士の妻子を取固めて多く兵粮矢玉を貯へ且國中にゐる一向宗門徒の寺院に觸れて後援をなさしむ法昌寺上向寺以下一宗の惡徒等後ろ卷きするよし越後方へ聞へしかば謙信直江河田に下知して齋藤有坂菊地石黒等の先方の士を以て此方より送寄せし彼の一揆共を悉く討平けたり此間に上條織部黒瀧與一景連大將として一千餘を帥ひ熊來の城へ押寄せ即時に追落し夫より鳳至郡へ働き入り長對馬守か居城穴水を始め附屬の小城どもを段々に打隨へ其旨を御塚山の謙信に達す能登方よりも追々七尾へ注進しければ續連父子牙を嚙んで怒るといへども大敵を目前に引受け防ぎ戰ふ最中なれば手を出すべき樣なく所詮連を當城に究むべしと長一族必死になりて楯籠り所の勇士を勵ましさすがに古き畠山家重代の侍忠義を守り命を塵芥に比し防戰ふこと已に二十四日に及べども城兵更に屈せず寄手にも死傷多ければ此城中々急に陷るべしとも見ゑざれば塞天の長陣いかゞなりとて石動山の衆徒と相議し朝ヶ嶽を要害に搆へ上條織部正・同民部少輔義春を總大將として越中先方の强をさし添へ七尾の城の手當を殘し穴水に長澤筑前守熊來に藤藤帶刀、柳木に長與市、甲に平子和泉守を入れ置き珠洲郡の手遣ひを命し十一月中旬謙信は高山越より加州へ打入る此間御塚山の陣中にて初雪降れる朝謙信よめる歌あり左の如し

野伏する鎧の袖も楯の端もみな白妙の今朝の初雪

畠山義則再び能州へ歸ることを得す永錄十二年秋越中へ來り神保長純を頼み櫛原城に住し後又神保と隙あり終に亡ぶといへり其の後能州は遊佐温非三宅等我儘に押領し長氏は世々能州にあり近代畠山の幕下に屬し八臣の中なりしが近年遊佐温非等謙信に味方し勢漸增すに及び遂に長對馬守

重延の一族を亡ぼす其頃重延は信長へ服し舍弟を質として遣はし置けり長九郎左衛門延龍即ち是なり然るに能州に於て遊佐温井三宅上松黒瀧の輩重延一黨を討亡さんとするよしを聞き信長へ願ひ出で本國へ歸り敵を討ち申さんといひけれは信長公尤の事なりとて人數をさし添へ本國へ歸さる依て延龍能州所々に攻寄せ上松黒瀧遊佐温井三宅を悉く討亡し温井遊佐三宅は越後へ走せ退けり故に能州は延龍壹人にて治めけるが天正八年前田利家公能州の守護となり給ふ時に長は與力に取上げられ羽咋郡半を分ち館の濱に在城せり利家公府中にまします頃利長公は前田五郎兵衛と共に七尾へ引移らる然るに信長公死し給ふより能州へ聞へしかば石動山天平寺の衆徒より越後方へ此虚に乘と前田長を亡さんと申遣はせしに遊佐温井三宅等も大に悦こび越後勢を催ふし六月廿三日能州免良の浦に着船し三千餘騎にて石動山の衆徒と心を合せ荒山にて大に合戰あり前田方打勝ち給ひ温井三宅遊佐殘らず討死す天平寺衆徒數百人兒童子まで斬殺さる本堂寺院も悉く燒失せり其後利家公前に優りて御再興あり金銀を鏤め美を盡せり

○兩上杉の事并長尾椎名合戰

管氏將軍の時より管氏の二男基氏を鎌倉に置て關八州の政道を執り給ふ基氏の子孫相繼ひて氏滿滿兼持氏成氏あり是を鎌倉公方といひ其管領は代々上杉なり上杉家は藤原冬嗣公の後胤にて後ち兩家となり總領は相州山の内に住せるより山の内殿と云ひ家老は長尾白倉小幡大石なり二男は扇谷に住し家老は太田上田糞田荻原なり鎌倉公方後には京都將軍と不和を生し取合たび〳〵にて終に四代にて絶へたり兩上杉の威勢漸く震ひしが兩上杉も又た不和となり北條早雲に滅ぼされたり政氏高基晴氏義氏までを下野國古河公方といふ今の寫眞川の先祖なり浩りしかば足利將軍代々天下の武將とはいひながら四海一日も穩かならず嘉吉には結城彈正氏朝泰王丸安王丸を援けて楯籠り京勢と大に戰ひ應仁に至り山名宗全細川勝元は前六年後五年文明九年まで十一年の間京都にて大に戰ふ其外五畿七道亂立ち一日も猖獗揚らざるなく鯨波地を動かさずといふことなし中にも十代將軍義材公の時には近江國佐々木六角四郎高頼將軍の命に從はず是に依て佐々木退治の爲め江州へ御出馬あり是を鈎御陣といふ其頃越中には椎名越中守敦廣越後には長尾六郎左衛門尉義景能州には畠山義統三將鼎のごとく峙つて爭戰せり是より先應仁年中椎名長尾合戰すといへども此時に至て大に亂れ人の亡ること亦夥し時に明應元年なり

越後長尾は鎌倉權五郎景政五代の孫梶原平三景時より八代長尾六郎左衛門義景其後六郎爲景なり

椎名六郎胤平といふは頼朝公に屬して元暦年中西海の戰に譽を顯はし其子六郎胤繼は建長三年辛亥正月將軍二所に詣て第一の列たり其後裔次郎長胤畠山左衛門佐基國に仕へて肥前守泰胤に及べり

同三年六月には京都將軍義材公を細川政元が計ひにて家人物部紀伊守が館に押籠め奉る然れども内應の者ありて物部が館を潛かに忍び出で給ひ主從九人山伏の姿にて越中を頼み思食下らせ給へ

ども上杉九郎房長と長尾六郎爲景と合戰し越中の椎名も長尾と戰ふ折なれば又た美濃路へ落させ給ひ其後は周防國へ赴き大永三年四月に阿波國撫養といふ所にて薨と給ひ御年五十八惠林院殿裳山と號し又た義植とも稱せり天文四年贈從一位大政大臣烏公方と申し奉るは此將軍の御事なり又た永正六年七月關東の管領山內民部大輔顯定入道可淳越後長尾爲景は舍弟上杉民部大輔房能が敵なりとて上野國平井の城より越後へ押寄せしに爲景無勢なりければ一戰に打負け越中の西濱へ落來り時の樣をぞ伺ひける然るに翌年信濃國住人高梨攝津守管領上杉顯定入道可淳を討取りければ長尾爲景越後へ歸り大に威を震ふ

○長尾房義越中諸將を滅し爲景に背く事

越後の長尾房義暴虐にして國民大に苦しむ越中の諸將も之を憤り鈴木大和守倉川肥前守甲斐庄助三郎唐人兵庫頭板屋刑部少輔山下左馬介等謀略をなし永正二乙丑八月巳に越後を襲はんと企てければ長尾六郎爲景之を聞き房義に商議し三千餘騎を率ゐ越中へ送寄し新川郡に於て大に戰ふ房義大に打勝ち荻田監物魚津城鈴木大和守國重を討ち難なく分捕せり其外岩瀨城赤川出雲守久次滑川の府久呂藤右衛門兼久を始め斬取れる首八百餘級國侍悉く打負け元の如く上杉の下知を守るべきよしさま〴〵に望めるゆへ爲景遂に許容せり越後勢上郡の働きを止めて平均に附屬し爲景は西濱に城壘を築き番兵を籠めて抱へけり其後爲景房義の無道を討んと西濱に居を移し要害を修補す相模守房義滅却の後越中の諸將長尾の下知を拒み神保豐前守氏重（富山守山兩城主　法名一榮）越前の朝倉孝景に從ひ椎名越中守勝胤（松倉金山兩城主　法名慶山）畠山義統に便り板屋刑部少輔政廣（魚津城主）加州一揆の徒となる其餘の國侍心々にして過半朝倉に與みせり故に爲景越中を討つこと數廻なり

神保は坂東八平氏にて常州笠間の押領使常家が男中村庄司宗平が末葉なり神保典市同典三同太郎は承久の宇治合戰に關東の味方として殊に戰功あり明德の頃に至て神保宗三郎國久四郎左衛門尉國氏肥前守氏久是れ皆な畠山基國に附屬の衆なり又た越中の土肥七屋も又た坂東八平氏なり

遊佐板屋は野州小山家の庶流なり又た齋藤河合赤塚は利仁將軍の孫加賀守吉信の後裔にて數代の侍なり

○一向宗一揆幷に長尾爲景坑に陷り最期の事

加州の守護は富樫介政親なり長享元年丁未の春より本願寺高田派兩門の徒優劣を爭ふ富樫和解を申入れらるゝといへども高田派を引かるゝにより本願寺の門徒等商議して曰く勢州一身田專修寺の二世權僧正應眞は政親が外孫なれば高田方をば贔負あるべし然は畢竟我が門族沒倒せられんこと疑ひなかるべしと一派黨を結び同戊申五月下旬石川郡高尾の城へ押寄せて攻戰ふ富樫終に打負けて越へ退く同年九月九日竟に自害す是より加州は本願寺の有となれり夫より倍々手遣ひして近隣悉く已が宗門に歸せしめんとの企をなすによつて能登の畠山越前の朝倉勢を出して防ぎ支へけれども門徒多勢にして利を失ふ越中に於ても亦た然り越後は猶更門徒多く爲景之を制せんと欲す

れども能ず天文八年己亥八月畿内北國筋風雨洪水にて家屋を顚倒し人民牛馬死すること夥し翌九年九月餓莩巷に滿ち疫癘天下に流行して民吏に死亡多く田野荒廢せり加州の一揆等浩る折を幸として越中越後の津々に浦々に着船し濫妨狼藉限りなし爲景安からず思ひ能登越前に牒し合て三方より加州へ攻め入り一揆を亡さんとて今年庚子七月上旬軍勢を催し發向あり越中魚津の板屋刑部少輔放生津の江波參河守並に加州一揆の避坪坂伯耆守爲景に與みし手引仕らんと神文を以て無二の心を示めしければ爲景悅ひ加州を指して發向す越中の門徒安養寺瑞泉寺などの大坊板屋坪坂を賺し俄かに心を變せしめ射水郡關野邊より礪波街道の所々に坎穽を羊腸に穿ち上に草土をれはひ越後勢を待懸けたり道七齋爲景さしも良將といへども逆の究にやありけん之を察せず先陣後陣の手分けして板屋刑部を案內者とし同月廿四日巳に加越の境近く栂檀野に至る所に加州一揆原坪坂伯耆守が下知に應じ坎穽の邊へ足輕を出し懸け留めんとす爲景之を拂はんとて眞先に進むと見ゐしが忽ち坎穽に陷り伏兵の爲めに重手を負ひ遂に自害して果てにけり一揆原は競ふて前後より攻め立て越後勢辛ふして爲景の死骸をれさめ本國へ引返す斯くて春日山の林泉寺に葬る大龍寺紋竹庵主讓恕道七齋と謚す爲景近年威勢强く智勇にはこりけるやゑかくのごとく奸計に陷りけるとなり

一書に天文七戊戌年季春畠山尾張守尙慶の外孫德大寺大納言實規卿京都の亂を避けて越中へ來り射水郡放生津の城に在せしを爲景之を聽ひ四月九日實規卿を始め宦家の貴族七八人を討取り夫より同郡守山の城へ攻懸け神保宗右衛門椎名肥前守江波參河守等旃檀野に馳合て相戰ふ同十一日に爲景坑に陷死す宇佐美駿河守は畠山植長が被官唐人兵庫頭山下左馬助が籠れる松倉城を陷し其地を沙汰せしが早速馳付け神保椎名等を追拂ひ放生津の番兵と程なく引取り越後へ歸る富樫軍記長享二年五月越中の衆議尙將軍の御敎書を以て富樫を救はんとするよしを聞き加州一揆放生津を取り礪波郡の軍勢は蓮沼へ集り其の勢都合三千餘越中勢は英田光濟寺浪人阿曾孫八郎盛俊小杉新八郎基久千餘都合五千倶利伽羅より乱入し加州の一揆に打勝ち千三百打取といへり又た同書長享二五月富樫介政親を攻る一向宗の一揆義敎將軍の御敎書を以て洲崎和泉入道慶覺河合藤右衛門尉宣久河北勢を率ゐて倶利伽羅笠野松根に陣を張り越中勢を押し又た七國志に永正三年冬加州能美石川の一向宗一揆山田坊主黑瀨覺道又た黑瀨圓鏡といふあり又た天正八年十一月加州の一揆上方へ發向するよし聞へけれは越前の諸將御幸塚の勢を催ふし數千騎押寄せ悉く退治す若林長門守同雅樂介同甚八宇津宮丹後同藤六岸田常陸同新四郎鈴木出羽同右京同次郎左衛門同采女同太郎窪田大炊之助坪坂新五郎長山九郎兵衛荒川主助德田庄二郎三林善吉黑瀨左近十九人の首を信長へ呈し安土の松原に梟す尋で金澤城へは佐久間玄蕃松任の城へは德山五兵衛を入置くことゝなれり

○景虎與越中諸將一戰姫川邊一事

天文十五年丙午七月景虎二千餘騎を率し姫川を渡り進んで堺川の邊に至り先勢を以て越中の椎名

肥前守泰胤が抱への領分を放火して輕く軍をれさめ夫より關山へ打出で信州の境を巡視して越後へ歸る同天文十六年丁未七月廿七日椎名板屋甲斐庄遊佐七寸五分（増田）等兵を催し六千餘騎越中を發し親しらず駒田狗戻などの切所を過き頸城郡姫川の邊まで押至る此川は松川久瀬川平川の三の流落合て殊なる大河なり爰に越後勢を待受け討んと川を隔て西森の中に兵を伏せ又た八丁餘退いて六備に手分けし陣を張る景虎此のよしを聞き境を踰ゑて渉し來ることの奇怪なれ足を屯めさすなとて五千餘騎を率し姫川なで打出で先下倉與三左衛門廿粕七郎右衛門を軍監として遣はしけり兩人馳せ歸りて申やう寄手の備を窺ふに川を去ること七八丁なり味方川を越る間には敵のかゝり來らんことあるべからず速に川をわたし一戰わらば勝利疑ひなからんと景虎宇佐美駿河守を從へ斥候に出て下倉甘粕をも召連れ汝等が見屆いへるが如く敵の陣は川を去ること程遠し是れ兵法に乖けり我か勢川を越るを見て馳合せんとせは軍備騒ぎ立ち足並しどろならん又た靜かに懸り來らは其間に味方川を渡すべしさあらは假令先陣に打勝といふとも跡より進む新手に一たなりも怯ふべからず然れは味方の勝利歴然たりしかしながら遊佐板屋は老功の兵なり椎名有坂とても場馴たる者なれは悔るべからず察するに敵伏を設け我か兵川を渡て向ふの岸にいたらん比ひに伏を起して我が備を乱し其圖をはづさず一同に蒐り來らん謀なりと知れは卒爾に川を渡へからず若し又た無法に懸り來るとも悔らず大將の下知を守るべきよし申觸れ本陣に歸りて長尾源七郎景久高梨源五頼治同姓小太郎政頼山村右京亮繁信平賀志摩守頼經に七百餘騎を差添へ松明相連り日暮に一里餘上の瀬へ廻り太鼓を燒き諸軍殘らず向ひたる躰に見せ景虎の軍營には夜守の備をなし篝火を燃さず本陣ある模樣は越中勢に知らせず過半上の瀬へ向ひ夜更越後の透波敵陣へ忍び入て此處かしこに火を懸けしかば是を見て越後の上の瀬へ廻りたる人數鬨聲を發し混々と川へ打入る敵川を渡さじと相支へて戰ふ其原に景虎二千餘騎にて直ちに本陣の瀬をわたし前後より攻め立つれば越中勢なにかはたまるべき我先にと山の手へ懸りて敗北す山本寺（一に三宝寺）竹股、高梨、柿崎二宮等之を追ふこと急なり暗夜といひ險難といひ越中勢狼狽して谷に陥ち流に溺れ死傷する者數を知らず去れども僻地の戰なれば長追ひは無益なりとて勢を引纒め曉天を待ちければ山頭の宿霧漸く晴て斬取る所ろの首凡そ八百餘級景虎の旗下鬼小島彌太郎五味山吉大能已下戰功あり皆な感狀を給はる又た此時椎名が陣に榎廢の紋の幕を殘し越後方へ取られたり

○景虎知ゝ機還ゝ軍事

天文十七年戊申景虎六千餘騎を率ゐ越中へ押寄せたり此事先に越中へ聞へければ諸將魚津城に會合して評定しけるは景虎暴武者なれば甲頭に出で爭はんは武略の拙に似たり渠を幾度も自國へ引受け一騎一矢もわてがはず各々居城を堅く守つて數日を經なば越後勢糧に困んで鋭氣自然に挫け惰氣を生ずべし其時四方八面より起り短兵急に討つならば恐くば勝利掌の中にあらん當國の事は道七齋屍を暴せし地なれば恨み深し一旦和融すとも末ながく安穩にはなさしむべからず各々此旨を肝に刻み心を一にして專ら敵を拉ぐ術こそ肝要たるべしと謀り椎名、神保、板屋以下交〳〵人質

を取り立山の寶印の裏に血判して誓約をなし夫より各自の境を堅固にし守れり越後勢は春日山を發して長濱有馬川を打過ぎ名達浦本鬼伏糸魚川を押通り瞳水より雄手の山にかゝり青味川駒田親しらずの切所を妻手に見て堺川に至る夫より越中新川郡へ乱入しける所に椎名肥前守泰胤が旗下に石動山城守といふ剛の者あり宮崎城に籠て國境を警固しければ先づ渠と手合なくては通り難しとて先陣の人數を懸けて責むるといへども堅く守つて出でざりければ押の勢を殘し置き黒部川を渉り此處彼處へ放火せしも城より一騎も打て出す戰はんとする氣色なし越後の諸士いひけるは當國にたゐては椎名神保は根なり其餘は枝葉なれば神保椎名をだに攻落さば其外は刃に血ぬらずして降さん景虎曰く我今玄金山魚津を攻め落すならば彼に從ふ國侍八方より出で後詰せん甚だ力を勢ずべし此度は敵に弱みを示し小利を與へて奢らしめ重て發向し惰怠を討ては大利疑ひあるべからず去れば長陣は益なしとて同月十四日景虎越後へ歸陣せらる景虎十九歳の時より其知老將に勝れりとぞ云ふ

○景虎の機變轉化

天文十八年己酉六月景虎戰中へ發向して黒部川の邊に陣し越中勢を襲ひ覆兵奸を用ひ或は詐りて敗走し又た切所によつて打てり此時石動山城守を始め遊左加賀守長澤筑前守（土岐の餘流）有坂備中守平子和泉守等降を乞ひ人質を出す景虎之を取て七月中旬軍を返さる時に椎名筑前守追討せんとて勢を出し先づ遊佐有坂を討ち遊佐有坂景虎の跡を追ひ羽檄を飛はせ後卷を乞ふ景虎之を聞き捨て馬を早めて堺川を渡りければ椎名はしすゑしたりと長澤有坂を攻め又堺川邊へ指向け置きし人數をも召返し一同に長澤有坂を圍ひ討てり景虎間者を以て之を聞き市振の驛より取て返し一騎がけに堺川を渡て火急に後卷し松倉勢を伐崩し首數級を取り殘卒を追拂ふ敵も味方も早速の後卷を感じ畏れぬ斯くて三條の帶刀左衛門瞳水の須加但馬黒瀧の長古志の片貝以下に人數をさし添へ宮崎の城に殘し置き景虎越後へ歸れり嚮きに一言の會釋なかりしは景虎後卷すと聞かは椎名切所を遮り妨げ功ゐるべからずと豫め察せられ斯くあり玄とぞ

同天文十九庚戌閏五月十八日景虎越中へ打入り六月中旬まで在陣し去年までの働きに劣り取し地を仕置ありて長尾源七郎景久同姓右兵衛尉景森長片貝等を國境に殘し置き景虎いへるは越中は一本采幣なき寄合なれば仮令牛王寶印に血を酒ぎ盟約するとも畢竟和合すべからず專らに計を廻らし渠等内端を離れしめ味方に歸降するやうにせよと申含めて歸馬あり同年九月景虎（時政虎と改む）越中へ出張椎名泰胤が抱への地へ働き入らんとせり時に小井手城の二宮兵庫助逆心を企て豫め金山へ約して相圖を定め已に越後勢の先陣二の身までも進み寄する時刻を考へ二宮手勢を率ゐて短兵急に景虎が旗本へ伐て懸れは越後勢思ひも寄らず是は如何と仰天し已に敗軍と見へしが景虎少しも臆せず采幣を揮ふて乘廻り士卒の鋭氣を勵ませ前後に下知し孫武が所謂常山の蛇、中を擊ては首尾ともに援け正奇循環端なきがごとく戰ひけれは椎名二宮立ちぞろに利を失ひ寨を指して敗走し越後の遊軍は後備へ追討ちせり此時二宮討死し椎名は寨に引入ける越後勢手痛く攻懸けれは防

き難くや思ひけん寒を逃けて金山の本陣へ引退く同年景虎越中能登も心懸け先づ越中へ切入る爰に甲斐の信玄晴信といふは八幡太郎義家の弟新羅三郎義光二十四代武田信虎の子にて才智武勇勝れたる大將なり景虎越中へ打て出づれは信玄潛かに禪宗曹洞派の僧大益に小幡彌三左衛門を副へて越中へ遣はし景虎の働きを伺はせけるとなり

○景虎板屋刑部を攻むる事

天文廿三年甲寅三月中旬景虎越中へ出張し椎名肥前守泰胤が押として天神山の邊へ長尾小四郎景往飯沼源太郎長與一等千八百騎を置けり景虎布施川を渉つて板屋刑部少輔政廣が居城魚津を攻め動かし柿崎和泉守河田對馬守皆な先陣たり景虎常々の鬱憤は父道七齊横死の事は板屋坪坂端泉寺等が姦計に依るなり已に坪坂端泉寺は死去し板屋のみ生殘れり渠が存命のうちに魚津城を攻め落し板屋が首を軍門に曝さずんば何を以てか天を戴かざる仇に報せんと申されしこと群臣の耳に留れは忠戰今此一擧にあると思ひ合しなり板屋も景虎の宿意嘸あらんと察し元來勝れたる剛の者しかも老功の武者なれは常に諸將に援兵を約し置きけれは神保安芸守氏春が異母兄越中守政氏及び瀧三郎右衛門（畠山家平一揆の盟寺崎民部左衛門齊藤帶刀土屋平次兵衛遊佐信濃守土肥倉光野木唐人七寸五分以下の國侍四千餘騎加州奥郡の一揆洲崎高板幷に門徒の大坊主等二千餘人皆な魚津へ馳せ集り越後勢を迎へ討んと同月廿三日の合戰に柿崎河田伐勝て刑部少輔政廣が長男板屋七郎が備へを二丁餘り追立てたり是れを見て神保瀧寺崎馬の鼻を广行に列ぬ旗の足を龍粧に進め横を討んと懸りける直江大和守實綱齊藤下野守朝信色部修理亮長實大關阿波守親益二隊に合せて双方互に戰ひ勝負いづれとも決せず時々高梨攝津守政頼須田大隅守親滿島津左京進親久清野清受斬一方の大將として加州河北の一揆等と揉合けるが高梨が鵞の旗、須田が鶏鳥の旗、島津が綿十文字の白旗入ちがひ左へ靡き右へなびきけるを景虎遙かに是をみて甘粕中條あれ一揆原追ひ散らせと下知せらる中條越前入道梅坡齊大國修理亮頼久遊軍の侍を押出し新手を以て揉立てけれは洲崎高坂怖へかねて引退く遊佐齊藤野木唐人等板屋刑部が旗本へ加はり河田柿崎が勝ち誇りたる手先へ懸り火花を散らして戰ひ越後勢疲れて敗れんとす甘粕近江守入替て守り返せり斯くて兩陣死傷多く双方相引になり其日の軍は止みにけり互格の戰ひなりしに越中方は勝ちたりと大に勇み喜び又た明日も戰はんを思ひしにいかゞしたりけん越後方總軍をれさめ本國さして引返す此軍に大國修理亮危き働きして抜群の高名あり景虎感狀を授けらる（大國は源三位頼政の弟源藏綱人大夫頼行の孫三郎頼連始めて大國の保と號し其子孫三郎頼祝より數代相續いて越後に住す）

○板屋七郎の戰死幷に刑部少輔生捕るゝ事

天文廿四年卯七月景虎巡中魚津へ出張し去年魚津を攻めし時利なかりしは越中の諸將五百七百の馳せ武者にて部伍をも正さず一備懸りに働き來るを味方法を守り却て後れを取るに似たり今度は備の數を多くして戰にかさをかけ我增に懸合ひ一隊切の格を用ゆべしとて豫め諸將と議し追手の先陣は柿崎和泉守景家搦め手の陣頭は河田豐前守親章に命せらる折節河田は病氣にて出陣なり難きにより色部修理亮長實竹股筑後守春滿同右衛門尉春倫（後ち三河守朝綱）を仮りに部將とす此事越中へ聞へ

しかば板屋も半途に迎へて一戰を遂げんと方々へ急を告げ諸將を招き集む然れども越前の朝倉は加州の一揆退治として赴き礪波郡の神保石黒久瀬江波益木はさし當る加賀口の防ぎを大事とし魚津を救はざりければ板屋少勢にて越後の大勢に當らん事いかゞあらんと籠城し械栅をかき逆茂木を引き要害によつて寄手を待てり廿五日越後勢城を圍んで矢炮を放ちて攻め懸け板屋の一黨勇を震ひ防禦の術を盡せり時に神保兄弟商議せしは板屋が急を見棄て救はずんば舊盟に背き信なきなりとて瀧江波寺崎を始めとし將卒千餘人魚津へ打向へり是を見て土屋唐人村田入膳野本川上遊佐倉光五六千援兵として魚津邊に打出で勢〳〵に屯ろし家々の旗旗幟々として目に餘れり景虎軍監をして伺はしめ自も大斥候に出で委はしく見屆け乘て諸將に令する如く一隊切の働きをなし無二無三に對する敵を破り援兵も悉く追拂へり去れは城を圍ひし人數は暫らく解て追手搦手の虎口を堅固に押し城外の戰ひ酣はなる時其勢ひに乘り短兵急に城を攻むべし尤も板屋父子が首を討取ること肝要たるべきよし申渡さる宇佐美駿河守先陣に至り此趣を柿崎に傳へて明朝辰の上刻備へを甘がす議定をなす時に河田豐前守は病に依て國に留り居しが少し快き爲め手勢三百餘を率ゐ道を急ぎて懸け付たり宇佐美景虎に向ひ城兵後卷に力を得卷解す味方を喰ひ留めんとて搦手より突出るなるべし一術仕るべきやと申す子細わらととわりければ宇佐美搦手へ趣き虎口前の道筋細く萩薄打交りたる野中に河田が新手の勢をすぐり明朝定めの刻に至り鹿毛の馬に乘り團扇を揮ふて先づ色部竹股が人數を引揚げたり城兵是を見て喰ひ留んと蕪地によつて駈出づる宇佐美襲は

れたる体になし足ばやに諸卒を退く城兵機に乘て慕ひ來るを一の伏せ起りて左右より挾んで打ち敵忽ちに奔走すかさず定行乘戻し城をせひる躰をなせり城兵木戸口に相支へ始めに懲りて只だ遠矢に討取れと矢衾を作りてさん〳〵に射立て宇佐美下知して早々人數を引き取り已れ一騎馳戻し二三遍輪乘して屹と城を睨み馬の鼻を返し徐々と退き去る爰に於て板屋七郎あれ討取れと城門を排き真先に進めは慓悍の壯者ども我劣らじと郭をはらふて伐て出づ河田豐前守得たりかしこしと種が島の小筒を連發せしかは城兵周章ふためく所へ色部竹股返し合ひ鎗を揃へ突て懸る其時左右に殘し置きたる伏勢一同に起り敵の跡を斷つて前後より攻め立てけれは板屋七郎之を見て運命限りとや思ひけん三尺餘の野太刀を拔持ち弓手妻手に薙拂ひ縱横無碍に伐乱しけるが河田豐前守旌押立て城門に乘入らんとするを七郎逸さんに馳戻し刃むかふ所の越後勢を切拂〳〵河田を討んと間近く來るを豐前守鎧れつ取り七郎と職ひけるが竟に七郎を馬より突落す板屋起き上らんとする所を河田が郎等走懸けて遂に首を打落す追手に在ては柿崎和泉守令を守て卷解したるが搦手に軍わりと覺て鯨波夥だしく火の手見へければ令を守り河田に先せられたること殘念なりとて麾揮り廻し鹿砦逆茂木ふみ倒し一の城戸を押破りて無体に攻入る城將板屋刑部少輔さしも老兵なれば遽てず殘卒に下知して防ぎけれども猛勇の柿崎面もふらず込入りしかば城兵追立られ刑部少輔も手負ひて柿崎が郎等に生捕れ遂に落城せり景虎悅び夫より後詰の駈武者を追拂ふべしとて一同に向へり越中の諸勢も總懸りにて一陣破れば一陣繼ぎ前隊崩るれば後隊代て戰ひ竟に越後方

の勝となり土屋平次兵衛赤塚左近尉入膳彌太郎村田河上河合野木悉く討死し雜兵都て二千餘人戮を野原に暴しける越後方にも討れたる者若干といへども大に打勝ち殊に景虎の舊憤此役に散せり斯て魚津の城へは番兵を入置けり同年七月柿崎和泉守長尾小四郎景征小笠原源次郎信定長與市景連及び長澤有坂平子以下四千餘騎魚津城より兵を發し水橋を馳過ぎ荒川を渉つて富山へ働き入り神保石黑益木江波等と相戰ふ越後方勝利を得て軍を收め長尾小四郎小笠原は是より常陸國に向ひ柿崎長は越後へ歸る

○越中諸將景虎を降す事

永錄四年辛酉六月上杉輝虎（塚字は時の將軍義輝公より給はる上杉は憲政より讓る）越中に軍し本庄彌次郎繁長色部修理亮をして富山城を攻めしむ神保兄弟齊藤帶刀七寸五分肥後守以下輝虎の猛威に畏服し柿崎景家長澤有坂に便て去年より降を乞ふ輝虎越中の諸士を深く憎むといへども近年關東の大敵と取合ひ隙なき折からなれは姑く其望に應せられ荒川を限て是より越後支配と定め平和の儀を許さる椎名泰胤も輝虎の武略に催され近年城に蟄して手を出さず輝虎よりも手を懸けず只だ街道筋を打隨んとの事のみなり然るに又た松倉金山へ押懸け討果さんにさのみ人數も損ずべからずとて已に魚津城に於て備手配ありしに椎名の一族之を聞きて降を乞ふ輝虎和宥し水橋の砦奥郡小井手城等に番兵を置き越後に歸馬せり

○越中の諸將小井手魚津城を攻むる事

永錄五年神保安藝守氏春婦負礪波射水の諸將を招き集め唐人丹波守（兵庫助男後ち越後に屬す）江波平五郎倉光權太夫小島六郎を魁とし大勢を率して小井手城へ働らかせ氏春は同姓越中守正武瀧三郎石衛門石黑左近寺崎民部左衛門を將として魚津城へ押寄せ短兵急に乘取らんと攻擊せり柿崎和泉守景家舍弟源左衛門泰家（一に景則）吉江織部正定俊同姓中務亟定伸小笠原右馬之助長隆同伯父民部少輔信定等士卒を勵まし苦戰すといへども寄手圍みを甘がせしに付輝虎へ後巻を乞へり輝虎東上野より歸陣あり て暫く休憩し越中へ發向せり小井手城に於ても河田豐前守長親岩井備中守政房長澤有坂以下日々に戰ひ精力疲れ城兵已に困窮して持怠へし處へ輝虎の出陣あり寄手圍みを解き水橋の寨へ引入ければ魚津の寄手も同じく退て富山の城に入れり

○放生津落城江波父子討死の事

永錄五年七月下旬輝虎越中へ出張して富山城を圍む神保兄弟先年輝虎の幕下に屬し人質を出しながら且暮越後を傾くる謀を廻らせしも攻潰すべしと下知せり然れども兵粮矢玉多くして防禦の術を盡しければ急に落つるとも見なず依て輝虎圍みを解き神通川を渡りて射水郡放生津へ押寄せ江波參河守同姓平五郎が居城を攻む敵味方喚き叫んで戰ひしが遂に城を陷し參河守を始め從類十六人其外雜兵數多討取りて梟首し城に火を懸け勝凱を擧げて引拂へり渠も亦た道七齊の仇なれば輝虎始め悅ぶこと大かたならず又た此時の戰に土肥大膳亮賀吉先陣に列なり比ひなき働きして首を實檢に備ひたれは謙信感賞の餘り當座の引出物として具足されし喉輪を迦して給ひけれは時の

面目ゆゝしくぞみなける實吉祖父又太郎は相州に北條早雲に殺され其後長尾へ仕へ又た武田に仕ふ

○魚津海上蜃樓の事

永錄七年五月下旬魚津の海上に蛤の州を造るを見ると云ひ男女老若集りて市をなす是は蛤の氣を吐くにこそあれ中華にも所謂蜃樓是なり又た支那登城の海上に春夏の間此氣あり城郭市廛依稀として人馬の往來絡繹たり土人呼んで海市といふ又た西域にも相類する事あり旭日出る時紅暉天に映じて樓門宮闕官人などの出入するを見る日輪高く昇れは則ち消滅す之を乾達婆城といふ愈じて乾坤の間陰陽造化のなす所ろ測り知るべからず魚津海上の蜃樓亦た奇異ならずや當時輝虎本庄繁長柿崎景家を始め諸士馬を駐めて賞し合へり又た輝虎歌道は西園寺公朝卿西三條大納言實光卿に學はれしが關東旅行軍中の詠草多し魚津城にてよめるうた左のごとし

ものゝふの鎧の袖をかたしきて枕に近き初雁の聲

又た能州を攻むるの時射水郡に宿陣の詩あり

露下三軍營二秋氣清一、數行過雁月三更、越山並同能州景、遮莫家鄉憶二遠征一、

洵に一世の雄なり横槊賦詩は彼の曹操のみならず輝虎も亦たしかり

○謙信瀧山城を攻むる事

婦負郡富崎瀧山城には神保越中守長職楯籠りしが永錄年中謙信と戰ひ終に落城し逆華寺村深沼とゝふ所にて自害せり爰に大なる盤石あり神保腰懸石といふ傍らに長職の石碑あり後ち此城に寺島牛之助小島甚助住せり天正年中佐々成政攻めけれは寺島小島野積谷へ退き竟に和睦して成政の旗下となる

案するに長職討死の後寺島小島兄弟越後へ屬すと見えたり然らざれば佐々は神保が介添に越中へ來りながら神保の臣を討つ筈なし

○武田信玄飛州より越中に討入り椎名降を乞ひ質を出す事

信玄再び越中を攻め魚津小井手城堅固にして軍を還す事

永錄七甲子六月上旬甲州武田信玄山縣三郎兵衛昌景を先陣として飛驒國へ打入り荒城郡の内にて服從せる輩を仕置し又た江間常陸介輝盛に謀り越中をも打取らんと飛越の境に軍し馬場美濃守信房眞田一德齋を始め木曾衆を以て椎名肥前守抱への城壘二ヶ所を屠り又た松倉の城を拔んとす椎名は厚輝虎に懇望され辛苦せるに又た武田飛州よりの寄手に周章狼狽し爭でか持堪ふべきとて速に和睦を乞ひ信玄の幕下となり二男熊松丸を質とし又た輝虎襲ひ來る時援兵の事を約し軍を引き信州へ歸らる同十年丁卯五月中旬信玄飛州へ打入り其れより越中椎名肥前守に議して越中を切從へんとす然るも魚津小井手兩城は越後へ屬し堅固に守りけれは深入して働きがたく兵を引て六月十四日川中島へ出て信越境目を仕置し八月甲府へ歸馬せり

○遍照院金乘坊の事

古へ檢原に法相宗の一寺あり法相院僧都亮範といへり然るに此寺兵火に罹つて亡びたり久ふして後身延山日親上人の弟子來て再興し上行寺日照上人順智と稱す是れ越中に日蓮宗寺院の始なり其後日幸上人住職たる頃ろ畠山義則椶那たり深く日蓮宗を信じて他宗皆な改宗せよと責め若し拒んで從はざれは寺院を破却し多く人を害す此時岩瀬の海禪寺も寶物を抱て武州へ逃げ厳に住すといへり今の岩瀬の海禪寺は再興の寺なるが曾て海禪寺桃井の鎧を藏し今なほ厳の海禪寺に傳ふといへり時に又た金乘坊にも日蓮宗に轉入せよと責めけれども從はず山口雅樂介黑瀨左近などを語らひ眼目の龍泉寺も畠山を惡んで金乘坊に與みし椶那寺崎平左衛門行重は畠山が家人なれども龍泉寺を拔けたり宮川庄爲成卿の鄕民等は山口黑瀨に從ひ大久保逼照寺三郎左衛門を始め澤日といふ所に堀切をなし邑郭を搆へ事大に長じければ畠山之を惡み金乘坊を殺さんとし稻野村の住荒川權之右衛門同平内は上行寺椶那にて弓の上手なれば上行寺に托し金乘坊を射よと下知ありければ兩人直に承引し金乘坊を覗ひける元龜元年十一月八日金乘坊黑瀨左近が方へ行きしが馬瀨口市助といふ者金乘坊が黑瀨へ行きたるを知り荒川に告げ荒川兄弟弓矢れつ取り出でしが平内云ふやう金乘坊は大勇の法師なり一人にては危うけれども歸る途二すぢなれば貴殿は街道の方に待給へ我は新俣の土居に至らんと兩方へ分れける金乘坊は黑瀨を出で街道に加はり布市指て歸りけるが從者は雪途にて二三丁も後れたり金乘坊馬を進めて赤田川を渡り横道に入らんとせしに左なる宮の中に人の足跡あるを見て怪しく思ひ馬を扣へあたりを見廻す折柄權之右衛門宮の林の中に藏れて待ち受け金乘坊を見て早く射けるが六十に餘り殊に雪の中に久しく立ちたれば手凍ゑて矢つぼを外づし金乘坊が肩先衣の玉襷を射切たれば金乘坊すかさず馬を馳寄せて二の矢を射んとする權之右衛門を拔討せしまゝ二ッになつてゞ倒れける金乘坊は猶も待伏にせる者やあらんと道をかへて新俣川をまはり赤田の道場へ行かんと取て返し新俣の細道に馬を馳せたり直ぐに行けば悉がなるべきに新俣へ廻りしこそ渾情なれ平内は兄の殺されたるも知らで土居道に待つ折しも金乘坊中道を一文字に馳來たる偖ては權之右衛門はづし怖れて道をかへ赤田の道場へ行ならん逃すまじと惱森に立かくれ矢の根に鼻のあぶらを引て待懸けたり金乘坊はかゝる事とも知らず道場へと馬を早め通りしに平内覘ふて之を射とめ矢つぼを違へず金乘坊が右の脇より左に矢の根のみゆるほど射通しければ金乘坊馬より撞と落ちてゞ伏にけりしすましたりと走り寄り金乘坊が帶びたる太刀は三尺三寸の業物なりと知りたるゆゑ之をも取らんとしけるを金乘坊伏ながら刀にて平内が兩脚かけて薙斬たれば平内仰向に雪中に倒れ二人ともこゝに死せり從者は金乘坊が射殺されたるを聞き息をもつかず走り來しが遲かりしを殘心に思ひ急ぎ赤田道場へ告げ金乘坊が死骸を道場へかき入れけり門徒廻首とせる金乘坊なれば皆な惜み悲しみ男女ともに出でゝ手を持ち足を持ちながら道場へかき金乘坊上の蠻安養寺村に住しければ送て葬りしとゞ今に童の遊戯にも壹人の童を仰向にして手足を持ち足かき手かき金乘坊の死去ぞといへり

寺崎平左衛門行重龍泉寺金乘坊なぞゝ一揆をすゝめたるは深き望みあり悉く國人を亡ぼさんと

のたくみなり畠山に攻められ暫く越後へ遁れ居りしが又た歸來り後ち病にかゝつて死す其子民部左衛門其子喜六郎父子一揆の魁なり民部左衛門姉の子に石崎平馬といふ者あり彼は新川郡木郷村に居れり彼等三人代り〳〵一揆をすゝめしもの應仁年中より天正の頃まで一揆の絶間なし

○篠塚道生畠山に亡さるゝ事

布市の住長者禪房篠塚道有といふは其初め安養寺大學大僧正順慶の宰左馬頭が後なり家資巨萬富豪の稱あり道有に嗣ぐを道清といひ其二男なり長子は河内國野守に住し和田平内正綱は姉聟にて其養子となり和田平内當清といへり道清より相繼で道弘道惠道積道生に至る禪房とは菌宮より給はる號なり道惠は桃井直藤を聟とし黒瀬五郎時住と好みを結び又た世の交りも多し就中平左衛門道積は奢侈にして家屋の結搆壯麗を盡し嫌妾に美なる衣服を飾らせ屢々地頭郷士などを招きて山海の珍味を纒應し夜に至り客の歸路を照らすには松檜の膏あるを樓上に燃し金壁に照映して光三里にも及へりとかや然るに道生に至て畠山義則軍用として粮米金錢を出せと催促す神保寺崎等も同じく催促しければ償ふに堪へず遂に之を辭せり畠山大に怒つて溫井宰兵衛混田五太夫椎名四郎を將とし國人神名主計などに命じ道生が館を攻む道生が一族は何れも力を尽して防ぎ戰ひける時に黒郷日宮住堀田彌八之時嫡子次郎左衛門之尹に云ひけるは我寺崎と望みありて飛州より來て爰に住す然るに寺崎驕奢無道にして畠山に與みし篠塚を亡さんとし我强て之を止むれども用ひず我篠塚に親しく殊に彼が扶助を得ければ此度篠塚を援け寺崎に敵せんと思へり我年老ぬれは望みも空しく竟には篠塚が爲めに命を墜すべし汝は急ぎ他國へ行き明君を撰びて仕へ武門に秀んことを求むべしと之尹再三辭しけれども許す色なし遂に南國へ赴けり之時猶幼稚の二子あり臣新達平馬に屬し養育を賴みけり斯くて之時從者を率ゐ急ぎ布市に至りしが畠山の人數早已に篠塚を攻む篠塚防ぎ兼ぬる所へ堀田の勢加はりし爲め少しく力を得て防ぎけるが寺崎の人數又た來て畠山の人數追々加はり之時篠塚と共に縱横にわたり合ひ敵四五人斬捨て上野下野へ追退きしが寺崎が三男四郎宴吉が駒塚に扣へたるを見て之時突て懸り終に宴吉を突伏せ首を打落す之時道生が館に馳歸りけるが敵又た大勢來て塀搆へをも打破り無勢なれば防ぐ術もなく思ふまゝに戰ひ終に討死ぞしたり道生も今は是まで館に火をかけ父子一族都て自害し畠山寺崎の人數竟にせめ破り悉く財寶を奪ひ取れり篠塚は國中の豪家にて普く知らざる者もなかりしに畠山が濫妨にて一朝に亡されたるこそ悲しけれ

○道生女遁死幷に毘沙門天の事

篠塚幼女ありけるがさしもけはしき中に乳母扶け抱へて毘沙門堂に逃げかくれ幸に死を免れたり元來此毘沙門天は安養寺の宮を信仰し境内に安置し滿壽堂と名け額に書して懸け給ふ安養寺の滅後毘沙門天を篠塚が方に移せしが滿壽堂は居所より隔りたれは火災も遁がれ世も靜になりて乳母彷らに小菴を結び髮をねろし尼となり女も漸々ひとゝなり家の亡びしを歎き父母の事も思ひ出で

涙いかわくまもなく便りなき身の爲方なし又た髮をそろし乳母の尼と共に佛の供養し父母の菩提を弔ひ日を送りけるが幾程なく二人も爰に空しくなりぬ里人かなしみ塚を築きて葬れり之を比丘尼塚といふ又た女世に在りし時考妣の爲めに經を書寫し瘞めて塚を築けり是れ經塚供養塚なり又た篠塚が族に伊織といふ者あり尼の菴室を繼ぎ溪性院と號す後ち毘沙門堂の號を以て滿壽寺と稱す然るに檀那もあらざれば毘沙門講を取立て毘沙門天の御影を摺て年毎に講中へ配れり此毘沙門天甚だ靈異あり或時講中の者兩人上京し椿江といふ所に至りけるが冬の事なれは積る雪山より崩れ落ちて谷を埋みしに往來の者あまた壓れて死たり彼二人も雪に壓れ椿の繁き下に陷ちしが洞の如く雪もなければ爰に久しく屈み居れり然るに糧もなく餓ゑけるが椿の葉毎に餅の樣なる物あり しを鼠の出て喰けるまゝ試みに壹つ取て喰しに味甘し是にて飢ゑを救ひしが忽然として雪に穴明き日の光上に見へけるまゝ是れはと喜び椿を攀ぢて出てたり兩人同じ事にて兩所に出で互に悲がなきを喜び合へり然るに首に懸けし毘沙門天の守り袋のなければはゝとしけるやと愁ひけるに又た二人出し雪の穴より鼠の二つ三つ出ると見ゑしが各守り袋となれり兩人驚き我等を扶け給へば疑ひもなき毘沙門天なりと悅び夫より京都に行き暫らくして歸國せり椿江村にも此事に感じ越中へ來り毘沙門天の御影を受て岩端と云か村に小菴を建て溪性院と號せり是より毘沙門天の御影を出せり又た兩人雪に埋れたる所を今に毘沙門坂といへしとぞ斯りけれは世人毘沙門を信仰し多く講に加はり御影を出すに際なかりしとなり此滿壽寺後ち一向宗に轉じ富山へ移る此頃より毘沙門天の御影は滿壽寺より出さず布市村より年毎に講中といへる者の方へ配れり其故は桃井直綱の氏族十七家あり直久の後ち幸若となり越前に在りしかは布市村の者ども直綱の一族を賤しみ忌嫌ふて娘を嫁し取戻して養子とし歸へして交りを絶てり田畠も皆な取あげしかは十七家豫業もなく困窮して飢ゑに及べり時に各謀て云けるは滿壽寺毘沙門大は元來篠塚より傳へ今を滿壽寺改宗しければ用ゆることなかるべし桃井直藤は篠塚道惠の聟たり我等は直藤が氏族なれば滿壽寺に賴み毘沙門天を我等が方へ安置し御影を出さは各食料ともならんと即ち滿壽寺に行きて賴みけるに許さゞりしを村老などの挨拶にて遂に毘沙門天を讓れり是により十七家の者前の講中へも廻りて御影を配りけるに世人の信仰も薄く各扶けともならざれは又た越前へ行き幸若が舞謠を學び來て城市邑里の佳辰祀日などに來りて名取川、二人舞、芋洗ひ、京娘などの狂言して世をわたれり後又田を買ひ農作し舊によつて前の講中を旦那なりとて毘沙門天を配れり是を布市太夫と云ふ

堀田之時が臣新逵に屬せし彌子二人兄を右内弟を左門といふ成長して右内之重小松に到り丹羽五郎左衞門尉に仕ふ利長公大正持より歸陣し給ふ時長連龍殿たり丹羽の臣江口三郎右衞門之を支へしが堀田右内之重長連龍に鎗を付け連龍手負けれは伴八矢長を援け代て之重と鎗を合せ追返せり三人各十八歳にて英雄なれば之を今井嚴の三本鎗と稱す他書に連龍手負しことは書きたれども手を負せたる人は書せず是れ之重なり今井遂の童三人の姓名を呼び三戰の眞似するは傳て今に至る何の避くる事ありて之重を書かざるにや此の働き利長公知し召されて後ち兄弟加

州へ奉仕せり又た他國せし之尹後ち三河にて大身となれり又た滿壽寺は始め篠塚が胤なり眞言宗なれば其血脉絶へ其頃八川村に蓮成寺といふあり法相宗にて後ち一向宗に轉ず椎名小四郎滅後四歳の男子時丸あり母再び蓮照寺へ嫁し時丸も爰に養育せり蓮照寺いかなる故にや滿壽寺を再建し蓮照寺の號を去りて滿壽寺となし時丸に寺を讓れり是より椎名の血脉となり後ち富山へ移り又滿成寺と改む又た布市に禪塚といふあり是は畠山篠塚を亡ぼし多く尸を野に暴せしに世人義則を喇りければ義則人口を防ぎ難く人夫を以て大なる穴を掘り尸を埋み塚を築き禪戻と稱せしより禪塚と號へしとぞ又た五郎塚といふあり是は道有姉聟河内國和田平内が養子にて道有が子五郎を遣はし置きけるが死して後ち越中にても布市薄が原といふ所に塚を築き吊ひけるとなり

○神保の豎高木左傳治の事

神保椎名は此頃織田信長に内通し輝虎を傾んと工夫をめぐらせり然るに能州より三好家の浪人高木五兵衛といふ者の子左傳治とて十四歳の美童を迎れ越中へ來る神保此父子を抱へて不便を加へ二年過る頃神保左傳治に云ひけるは汝越後に赴き何とぞして謙信にたより隙を窺ひ殺害し得させば信長に申して汝が父五兵衛を一國の主となすべしと即ち證書を渡し賴みければ敬で諾し君父の爲めとせば一命何んぞ惜み申さんと云ひ夫より越後へ赴きしが然るべき手引なし此ゆゑに柿崎の近所長峯の禪寺に寓居せり翌年六月五日謙信船遊びに柿崎邊に出られしをよき次手と思ひ路の傍に跪き訴狀を捧げ奉公望みのよしを述たり謙信此豎の美麗なるを見て抱へられ諸士に此者見知たるやと尋られしに越中よりの降人石黒弸三郎といふ者申けるは是は近年神保に抱へられたる高木五兵衛の子なるが何ゆゑ浪人せしや知らずと申ければ謙信偖こそとて左傳治を拷問せしも始め申せし辭の外加はらず終に責殺されたり其懷中を搜がせしに神保が與へし證書あり果して神保が姦計とぞ知られたり

○二宮津毛城を攻むる事並に謙信庄官百姓を欺き殺す事

斯波義將の臣二宮右衛門太夫上熊野城に住せしが天文の頃より飛州の三木休菴に屬す元龜二年三月二日越後方村田修理亮村田彌三郎安達清藏等廿七騎津毛城に籠りしが同年八月朔日二宮右衛門太夫足輕廿餘に鉄炮を持せ上熊野より押出して青柳村柳原に伏せ置き本陣は津毛城の北月岡野より寄せ來る折しも村田修理亮村田彌三郎安達清藏城より打ち出で村塚山に陣取けるに伏せ兵起つて安達を打ち取り越後方敗走せり二宮勢勝に乘じて津毛城まで追懸け城の二の門際七曲坂まで攻入りしが二宮が侍大將小林傳八熊野川の中洲に馬を立てゝ城を窺ふ城中射早重兵衛といふ射手は門の傍林の中より覗ふて傳八を射殺す時に又た城より打て出で戰ふ二宮勢遂に敗北し村塚山まで追討せり

天正六年長尾謙信越中へ發向し津毛城に在て新川郡の庄官百姓に目見得を請はんとて召び集め壹人づゝ奥の間へ引入れ力士をして押伏せ首を搥しむ下懸尾村飯川彌右衛門此事を聞て月岡野より

取て返し布瀬村中川左兵衛に告げ知らせ同道して野積谷に隱れ避く是より今に至るまで毎年布瀬村左兵衛方へ下懸尾村飯川彌右衛門を招き饗應せりといふ

庄官百姓といふは黑瀨左近より稱す越中四郡の農民を司り京都へ奏牒を奉りければ告文百姓と云へり又庄官百姓或は將官とも號すといへり

○謙信柿崎景家を討じ景家一黨自殺の事

柿崎は上杉家重代の臣なり殊に和泉守景家は武勇勝れし者なれは謙信近頃魚津の城に据へ置き神保椎名が防禦とす然るに運の窮めにやありけん和泉守日來愛せし駿馬夏の頃より惡き癖つきて動もすれは和泉守怪我すべく見へけれは牧子に賣れり牧子こゝかしこに牽き廻はし果ては江洲安土に至り織田家の出願人菅谷九右衛門長賴に黃金十餘枚に賣れり菅谷買得て馬舍に繫ぎ置しに信長之を見て奇異の逸物なり何方より得しやと委〳〵尋ね柿崎が方へ珍しき良馬を贈られ幸甚々々猶又重て秘計賴入なとの書面に時服二領を差添へ贈り越せり景家此よしを速に謙信へ訴へたらば不審もなかるべきに延引しける間に姦人謙信の聞に達しければ謙信大に怒り柿崎弐心あるにれゐては是まで骨折たる越中の功空しかるべし小事の大事是なりとて路次の險難殊に雪中をも厭はず急ぎ春日山を打立ち十一月下旬魚津へ着馬せり景家は此事を聞て郎等を引纏め水橋の砦へ退き謙信の旗本を魚津の城へ入らしめたり斯て當國の先方纏田肥後守同監物齋藤帶刀平子和泉守に令して急ぎ水橋へ押懸け柿崎に迫り切腹せよと下知し輝虎も出馬せり景家郎等に申けるは我譜代の主君に對し何爲ぞ弐心を擂ふべき信長表裏の將たるを以て内を聞する調議をなし我君を欺ける故なり然れども此期に臨み辭すとも及はず剩へ當國の先方討手に向ふなればまたなびれて一世の譽をなみせんこと本意にあらず迚も景家が武門の冥加今日に盡きたる上は終身の暇乞に閻魔の廳の訴へに最期の勇を震ふて骸を爰に曝すべしと面色變り齒を切て西上野八幡の住人蓬萊太郎成貞が鍛ひし鯰の尾の兜に三本柿の前立し黑糸縅の鎧を着し大長刀を掻込みて采幣を腰に挾み颯と城戸を啓き徐々と打出ければ息小次郎同姓源右衛門及び數度の譽を顯はしたる宗徒の郎等前後左右に立ち並んで鏃を傾け鋒先を揃へ眞黑に成て突て懸り命限りに戰ひ景家が先へ進む者生て退くは稀なりけり去れば越中衆鎗を合せかね暫く攻口を甘げゝれば城兵も今朝の辰刻より未の頃まで寒日の戰ひに四支すくみ筋力疲れ城戸より内に入て息をつけり謙信いらつて最前より一時攻に踏み落せよとこそいひしに手延なる先手の働きかな旗本の人數をかけせめ落せよとて弓鐵炮の者共を搦手へ廻はし龍頭の纐を城門近く押立て勝鬨を揚げしに景家家人に向ひ今は是までなり旗本の面々は皆な舊友なれば無用の殘害をなすに忍びすいざ各ふせぎ矢射よ心靜に切腹して冥途の鬼となるべしとて父子弐人敗革の上に座し潔く白刃に伏したり山田山口藤田以下所屬の士卒壹人として落去る者なく或は打死し或は自害し皆は忽ち落にけり景家が舍弟源左衛門泰家は組打して生捕られけるが謙信宥恕ありて助命し旗下に加へられ參河守と改め景勝の代までも仕へしと云ふ

○謙信富山關野等處々を攻むる事

元龜二年謙信松倉金山の畧地を巡見し越後佐渡譜代の士を兩城に籠置き夫より富山城を攻めんとて九月下旬這槻川へ打出らる北陸寒早しといへども嚴寒に至らずしかも今年は例よりも温暖にして人馬艱みなく上市川小井手川平川常願寺川荒川を打渡り富山城へ押迫らる此時神保氏春は守山に在り子息清十郎同姓越中守正武當城を守り居しが此度謙信の多勢に無勢を以て當らんこと覺束なしとや思ひけん退き去て守山に舍れり富山には瀧三郎右衛門朝倉左近太夫を殘し置きし に越後勢取懸り即時に攻め落し兩將を始め悉く討取けり依て小笠原右馬助長隆同姓民部少輔信定を留めて當城を守らしめ謙信其より神通川を渉て射水郡へ乱入せり神保はかねて期したる事なれば諸將を催促し關野へ出張し久瀬但馬守益木中務亟遊佐信濃守小島倉光鞍知寺崎唐人等同く馳集り都合七千餘騎龍鱗虎韜の陣を張て越後勢を迎へ討んと競ひける寄手は八千にて越後の衆を加へ八備となし一の先河田豊前守に飛越の衆を相備へとして二千騎、二の身は齋藤三郎兵衛色部長門守石川助三郎吉江織部正千五百、三の隊は村上源五藏人に更科衆八百、左は山吉玄蕃允杉原左近將監、右は安田上總介竹俣三河守三百餘、旗本は八百にて長尾一黨上條兄弟加治岩井山本寺番外の輩之に屬す、後備は新發田因幡守、蜷重は直江大和守千餘を二隊に分け須田右衛門尉蓼沼掃部助を馱備へとし大和守は遊軍を司て一隊の別隊を九備に作り龍頭八尾の勢ひをなし謙信大物見に出て敵の配立地を利を見夜軍にせんとて密かに其令を下し先陣の大將は河田豊前守二千を三備とし言語を禁じて押寄せ法のごとく伐入り二は一丁餘を退て鬨を揚げ金鼓を擊て勇鋭を示し直に進んで戰ふべし三の隊は陰中の陽の格をもふけ靜まりかへつて不意の變に備ふべし然れども勝敗は計り難し河田が軍利あらずんば齋藤色部相繼げ若し是れにも敵屈せずんば村上國清入替るべし如此せば仮令天魔破旬なりとも恐くば刃を踏み怒ふべしとも覺へず然して謙信の旗本は泰山の動かざるが如く巍然として居を固め後陣遊軍南北に眼を配はり東西に馳べしと軍議を決し間者を入て敵の摸樣を伺はしめ其夜子の刻ばかりに河田が一隊鳴りをしづめて寂々と推寄せ遊佐寺崎が陣營を討て懸る營中上を下へと騷動す又た爰を馳せぬけて神保が陣へ押入氏張富山を出しより今度は必死と定めし事なれば少も騷がず長刀揺そばめ采幣を揮ひ士卒に下知して防ぎ戰へり時に河田が二の隊皷噪して縱横より駈入りさん〳〵に攻め打ち齋藤三郎兵衛村上源五藏人松明夥しく燈し喚き叫んで營を取卷けり此に於て神保が軍大に崩れ營を棄て〻退去り河田透さず手勢を驅廻はし松明を投込み〳〵陣所を燒立ければ猛火熾んにして殘兵なず〳〵度を失ひ遊佐鞍智を始め死傷する者二千餘人或は同士打するも多かりける越後方大に利を得て北るを逐はんとせしが謙信堅く之を制し齋藤村上を一の先へ押出し河田が陣を二陣に轉じ村上が跡へ新發田が人數を進めて陣々に大篝を燒かせ猶敵に對するが如く最も嚴重にして其夜を明かせり已に夜も明ければ謙信下知して齋藤帶刀七寸五分肥後守を案内者として直江大和守兵を發し貴布禰城を圍み石黑左近光治尋常の者ならず城を堅固にして防ぎけるが戰ふ毎に手の者多く討れしかば力竭きて和を乞へり直江人質を取り夫より今石動森本に放火して軍を收め今は守山放生津のみ持ち悠へたり越後の諸將謙

信を諫めけるは此上放生津守山を攻め落さんこと難かるべからず去ども氏春氏張父一堂豐前入道に劣らぬ勇謀の將ゆへ戰に手間とらん事本意なるまじ殊に窮冬餘日なければ只だ守山に押の勢を殘し置き加能へ早々御發向然るべしと一同に申ければ謙信同心ありて守山の押へとなり長尾右兵衛尉末盛同權三郎景嗣五百川總殿助木庄清七郎景通千坂駿河守憲清を圍野に留め謙信は加州へ旗を向へらる此時越後の領内四萬貫の地を河田豐前守に附與し先方の國侍を與力として松倉に在城せしめ國政武備を嚴密にすべきよし下知せられ河田過分の恩賞身に餘りて喜悅せり又た吉江織部正定俊を以て魚津の城代とす

河田は元來江州野洲郡の鄕士守山九郎左衛門善忠といふ者の子なり永錄四年の春謙信上洛の節清水の觀音へ參詣せり時に長親岩松丸とて十四歳なりしを父九郎左衛門携へしが產寧坂の邊にて謙信見留られ父子の在所姓名を委しく尋ね父子ともに越後へ召連れ岩松丸を近習に擧げらる父九郎左衛門は剃髮して善忠と稱す謙信の監訂に違はず長親才智勝れ武勇等倫に超へ次第に昇進して侍大將となり大身となれり

○一揆謙信を討ちて敗走せし事

謙信は老臣の言に從ひ元龜二年九月下旬礪波郡小矢部川を渡りて石動より埴生を過ぎ猿の馬場へ至れり門徒一揆の將洲崎兵庫助龜田隼人佐鈴木右京亮若林雅樂助等相集て評議し松任小松御幸塚の人數未だ來らざれども待受て之を討たば寡きを以て衆を拉く術ならん猶豫すべからずと云ひ在合ふ黨類三千餘人彼の麓に馳出で旗差物を閃めかして待懸けたり謙信山上より之を窺ひ物馴れて健かなる者共を諸陣より撰み出し下知によつて三十人四十人又た五十人を組み合せ渾て三百餘の人密かに麓へ下り敵陣の八方より不意に起りて喊聲を揚げ縱横を薙立ければ一揆等周章して是は內より叛く族あり斯くなる者と思ひ防ぐ術を失へり時に河田豐前守山上より螺を吹き大鼓を打ち追立て〳〵興を作り飛泉の奔激するが如く一同に落し懸て攻め討ちしに一揆は何でう防がるべき右往左往に散り乱れ旗幕兵粮兵器の類はいふに及はず手負をも見棄て個々逃失せにけり

○一揆謙信の先陣を討敗る事

謙信加州河北郡森下に於て河田が得たる首どもを實檢し街道に梟せり夫より貴布禰の石黑左近光治鳥越の久瀨但馬守後ち城前黃門秀康公へ仕へ拗氣と受て戰死すを鄕導とし津端の驛に着陣し一揆の城々へ手遣をなさしめ又た柏崎妙樂寺を使として加州へ申送らるゝことありしが能州服せざる爲め加州の討伐を閣けり元龜二年十月二日津端を打立ち能州を討ち重て又た加州津端へ陣を移し河田豐前守に飛能二州の先方を加へ當國の一揆の城壘二三ヶ所を攻落し越後へ凱旋すべきよし內々諸士へ觸示さる時に越中勢洲崎兵庫助木越の光勝寺一に光德寺鷹巢の平野甚右衛門白石左近尉龜田隼人佐鈴木右京亮同采女正同出羽守河合藤左衛門林新六郎同七介舟田又吉坪坂新五郎德田小次郎松永丹波守等一萬餘大田鄕の邊に出張して越後勢を討留んとす河田豐前守之を追拂はんと云ひ五千餘を卒ゐて馳向へり此日天暗く寒風肌を裂が如く雪しきりに降て諸勢の困苦甚し先勢漸く大田鄕に至り寺院村家に入り

て凌ぎ居る折柄洲崎平野白石はよく案内を知り兵を潛めて押懸け散々に攻立たり越後勢は寒氣に艱むうへ兵粮も乏しく手足竦縮働き得ず其上地利は不案内にて方角を失ひ徒に討るゝ者凡そ千餘人に及べり河田は大田郷より廿丁も後れて陣せしが之を聞くや否馳來りしも一揆等は最早引取ければ臍を嚙むも及はず日暮雪猶ほ霏々として大に降り積り人馬の往來も絶ゑ河田こゝかしこに一揆等を探れども行方しれず餘儀なく此よしを津端へ申遣しぬ謙信大に怒れども全く河田が罪にもあらず是非なき次第なり窮冬深雪なれば先づ此度は歸陣すべしとて惣軍を津端へ纒め十一月廿八日越後へ歸れり

○益木中務の丞謙信降す事

神保安藝守が宗徒の一味益木中務の丞は初め關野の城に在りしが近年放生津の城に據り大剛の勇士なり越中の諸將近頃富山關野の戰ひに打負け大小となく謙信の幕下に從ひ靡くといへども渠れ獨り降らず謙信益木が忠貞を感じ幕下に招かんと七寸五分肥後守に云ひ含め百方諭されしかど一向に從はず越後勢の攻來るを待ち城を枕として打死の覺悟を定め同郡片山に住める所縁の許へ老母と娘を托せり謙信之を聞き間者をして搜し求め彼の娘をすかし取て魚津の城へ入置き歸陣の節に柏崎妙樂寺を放生津へ遣はし種々に慰めすかし若し從はずは娘を殺すべしといひしにさすが恩愛の悲しみに堪へず竟に降れり謙信殊の外滿足して懇意を加へ後ち娘は越後譜代の臣吉江織部正が嫡子喜四郎に嫁せしとぞ

益木は謙信の死後河田豊前守と心を合せ無二の忠誠を盡しけるが佐々成政に老母を奪ひとられ止むを得ず又た成政に降り後に宮崎の城を預れり又た吉江喜四郎は天正十年午六月魚津落城の時自殺す其の子長滿丸幾かに四歳なり景勝才許ありて後室を藤田能登守信吉へ遣はし信吉に配し長滿丸を養育すべしとて吉江が舊領長島の城をも信吉に加增せり然るに長滿丸成長して又た喜四郎と名乘しが十九歳にて病死す

○上野彦次郎火牛を以て謙信を攻撃する事

謙信飛州へ攻め入らんとて先越中に到り高原野に陣し廣嶺城を攻む（廣嶺城不詳）寺崎防ぎ難けれは上野彦次郎勝重に援けを乞ひしに彦次郎諾して來る元來智勇勝れたる者にて其日雨のいたく降りければ謙信川を越て陣せんと豫め計り知り新川郡は已が裁許せるゆゑ郷士郷民に急を告げ郷民に若干の牛を集めさせ彦次郎高原野の上へ潛かに廻はし半分は自ら從へて二俣新川の堤に傍ひ上野に至る案のごとく謙信は潦水の出ぬ先にと大森川の上を渡し上野の方へ川に傍ふて上る後陣は高原野の上を渡さんとす日暮淺瀬も見へで渡りかねしに彦次郎時分はよしと數十の牛の尾に茅を縛束ねて火をつけ郷士と共に先づ謙信の本陣へ追入り無二無三に攻めけれはなしかはたまるべき謙信の備へ崩れて立足もなくさすがの謙信大に驚き馬を直し大森の川上を渡し後陣と一にならんとしけるに川水深く且川を隔て高原野には炬火ならぬ所もなく鯨波夥しく後陣已に敵に支へられ戰ふと見ねしかは謙信剛章狼狽し川に傍ふて走り山陵へ攀上る彦次郎野に打上り又た牛を集めて驅立て

せめ擊ちけり四月廿三日の夜殊に雨いたく降りければいとゞ暗ふして物のいろも見へす謙信の將卒途を失ひ大に乱れて死傷多ほし後陣はさゝへられて川を渡さず爲方なく野を上りに逃げて漸く上野にいたり散卒の集るを待てり彦次郎猶も追ならは爰に謙信を討果すべきに川向なる炬火次第に東せしかは謙信の後陣に向ひし者戚負けて退くと思ひ之を救はんと取て返し下の瀬を渡つて高原野へ上り見るに後陣にむかひたる柿澤六兵衛野口忠助大岩三平等何れも山川に馴れたる岸乘者なれは牛を追立て攻めけるはゞに後陣も大に敗走す勝に乘つて桑野の邊まで追懸けたり柿澤が云ふやう長追すべからず水落の邑郭又た水橋など加勢を出さば益なしと高原野に出て彦次郎を待けるに彦次郎も來て各謙信を討果さゝるを悔や彦次郎云ふやう川水深ければ謙信暗夜にわたすこと難かるべし明るを待て川を渉し魚津城へ至らん未明に寺崎の勢と一所に喰留て討べしと夫より皆な眼目へ引入けり謙信は散卒をあつめて左右にいへるは不虞の變にて士卒を損せしは我武の拙きによれり速に爰を去るべし明て川を渡さば支へ打んこと必せり急ぎ川を越へ魚津へ至るべしと川にかゝり渡らんとせしに水深く困けるが時に雨晴れ少し明かるくなりしより謙信川瀬の淺みを求め魚津城に歸れり謙信此時より越中の郷士は足まとひなりすかして殺さんと思ひ付きしとぞ

上野彦次郎住せし二俣は布市村の少し西なり今に古祠に並んで彦次郎の墓所あり又た佛生寺城主細川を援け彦次郎越後勢を防きければ細川の彦次郎への感狀並に家老金森甚七郎の書翰今に當所金泉寺屋市郎右衛門所持すと云ふ曾て上野彦次郎孫二俣村孫八郎故あつて二俣村を去り同郡金泉寺村に移り住みしが後又富山へ出て住居す故に金泉寺屋と稱す卽ち上野が後なり予就て感狀等を見る左の如し

去八月十六日越後衆保内乱入之處於二文殊寺一被二防戰一被レ被レ疵之條神妙之至候謹言

十月廿二日　　實名花押

上野彦次郎殿

○白屋謙信を導き飛州を討つ事

飛州大原郡押領使白屋築前守秋貞永錄晩年より柿崎に仕て越後に從ふ元龜三年辛未十月家人後藤内記和耳藤兵衛を使とし熊皮十枚鉛十斤を謙信に獻じ廿粕直江齋藤等に書翰を呈す其趣意は飛州も永錄年中より信玄の支配と成り三分の二は高原の江間常陸介が裁許に從ひ白屋のみ從はず今度江間常陸介輝盛同左馬允時盛を討て國中平均をなさしむべし依て越後より謙信出馬し援兵及び撿使の將を給はれと云ふにあり又た當時飛驒國は信長姉小路を語らひ内々手遣の聞へもありしなり抑も姉小路といふは昔南朝の管領にして後村上天皇より飛州の國司とし姉小路宮内卿師平をすへ置ける三世高基の男從三位家綱の時に至つ天下武家一統の代となれり國司自立して將命を請はざるもゝ應永十八年辛卯秋大樹義持公の上裁を蒙り京極左衛門尉高詮穴間郡上を歴て追手にむかひ小笠原民部大輔持長は越中を廻て北小島口へ押寄せ武衛の陣代仙福朝倉以下越前大野郡より乱入し姉小路の屋形荒城郡小島郷柳の御所を攻落す家綱は朝倉貞景が家人井上新兵衛が爲めに討たれ

子息師言昌家和睦を乞ひ直に小島に在城せり是より國司の號なく京極恩補の國となれり應仁文明の頃佐々木大膳太夫將清侍所の司として近江飛驒隱岐出雲四州を領し其身は江北の館に居住し家臣三木大和守直頼飛州大野郡松倉（今は高山）に城郭を搆へ益田郡萩原下呂に砦を築き美濃の内をも掠め取て武威を逞ふす爰に於て前の國司の威勢ます〳〵衰へ江間常陸介白屋内島土内鍋山廣瀬が如き郡縣を押領して各々威を震ふ姉小路師言逝去するや舍弟昌家繼ぐ其息男基綱從三位權中納言に昇進し相繼で濟俊の代參議たり永正十年癸酉五月廿九日濟俊四十九歳にて病死し長男秀綱幼少に付弟高綱に家督を讓る高綱又た宰相に任ず永錄二年己未の夏武田信玄信州に在馬し飛驒の國境に寨を築き長坂左衛門尉に木曾衆を着添へて守らしめ連りに手遣をなさしむ同七年甲子四月飯富三郎兵衛昌景を大將として三千五百人筑摩郡深志より嶮難の隘路を攀ぢ大峠を打踰へ行程二十里飛州平塲に着馬せり三木大和守自綱（直頼子右衛門督 直頼の男）居城松倉を襲はんと欲し半途まで出張すといへども切所なれは輙く攻入がたく夫より軍を北の方へ押させ八賀川を渡り高原城を拔かんと議し鳥越嶽に登り袈裟山千光寺を陣營にせんとす僧徒同心せず高原へ告げて援兵を乞ひ二旬餘爭戰せり甲州勢力を盡して防ぎしが竟に打勝ち坊舍一宇も殘らず燒拂ひ即ち陣を此所へ移し高原附屬の砦二ヶ所まで飯富が爲に攻落さる江間常陸介支へ兼て降參し人質を出しければ信玄大に喜び江間を飛州の旗頭と定め大野荒木益田三郡の豪强を攻め脅すこと限なきゆへ三木姉小路も困苦して甲州に隨へり去ども白川の白屋筑前守のみは始終從はず大原郡を抱へて越後に通じ江間と屢爭戰せり謙

信は白屋秋貞が勸めにより兼ねてより飛州へ打入らんと思しことなれは速に用意し元龜三年春日山を發し越中魚津城に着馬あり夫より飛州を討たんと河田長親有坂備中守長澤筑前守平子和泉を先鋒とし都合六千餘騎其餘の兵士は直江大和守實綱齋藤三郎兵衛利實長尾權三郎景嗣に屬して魚津水橋に殘し置き婦負郡加賀澤より飛州小豆澤へ入べしとのことなれは騎馬にて嶮路過ぎがたく尤も多勢は悪かりなんとて寡兵を用ひ先陣已に飛越の境に至る白屋監物（筑前守男）參陣して謙信の出馬を賀し河田以下の諸將に會し案内して多く牛を出し輜重を負せ坤の方へ旗をひけ兼皆な下立て所々の危險を涉り喊に聞しに增れる難所殊に秋霧深く籠め咫尺を分かたずさしも山險に馴れたる越後勢も困苦すること甚し去とも難なく飛州に入り遂に白川の城に至る前夕より大風雨にて三日三夜歇まず物音も聞へず東西も分ちがたく諸勢の疲勞言はんかたなく白屋一族集て奔走しさま〳〵心を盡せり爰に四五日滯留あつて士卒を休めらる時に大野郡一の宮水無の社司土内其代官を以て下知に從ふべきよし盟書を呈す渠は神職なれども武邊に勝れたる者なり謙信降人の始といひ悅こび許諾せり又た柳の御所姉小路の被官杉崎兵庫頭も來て高綱一家向後謙信の一味たらんことを望む謙信許諾す越後勢勇み競ふて謙信の出馬をすゝめけるもの頃日風雨にて路次難儀ならんと思はれしかは去らばとて白川を出馬あり白屋父子先手として大野郡へ乱入し松倉城を攻んとて河上川の邊に陣し先内島出羽守が飯雲の城を屠るべしと下知し山吉玄蕃允（一に丹波守）杉原色部長門守左近將監に和耳後を藤案内者として八百餘を差向らる内島は先より織田信長に與みし折節越前に

在陣し留守居の兵のみ籠りしが越後勢速に攻落し白屋が人數を番兵として引退き松倉にては三木大和守一戰を遂んと待懸けしが姉小路の軍代廣瀬杉原多勢を率ゐて謙信の先陣に加はり又た昨日まで無二の黨たりし一宮の社家氏子等敵となりて寄手へ屬せしまゝ松倉城中の士色を失ひけるゆゑ三木も叶ひがたくや思ひけん頓て降參のことを云ひ入たり謙信も遠路を經て打入りしかは是を面目として宥恕わり又た當國一の剛の者江間常陸介鍬を研て守り居しもへ摺酌せしなり偖て松倉の地を除き萩原より南の地を三木に與へ又た味方に遲參せる國侍の所々にある小城を片はしに攻め潰し夫より高原に軍を寄らる江間父子所々の砦に人數を籠め此に支へ彼に戰て防ぎけれども力足らず高原の流を限り北東の地を守て武田勝頼椎名に援兵を乞ふこと櫛の齒をひくが如しといへども椎名は謙信來らば我身の上にかゝるべしと肝を冷す折からなれば飛州を救はん事は思ひもよらず勝頼信玄死後なりは援兵を差越すべき旨申せしかど高坂彈正固く留めて止ぬ已に越後勢高原の城を圍んで根小屋を燒き出丸を乘取り風雨を厭はず晝夜を分たず揉みにもんで攻めしかは城兵死傷多し江間父子防ぐ術なく河田長親に依て和を求む謙信之を宥免し菜色半ばを宛行ひ偖飛州の陣明き次第椎名を亡すべき所存なれば加地但馬守秀綱墨金上野介安朝長澤筑前守石動山城守に先づ其用意すべきよし命せらる斯て白屋筑前守に賞賜あり當國の目代として成敗の事を司らしむ軍役に於ては弓長張鐵炮千挺たるべきよし判物を渡さる今度先方の諸將も勳われば賞賜ありけるとなり

一書に飛州も中古より戰止まず荒城郡高原郷には江間小四郎時盛城郭を搆へて居住す益田郡には三木大和守直澗在城大野郡には鍋山豐後守廣瀬には廣頼左近將監小田刈には姉小路宰相明山杉崎城には小島時丸白河城には内島氏理あり亂逆の由來は先づ江間より事興れり江間は平相國清盛の弟修理太夫經盛卿の庶子なり壽永に平家滅亡し經盛攝州に下る時子ある妾を棄去りしが源氏一統に歸して北條時政在京の間經盛の妾所縁を求め孤を抱て時政の妾となれり時政孤を恤て嫡男小四郎義時に屬して養育せしむ元服の後は江間又四郎輝經と名乘り時政嫡孫と呼んで愛せり然るに北條義時と不和にて敵讎をなせしゆへ頼家卿の命として飛驒國へ遠流せらる因て子孫相繼ぎ高原に住す左馬頭時盛長男輝盛に至る器量人に超へ越中へも切入り數ヶ所を伐取り中地山に城を築き河上兵藏忠勝を置けり輝盛武略ありといへども仁義を知らず父時盛を討て早く家督をなさんと其不孝暴惡一族は言ふに及はず人皆な忌み嫌へり華冑なれば小烏の太刀青山の琵琶清盛卿の赤旗敦盛の縅其外平家累代の重寶を傳へ家名賤しからざりしも亡ぶべき時至れるにや無双の惡行を企てたり三木自綱之を聞き無道を誅せんと三千餘騎を率ゐ高原城を攻め輝盛と戰ふ自綱敗れて引退く江間競ひ來て荒城の大坂を打踰へて八日町へ出戰ふ時に小島時光自綱を援け江間が勢を四方へ追散す輝盛終に打死し自綱の與力牛丸久右衛門首を打落せり是狀を見て河上縫殿助同左衛門以下多く自害せり又た飛州軍記に越中新川郡七万石は江間常陸助輝盛の領なりければ天正年中中地山に城を築き譜代の侍大將河上中務和仁經氏神代等を籠置き自已は信玄に降り甲斐に在りしに謙信勢飛州の三木左京太夫入道休花自綱廣瀬山城守宗域

等中地山へ取懸りて攻立れば河上和仁經氏神代たまらず方々へ落行き江間之を聞て信玄に暇を乞ひ速に飛州へ歸て手勢三百餘に河上和仁經氏神代が勢を合せ荒城郡へ打出で三木方には廣瀨姉小路舊臣小鷹利城主牛丸又右衛門重親加はる江間物の數ともせず攻め戰ひけるに荒城郡杉崎城主小島三八郎時光後詰し江間叶はず敗走せり輝盛一文字に大薙刀を持ち追來る敵を切崩すといへども戰ひ疲れて八日町の橋の邊に休居たり時しも當年十七の牛丸又太郎只だ一騎馳來たり切て懸る輝盛薙刀取直せしが運命是まで乞や思ひけん薙刀拋すて又太郎に向ひ汝大將の首取る法を知れるやと云ひ首を伸て討せたり牛丸は首に薙刀を分捕しけり河上和仁經氏神代等大將討れければ同枕に討死し江間家遂に滅びたり是れ天正四年四月廿二日の事なりといふ江間武田に降りしは永錄七年五月なり江間の滅後三木自綱威勢强大にして國中を掠領す自綱松倉山に在城せしが元來三木は近江佐々木の臣にて佐々木の同苗多賀太郎が末孫なり數代飛州に住す佐々木近江守より佐々木多賀二家となり多賀太郎より三木磯野二家となる多賀は三木磯野が祖なり又た姉小路宰相が家人牛丸左馬介渡部筑後守同主水正山賀新兵衛等が逆意にて主を追出し國司力なく越中へ逃來る後藤帶刀は一家といひ主從の道を重んじ國司に隨ひ路次にて討死せり是によつて三木上洛して國司號を願ひ叡聞に達し公卿詮議ありけるに其前大和守直頼寮の御馬を奉る辨慶鹿毛とて無双の駿足なれば叡慮淺からず又た直頼在京の間長橋局の所縁を結び下國の後に義頼を儲く此好によつて義頼飛州の地を補任せらる其子自綱なればとて國司號を勅許あり自

綱後ち入道して休菴と號す舍弟右衛門督顯綱を鍋山豐後守が養子とせり時に先に亡びたる江間が一黨前國司の從類休菴に背て所々に楯籠り又た休菴舍弟鍋山顯綱嫡子信綱廣瀨宗域逆心を企つ自綱早く知て大に怒り信綱を松倉城に召んで殺害し鍋山へは長瀨甚平を遣はす長瀨鍋山が城へ忍入り顯綱を討取り廣瀨山城守宗域舍弟兵庫頭宗直遁れがたく降を乞ひ城を明渡して逃出しに自綱後の禍をも顧みず宗域を高堂城へ移して討取り二男秀綱に家督を讓り鍋山の城を預け三男某頼は小島の御所時光の養子とし杉崎城を預け一先づ一國平均すといへども諸人の憤り深く親族の恨み多くして遂に美濃國の住人金森五郎八長近は越前國を討取り大野郡にありて遙に飛州の亂を聞き無道を討ち民を救ふは武士の當務なりと云ひ夫より飛州を窺ひける折しも鍋山豐後守舍弟左近太夫休菴と惡く廣瀨兵庫頭守直大野郡に到り金森に委しく告げ又た白川の住人內島氏理の家人河尻備中守氏信一家の猜みを受けて流浪せり長近此事を聞て河尻を越前に招く氏信大野郡に至る長近旦暮氏信と謀り美濃國郡上の兩遠藤を語らひ長瀧に城を搆へ飛州の押とし廣瀨鍋山河尻以下の軍兵を籠置けり此よしを聞て江間左馬允牛丸又右衛門を始とし大勢馳集り已に飛州へ打入らんとする所に天正十二年六月二日信長生害によつて暫く延引す時に國〻叛逆を企る者多し越中には佐〻成政武威を震ひ飛州に與みし上洛せず依て豐臣秀吉出馬し金森長近も在陣す難なく越中靜謐になり長近に約せし廣瀨牛丸江間鍋山飛州の案內を啓き天正十五年八月上旬に越中猪谷より飛州へ打入ければ小島時光敵しがたく城を開て逐電す休菴も大に驚き急

ぎ高堂城に楯籠り防戰すといへども忽ち攻め破られて落行き山林に逃隱れ休巷今は勢盡く出で降を乞へり秀綱鍋山城を逃て信州へ赴んとする所に大野川にて鄕人等に殺されたり長近は飛州一國を討鎭めて上洛し飛州の目代として養子長屋左近將監の嫡孫出雲守源可重其頃喜藤丸といひしを大將とし其氏族長屋の一黨遠藤西脇日根野大塚國侍には牛丸河尻江間鍋山越前の侍には笹俣石濱白河合中島松山阿波賀時枝葛西矢野馬場山内是等を宗徒の兵とし都合千餘騎在國せしめたり斯る所に先亡の餘黨一揆を催ふし山〻谷〻に旗を揚げ一宮の神主入道三宅廣瀨兵庫頭宗直を大將として日夜爭ひ戰ふ上方少も屈せず新手を入かへ戰ひければ神主三宅終に討死せり妻子從類に至るまで鍋山の麓にをゐて磔にす喜藤丸の一揆討伐せしこと都鄙に隱れなし秀吉之を聞き喜登丸を召登せられ甚だ感賞ゐり其後長近下國し大野郡高山に城郭を搆へて居住せり喜藤丸は小島城に在住せり

○謙信飛州より越中を討つ事

同年九月朔日謙信越中へ歸馬し河田山吉色部安田及飛越の先方を以て椎名肥前守同小四郎が抱へる所の松倉より西南の要害或は山に傍ひ谷に臨み或は川にそひ橋を斷ちて進退自由ならざる所々を纔か四五日の間に殘る隈なく攻め落す椎名金山松倉兩城に在て頃日肥前守泰胤は老病重り軍議すること能はず賴みとせし勝賴の援兵は來らず籠城の人皆な心細くなりしかは夜に紛れて落行き或は所緣によつて降人となり城中次第に勢少なになりけれは椎名小四郎家の子郎等に下知し矢玉あらんかぎり射打して死を一途に決せんと所々に燒草をこめ最期の一戰と覺悟す之を見て後藤山崎なぞいふ老臣等相議し櫓より矢文を射て河田豐前守に和睦を乞へり謙信之を問き椎名神保は予が多年の仇にて心を盡す所なれは中々思ひもよらずと云ひ河田幷に新川郡先方の侍强てわびけるまゝ宥恕ゐりて椎名父子を今泉の城へ移し河田豐前守を松倉へ入らる此後幾程なく泰胤は病死す是より小四郎は河田が相備へとなりて忠をはげみしといふ

○信長爲レ亡二越後一先討二伐加能越一事

天正六年戊寅謙信近國を討なびけ勢に乘じて上方へ攻め登り信長を討滅し天下に旗を揭んと議せられしが不圖煩ひ出し次第に重病となり終に瘧ゐずして卒す一說に逆臣閤にて弑すともいへり悲哉英雄四十九歲を一期として空くなれり然るに謙信死後甥の喜平次景勝と養子三郎景虎家督の爭ひゐりて合戰せり景勝は武田勝賴の妹聟勝賴は北條の姉聟氏政の弟は即ち三郎景虎なり終に景虎打負て景勝家督を領す此節信長の家人佐々伊豆守政祐越後を逃て江州安土へ歸り越後の事を具に信長へ申上ければ信長得たりとし速に越後を亡さんと潛に柴田勝家に命せらる依て加州へは佐久間玄蕃能州へは前田又左衛門利家公をさし向け國侍を討ちしたがへ北國一圓に打しづめんとせり謙信の跡は擾亂の最中なれば加州攻めの事は思ひもよらず能州七尾の城代有坂備中守同柳木の長與市景連已卯七月越後へ逃歸り溫井三宅は前田利家と戰ひ終に打負け能州は前田氏と長連達の領となり加州は一揆持となりしが柴田勝家佐久間玄蕃等と戰ひ御幸塚の城主德山五兵衛則秀土岐の餘流後ちに

位法印秀項と號すが智略に依て庚辰十一月蜂木右衛門太夫頼信討死し城は陷ちぬ下間刑部法眼頼廉が反くに
よつて尾山城落城し加州も織田家に屬す越中は神保安藝守の介添として佐々内藏助成政下着あり
しが諸將と同じく戊寅秋富山城を攻めて小笠原右馬助長隆を討取り爾後小井手守山の兩所礪波射
水悉く織田家領となる

○齊藤新五所々の城を攻むる事

齊藤新五利次は右衛門太夫龍興の弟なり織田信長の命にて天正六年尾濃二國の勢を率ゐて飛州を
踰へ越中へ來り楡原松ヶ溪より寄すると聞へければ津毛城に越後方椎名小四郎村田修理亮河田豐
前守が人數を入置きしに九月八日の夜高原郷通り岩峠を經て魚津だいが野まで落行き其夜松倉に
舍るよつて津毛城には神保越中守の人數を入れ置き齊藤は夫より今泉城を攻む爰にも越後方河田
豐前守椎名等籠りしが九月廿四日新五城下に放火す城中より出合ざれは翌未明に引取らんとする
處を城兵突て出けれは齊藤勢案内は知らず殊に朝霧深かりしかは周章ける所を河田椎名切所に引
かけ追打にせり齊藤采幣を揮ふて平場に守返せは城兵長追すなとて引戻す武家昆目集に天正六年
越前勢加州四郡の勢越中今泉を攻落して河田豐前守椎名小四郎已下を打果し首五百六拾討取ると
云へり又た相傳て椎名小四郎津毛城を落て河田が今泉城に入り齊藤が勢濫妨にふけりはか〳〵し
からざる折に信長下知として飛州國司姉小路中納言頼綱卿美濃尾張の軍勢五百騎を率ひ長途踰へ
に越中へ入り齊藤に加はり今泉城を攻屠る時に石黒左近が聖窪田大吉が方を濫妨しけるゆゑ左
近馳來り味方なりといへども美濃勢聞入れず大吉が妻子を殺せり左近手勢を以て頼綱の人數を追
拂へり此時矢來て頼綱の股に中り傷つけり頼綱之を遺恨に思ひけるや左近を信長へ讒す左近申譯
すれども長信疑ひ給ふゆゑ天正九年信長に背て上杉景勝に屬すといふ又た齊藤新五今泉より新庄
邊地嶽堂の東尻垂坂に陣を取り新庄の城には越後勢ありしが荒川にて戰ひ兩陣死傷多く齊藤は又
た大田本郷の城へ籠る齊藤少勢にて井田城齊藤次郎左衛門と一集に籠る齊藤又た梶田ともひひ齊
藤次郎左衛門に梶田左衛門亮とも稱す中古治乱記に美濃齊藤の氏族なり又た常陸の万喜も同姓な
りといへり齊藤新五は天正十年六月二日二條城に於て信忠御生害ありし時討死せり

○能田利家能州を領する事

前田又左衛門尉菅原利家は寛仁大度にして尤も智勇あり信長爪牙と頼み給ひたる寵臣にて若年よ
り御馬先にれぬて數度の武功あり世人著しく之を知れり越前加賀の一揆退治の後信長公柴田勝家
を越前の守護とし加州尾山城には佐久間玄蕃允盛政同國御幸塚に德山五兵衛大聖寺に拜郷五左衛
門越前丸岡に柴田伊賀守勝豐同國勝山に柴田三左衛門勝成東郷に安井左近家清を据へ置かる能州
は長連龍温井三宅を討亡し越後へ奔走しければ前田又左衛門尉利家に能州一國の政を執行はせ尚
ほ又菅屋九右衛門長頼福富平左衛門行清兩人を指添へらる斯て利家は飯山に居城し菅屋は七尾城
に住し福富は富本に居て國政を翼けゝる
又た一揆に信長公越前朝倉義景を攻亡し其後殘る一揆の徒を攻給へば討死するあり或は降參す

るもあり城を明て落行もあり悉く信長の御手に入り夫より加州能美江沼兩郡を治めんとて將卒を指向けらる大正持の城御幸塚鵜川佛が原三谷の城鍋谷能美仙臺赤井福岡福島の道場坊主悉く歸服し御幸塚に德山五兵衛父子を置き大正持に別喜右近を入れ置き能美江沼兩郡を給はる越前侍の中溝口大炊之助と小黑西光寺は降人にて別木が與力とせらる九月二日に北の庄へ歸陣あり越前の内大野郡三歩二を金森五郎八三歩一を原彦次郎に賜はる府中拾万石を前田利家不破彦三佐々内藏助三人に賜はる又敦賀郡を武藤宗右衛門に殘る所は柴田修理亮勝家に賜はり府中拾万石は三人の大將に割賦せらる又前田御一家の面々前田五郎兵衛同右近高島孫十郎にて各千石を給せらる其外奥村助右衛門村井又兵衛片山内膳笹原掛六岡島喜六郎北村左内青山佐渡近藤善右衛門富田與六郎等皆々賞賜あり

斯て利家越前府中より能州へ移られしに遊佐美作守舍弟伊丹孫三郎幷に其長臣三人上杉景勝に志ざしを通じ能州を討取んと謀けるよし聞へしかば信長菅屋九右衛門尉長賴に命じ天正九年六月廿七日七尾越中にて遊左伊丹幷に其臣三人に切腹を命せられける同七月六日越中木船の城主石黑左近幷に家老石黑與右衛門伊藤治右衛門水收采女以下三拾弐人信長の召によつて上る此者共も上杉に一味の聞へあり依て佐和山の城に於て切腹せしむることゝなり惟任五郎左衛門長秀命じて其用意せしが石黑左近江州長濱まで至り其模樣を察し佐和山へ至るにさまゝ難澁しければ長秀士卒を長濱へ遣はし石黑が民家に宿し居けるを急に押寄せ取圍んで左近を始め十五人討取けり又た越中の住人寺崎民部左衛門同喜六郎父子も先月より佐和山へ召れ惟任に預け置れけるが是も同十七日切腹に及びける偖て能州は前田氏の善政にて大に治まり菅屋九右衛門長賴福富平左衛門行清能州より歸國す夫より前田氏七尾城に移住し時々放鷹して民の飢寒を問ひ德を以て撫育し給ひけれは民大に悅び懷き從はざるはなかりけり其頃或人利家に告げゝるは近年ふしぎの道人あり七尾の城下に來り住しよく天地に騰りて人の諸願を叶へ吉凶榮枯を占ふに其應神の如し妻子もなく其生所其齡も知る人なく國中之を信仰し種々の物を贈りけるも今は衣食貨財に飽き滿ち候といへり利家聞召し其者を出召し尋ね問せ給ふことあり熟ら其容貌を見て異言を察し給ひ是れ衆を惑はす國賊なりとて死刑に行はれける是れ眞の道人にあらず利家の明察に違はず耶蘇宗門の徒なりとかや

○佐々内藏介成政越中を領する事

佐々成政は尾張國春日井郡平の城主なりしが信長に仕へ忠勤あり次第に大身となれり然るに越中の守護神保安藝守長治は世々富山城に居住し近年織田家に歸降し信長の妹聟として恩寵淺からず佐々成政を越中へ遣はされし時新川郡松倉城に上杉景勝の將河田豐前守住せしが荒川より東は皆越後へ從ひ動もすれば富山の城を乘取らんとす信長賢慮あり越後の謙信武畧天下に超絶し景勝の弓矢其風儀あり殊に謙信の時より物馴たる將士多し是れ實に大敵といふべし然れば富山は大事の個所なれば神保のみにては覺束なし武功の將一人を撰び越中へ下し長治と心を合て守護すべしと

なり元來成政は神保の縁者たり旁以て介添とし來れり是れ偏に信長の深慮ある事なり能州へ前田公越中へ成政を遣はされ悉く二ヶ國の敵を退治して後越後を亡さんとの計畧とぞ聞へし越前北の庄には柴田勝家在城するも越後討伐の先鋒惣旗大將の圖りなり斯て成政越中に下着して射水郡守山に在城し屢は富山城に來り長治に會し國政を相談せり此節荒川より東は越後方押領し夫より西は神保が領なれども從來長治弱將もゑ遠所にあり地侍等は下知に從はず一郷を領して富山へ出仕せず成政殘らず其者共を召寄せ各々血判を以て君臣の誓約をなさしむ若し從はざる者あれは速に人數を遣はし殺伐せり此故に威風國中に遍く忽ち心の儘に平治し神保が侍等も守山に來りて下知を承り君臣の約をなす者多し

○馳川の事

富城より東一里餘にして常願寺川あり源は立山稱名瀧より流れて遠く北海に入る馳川は其支流なり天正年中霖雨打續き洪水氾濫して富山城中水深きこと數丈家屋漂流人馬溺死其數を知らず夜半に水漸く落て復た平土となる神保安藝守之を愁ひ數千の人夫を率ゐて馬瀬口に至り土石を擔ばせ堤防を築て水害を避く然るに又た一兩年を經て霖雨に涼水漲り築きし堤の間より水溜りて横流一支の川となり直ちに富山城下に溢れ入る長治大に驚き千丈の堤も蟻穴より崩るゝとは此事なるべしと急ぎて修理を加へんと人夫を催ふしける時に成政我も行き見んとて共に馬に跨り彼所に至り考ふるに是れ幸ひなり其儘に川とし原野を辟らき稻を此水にて養はゞ民の餘潤とならんと云ひ長治も尤と同せり時に此川のほとりに小き祠を造り河伯を祀り神保佐々共に民の爲に水害を避け禾稼成熟を祈りける此堤馳の巣より水漏りて川となりたるゆゑ馳川と稱すといへり

○河田長親小井手城を攻むる事

天正九年二月信長帝都に於て馬揃ひあるべしとて諸國の大名を召集らる越中の神保安藝守長治佐々内藏介成政越前の柴田修理亮勝家同伊賀守勝豐同三左衛門勝成不破彦三金森五郎八長近原彦次郎能州の前田又左衛門尉利家等北國より上洛ありしかは其隙を伺ひ加州一向宗一揆の殘黨密かに越中松倉の河田豐前守に謀り浩る時兵を發し加賀越中を乘取給はんやといふ豐前守大によろこび越後へも告げ自ら人數を卒し城より打て出で同郡小井手城を攻め動かす加州も豐前守と牒し合けれは柴田が將毛利九郎兵衛が府廳峠の要害を一城等攻寄り終に陷しけれは佐久間盛政此よしを聞き尾山城より馳出で即時に府廳を取返し此旨を安土に注進す信長聞召し大に驚き給ひ柴田前田佐々以下の大將は御暇給はり各々還夜となく馳下る河田は成政の後詰として歸國すと聞き小井手の城の國を解き松倉へ人數を引入ける景勝も大軍を帥ひて越中に來り天神山大岩野に守せしが是も早く人數を引揚げ越後へ歸れり成政歸着すといへども最早敵退散しけれは守山へ引取り此よし安土へ使を以て注進せり

○成政安住城を修繕する事

佐々成政越中の守護となりけれは神保長治は守山城に移り成政は富山城に移れり是に於て長治威

勢衰へ一族郎等成政の幕下となる者多し佐々附屬の諸士は勿論衆民先代神保より勝れたる主君なりとて尊敬異にして泰平を唱ふ成政諸臣を集て云ひるは今は海内信長の武威に歸すといへども我隣國上杉景勝猶り從はず彼れ良將にして殊に謙信以來武功の士多く大敵といふべし今は松倉に河田長親あり油斷すべきにあらず我此城の縄張を改め修理を加へんと思ふと云へは諸臣尤と同じける成政自ら縄張し壘を堅ふし堀を深ふし塀櫓等を完修す此城西北は神通川を堅固とし又た東舳川を城下へ落入けれは三方大川にして南一方は平地二三里を隔て高山茂林あり通路皆な大川に傍ひ其間縦横田畑限りなげれは國富饒にして縦令日本國中の兵を盡し十年廿年攻むるとも堅固なる金城となれり別して東の方舳川は敵地に向ひたる所なれはとて高く石壁を築き塀をかけ矢倉を數箇所に立てたり

○荒川合戰の事

安住城の修理晝夜となく急ぎし程に天正九年九月頃は過半に出來せり然れども侍屋舗商賣の居所なし侍は城の内外所々に小屋を建て幕を張て居住し町人は營圍荒張りて商賣を營む然るに同年十月下旬松倉の河田長親に新川郡の郷士等加はりて貳千五百餘未明に常願寺川を渉りて荒川邊を放火す佐々成政之を聞て大に驚き急ぎ陣觸れして馳出んとせしに幕下にありし寺崎平之助小島甚助兄弟物具堅め速に城に登り成政に向て申けるは敵荒川まで足長ふ働き出でたるこそ心得ねいかさま是は敵の計策こそあらん先々城を堅められ戒め備へて後御出馬あるべし我等は敵の不意に後ろより切崩すべしと云ひければ成政聞て其言に從ひ城中に人數を籠め城戸を閉て出入を監察せしめ自ら人數三千餘を引率し荒川へ馳向へり已に尻垂坂に備へを立て河田も備を押出し互に鉄炮を放ち鬨を揚げて進みける成政近習に鎮西九郎といふ者あり尾州士民の子なりしが强弓を兎き射藝に達しければ成政侍に取立て彼が射術古の鎮西八郎に優れりとて鎮西九郎と呼ばれ常に成政の馬の側を離れざりしが例の張弓にてさしつめ曳きつめ射るほどにあだ矢は一つもなかりけり先に進む武者三騎打落し其外痛手を蒙るもの數十騎なれは備へいろめき立ちたるを成政見て能き圖なりと聲を揚げ自身太刀を拔き翳し眞先に進む武者壹人切て落す平塚七兵衛山本五兵衛之を見て大將のつたなき御働きかなと云ひ前に立塞がり相戰ふ河田が勢大將成政と見ければ我討取らんと馳向ふ平塚山本火花を散らし戰ひ竟に討死せり佐々方之を見て口惜き次第ぞと入り乱て戰ひける浩る折しも黒崎城に在ける丹羽權平敵荒川へ打出ると聞き手勢五百餘を率し馳來て敵の右横合より突入ける寺崎牛之助小島甚助逼兵六百を從へ敵の後備へ廻て突懸れる程になしかは以て怵ふべき河田が勢前後の敵に當惑して備を立かねたるを佐々勢勇みすゝんで戰へり崩立て奔走するを追懸け追詰め討ければ敗兵常願寺川に行懸り途方を失ひ淵に飛入り或は早瀬に馬を乘入れ馬も人も離れ〳〵になりて溺れ死する者數を知らず豊前守も命から〳〵松倉城へ引入ける成政川岸にて追止め歸馬したり偖は此度豊前守か働き不審なりければ種々吟味しけるに此節城壘及び城下の家々普請最中なれば加能よりも工匠又た人夫等多く入込みありしが其うちより疑はしき者百人ばかり召捕

り嚴敗穿鑿ありけるに越後方の侍或は足輕にてありしとなり悉く首を刎ね常願寺川原に竹に其首を懸けて暴せり是は豐前守の計畧にて工匠人夫に似せて城中へ入れ置き長親働出る時成政城を空ふして打て出なは其虛に應じ城に火を縱ち後ろの火の手を見は成政驚き周章せん時に前後より挾んで打ては必定敗軍し城をも乘取らんとかねて牒し合せしとなり然るを寺島小島其機を察し成政に告げて城中の堅固嚴密にせしは智といふべし讒信越中に切入りし時寺島兄弟所々にて戰ひけるが讒信動もすれは手勢多く討取られ敵ながらも賞美して越中にも强き兄弟の者ありと嘱せり

○越中方織田方諸將出陣の事

斯て成政河田を松倉へ追込めたるよし信長へ注進しけれは信長公御感賞ありて此後油斷あるべからず河田此度の敗軍口惜しく思ひ越後勢を引出し再び働出べきなり成政一箇の武勇に誇りて麁忽の軍心もとなし若し景勝打て出なは諸將へ急を告げ各々出馬を待ち謀戰あるべし戰利あらは直ちに越後へ打入るべし其時我も出馬して越後を亡さんとなり又た能加越前の諸將へも越後勢越中へ働出は速に出勢ありて成政に力を戮すべきとなり然るに其年も暮て明れは天正十年春も過ぎ夏の來て五月上旬河田は去冬の敗軍を遺恨とし春日山へ云遣りけるは君出馬あらば某先鋒して富山城を陷さんこと掌の中にありと景勝其言に從ひ出馬あらんと先づ諸將を松倉魚津等へ遣はしける然るに魚津城より佐々の領分へ日々に人數を出しこれ田をなし民屋を放火す越中境の城々より討て出防ぐといへども大勢なれば中々叶ひがたく成政甞て信長の下知あれは急ぎ安土へ飛脚を遣はし又た近國の大將を催促しけれは柴田修理亮勝家前田又左衛門尉利家不破彦三原隱岐守佐久間玄蕃允金森五郎八齋藤新五都合其勢壹萬餘時日を移さず馳來る皆富山の城に集會し軍の評議して備を押出す先づ一番に神保安藏守氏治椎名孫六郎菊地十六郎此手の大將は佐々内藏助成政常願寺川を渉り濱邊を通り滑川を過ぎて備を立て又た一手は齋藤新五金森五郎八原隱岐守を一の先とし二の先は前田又左衛門尉佐久間玄蕃允不破彦三なり柴田勝家は信長の長臣なれは總大將として其次に備を押し其勢壹萬餘魚津を指て打向ふ信長又た兼て關東瀧川左近將監一益（上野信州二郡の主）森勝藏長（川中島四郡の主）牒し合ひ景勝越中へ出馬あらは各打て出で春日山を攻ひべしとなり

○越後勢魚津へ籠城し織田方圍攻の事

天正十年四月八日魚津城諸將竹股三河守朝綱山本寺松藏孝長（一に伊豫爲帶幼名富千代丸）安部右衛門尉仲盛吉江喜四郎後長（後長島城主）口采石女正實秀中條越前守景資（一に築後入勢政と稱後築地城主）寺島六藏若林九郎右衛門勝磋（一に吉長門宗夢）沼捕部介藏田小次郎（一に半人）芦川縮殿助鈴木藤丸（一に新介）吉江常陸入道（藏後二木主是と稱後十三將といふ）以下三千餘人籠ると云へり上方勢松倉魚津兩城を攻ひれども越後勢少も疎なず同十日の夜吉江喜四郎大將にて夜討す寄手敗走し柴田左近を吉江が郎等長島宮内打取り其外首弐百餘取て早く引取ければ柴田佐々も攻陷みてゞ見ゐ此上は敵の氣を屈すべしと遠卷にして戰はざりけり時に又た城兵出張して一戰を待又た引入て夜働し伏せ奸ざりの術を以て敵を打つこと數度なれども目に餘る多勢にて寄手事ともせず敵の氣を疲らして後ち總攻にせんと向城を築きける景勝は魚津越難儀の由を聞て上條弥五郎義

森赤田の齋藤下野守河田軍兵衛宮崎城主石動山城守を指向け魚津十三將に飛札を遣はせり十三將之を見て悅び勇み大將の出馬を待てり寄手は景勝後結のよしを聞き竹束を用意し備へ薄き方には刀簇虎落を結び柵をふり堅固にしければ城兵出べきやうなく寄手も急に攻めず唯だ食攻にせしが兩城の兵四千に足らず寄手壹萬餘の大勢なり係る所に旗本の先勢上條石動等同十六日魚津へ着陣す織田方松倉を強く攻めざるは魚津城を落し夫より越後へ亂入せんとのことなり松倉城の河田豐前守思慮しけるは我當城にうか〳〵と居て益なし後結の越後勢に加つて一戰し切破て城に馳入るべしと城より打て出で押の勢を切破り先づ上條が備へ馳着き上條を大將とし八備敵陣へ押寄せたり上方勢十三段に備へ德山五兵衛則秀物馴れたる勇士なれば敵は小勢ぞ引包で打とれ越後勢は烈しきぞ中を破らるゝな鍵の鋒先を揃へ乘込まは突落し一足も引なと下知し縱横に乘廻る塗端河田軍兵衛眞先に進み五六騎切て落し味方を靡き敵の中に乘入る河田豐前守は右の先に備へしが敵の先鋒佐久間玄蕃允が先手折井彌五郎が備を駈崩し二身に備へし玄蕃が備をも駈散らし逃るを見捨て前田公の陣へ疊と乘入り駈破り手勢を纏ふて馳拔け南の虎口より魚津城へ馳入れは吉江織部を始め皆悅ぶこと限りなしといふ

○景勝後援の事

斯て越後籠城の諸將屢々戰ひけれども敵は大勢にて難儀し越後へ飛札を以て景勝の後詰を乞へり依て四月廿日景勝三千餘人を率し春日山を打立ち名立浦本鬼伏へ懸り親しらずを妻手に見て宮崎の上の山路を過ぎ越中に打入り同廿三日魚津の邊吉田に着馬し天神山へ登り先陣は布施川を前に當て大岩野に人數をつゞけ日の丸に昆字の旗を立て織田方と日々合戰し柴田勝家景勝の後詰侮りがたしと思ひ總陣の前に土居堀柵を結ひ栖樓をあけ堅固に戒め備へ越後方攻むべきやうぞなかりけり同廿九日景勝逞兵五拾餘多く足輕を從へ大斥候出にで敵陣近く寄りて鉄炮しげく打懸け敵の樣を伺へども城戸を閉て出す斯て次第に暑天となり織田方の將士四百騎雜兵二千計景勝陣のあたり布施川へ馬を入れ足を冷やしけるか景勝栖樓に上り見居けるに景勝方蓼沼日向守落合清右衛門三俣九兵衛中村但馬守以下三拾貳騎轡を並べ城戸を開らき織田勢の中へ乘込み三人切て墜し雜兵を蹴轉ろはせ上方勢崩れ逃げたり成政三蓋笠の小集を曳て逃げ盛政は馬より下り片鎌の鎗を撚返し合す島津左京馬にて蹴倒す拜郷治太夫盛政臣切拂て盛政を引退く其後景勝方織田方の土居際まで働くといへども土居柵堅固にして城のごとし景勝は多勢に無勢手段盡きたるまゝに日を送れり同五月十三日倉田佐五之允長尾加賀守を敵陣に遣はし矢文を射させけり其文に景勝後詰すれども土居を築き幾重にも柵を架し若輩の景勝を畏るゝに似たり尋常に出で一戰せらるべし北國弓矢の風儀謙信時代に知り給ふまと一手際見せ申べし夫も叶はずは魚津城を攻め景勝相應の働きせんとなり寄手より我々籠城が得手なり軍の謀術は互に勝手次第と返事して取合す兩便は猶ほ敵陣近く乘り寄せ景勝より添へられたる二十五騎と思ふまゝに敵を積る敵方より弓鉄炮にて打射けれども驚かず然るに倉田が馬鉄炮にて鞦の上を打拔かれ倉田墜ちけれは若者

共之を討んとて城戸を啓き突出る倉田頓て起上り鎗を取て突き掛る上杉方之を見て佐五之允討すなと馬を馳せ入り十四五人乗倒し六七人討取たり織田方も味方討すなとて二拾騎ばかり突出て追つ返しつ戰て城戸の内に追入追出し數度迫合たり上杉方本松外記一番に門内に切入佐々が郎等井筒隼人と戰ひしが隼人綿噛の端れに切込れ倒るゝ所を本松首を掻んとするを隼人が弟刑部亟無二無三に飛込て外記を搔倒す名山太郎兵衛續て刑部亟を討取り本松が印を擧て刑部亟が首に持添へ引返す斯る場合に上杉方先手の足輕大將丸田伊豆守五拾人を二手に分け敵の妻手へ詰寄せたり續て下條采女佐口傳兵衛しづまり返つて備へ越後勢氣力を得て敵を門内へ追込めは織田方は付入にせられしと門打堅めて出されは敵勢も引取けり同五月廿五日早朝に景勝甘粕備後守清長に百騎を殘し元來小勢なる謀を以て陣々山々に旗多く立てゝ多勢と覩せ自らは敵陣に向ひ先陣は直江二の身は大將景勝なり柴田之を見て一騎も出すべからすと制しけれども聞き入れず佐々德山士卒に下知して討出たり佐久間前田公柴田伊賀守佐々討たすな續けやと段々突出る直江が相備へ本多彌兵衛一番に鎗を入れ續て諸勢突入りしかはさしも猛き佐々も揉立られ城戸より内に逃入れは諸勢悉く引入り門を閉て鉄炮しげく打出す直江采幣を揮ひ外曲輪を乘破れと下知しけれは直江が郎等石田監物一番に乘込に諸卒れくれしと乘入り遂に外搆を乘破る此時魚津の城兵相圖をうけて攻戰へしも織田方陣營堅固にして城の如く打入べきやうなかりけり大將景勝直江へ軍使を遣はし二の搆を捨籠本にて踏破んと直江が備を胴勢とし采幣を把て進みたり織田方も柔を破られしと防ぎ戰ふ處に生駒右馬助一番乘は我なりと乘入らんとせしが塀下より鎗にて突墮さんとせり去れは其鎗をしかと握り手繰にして乘込むを足輕大將鄕金七續て士卒をすゝめ乘込たり此時織田勢小荷駄を付け已に逃支度しけるとかや斯て双方手痛く戰ふ處に佐々が郎等蒲田主税三十騎組頭夏目宮内に討れ其外宇野中村倉木笠岡伊丹右京など擧ある者多く討死し上杉方にも武勇の侍大將齋藤下野守足輕大將木鄕金七等死討す越後方二の搆まで乘り入りしも小勢にて戰ひ疲れ手負討死多し其上城兵切て出で難たく景勝敵の首七百五十三級堀際に懸け並らべ勝鬨を揚て二の搆に火を放ち煙の紛れに引揚て天神山へぞ歸ける景勝敵の備堅固にして追拂はぬことを殘念なりといへり弱き振舞ながらも柴田が豫めの備ゆる景勝深く入ること叶はず越後方にて此度の功は直江が采幣なりとて景勝當座の賞として長光の太刀會津黑といふ名馬に感狀を添へて給はる其外生駒夏目以下へも感狀あり夫より景勝天神山へ軍を引取けり浩る所に信州海津の城主森勝藏はかねて信長公より示しなれば此隙を伺ひ勢を發し水内郡大倉の城を押へ又九飯山野尻を押さへ關山を踰へ二本松邊まで乱妨し五百川縫殿介が城をせむ縫殿介は魚津に在て留守居兵少ければ即時に城落て死亡する者多し依て春日山より羽檄を飛せて景勝へ告ぐ景勝大に驚き狼狽して越後へ歸れり加能越の諸將追討に首二百餘級打取り長濱邊へ押詰て返せ戻せと呼びけれは越後勢引返しては突崩し繰引にしけれは寄手も追止て引返しける

○魚津十三將自殺の事

天正十年五月廿六日夜景勝諸將と評議し岩井源藏廣瀨八左衛門に自筆の書翰を持たせ魚津城へ申遣はしけるは上方勢搦手として信濃口より越後へ寄せるに付此地を拂て引取り魚津城も糧盡き難儀なれは寄手へ扱ひを入れ城を渡し越後へ著むべし聊も武道の落度なるべからすと同廿七日大岩野を陣拂し越後へ歸陣す魚津城中には諸將景勝の書翰を披見し諸將評議しけるは主命なれども敵に降らんこと長く弓箭の耻なりと敵へは城を明渡す支度に見せ六月三日未明に竹股朝綱廣間に燭を照らし諸將に向て云ひけるは城中糧絶矢玉盡く是れ皆な運命の極る所なり景勝我等が命を助んがため降るべしとの書を給はる然りといへども朝綱不肖ながら上杉の股肱七手組の其一なり生て耻を得んよりは死て義を全ふせんこと武士の道なりといひ諸將皆尤と同じ討死と覺悟せり朝綱又た云く落城の時自害し城に火を懸け骸を燒亡し誰ともわかたずして死を犬馬に同するも士の本意にあらず必ず自害の後城に火を懸くべからずと夫より討て出で思ふまゝに戰ひ遂に本丸へ引入り大將物頭十三人木札に各の名を書付け小刀にて耳を穿ち札を結ひ付け一同に並居て切腹せり落城の後之を見て皆感涙を流しけるとなり斯る所へ六月二日京都本能寺にて信長明智日向守光秀が乱により生害のよしを傳へ四日に飛脚魚津に來る柴田を始め寄手の諸將之を聞き大に仰天し上を下へと騷動し我先にと魚津を引取けりる

北國太平記に上方勢魚津城へ使を遣はし森勝藏越後へ乱入に付今朝上杉殿越後へ歸馬あり各も詮なき籠城あらんよりは明渡し春日山への後結こそ肝要ならんといひ遣りければ城中評議區々たり河田豐前守は當城を抱へたりとも春日山落城せは益なし城を明渡し後結せんは本意なれども若し敵僞り引出し闇々と討たれなは骸の上の耻辱なり當城を枕とし死なんこと本意ならんと云ひ吉江潔しとて之に諾しけれは拾三人皆同心す又た柴田佐々より城中雜人に至るまで命に子細候はじ心もとなく候はゝ人質を遣はすべしとて再三云ひ遣りけれは城兵等も云ふ當城を開き敵若し僞らは大將の馬前にて打死せんこと忠なるべしとて已に開城に定まれり織田方より武者奉行にて大剛の士なる勝家の從弟柴田入道專齋及び成政の甥佐々新左衛門の兩人を質とす越後方之を受取り吉江河田始め悉く三の曲輪へつぼみ入り本丸を佐々に渡しける成政以へらく圖に敵をたはかり本城を請取るや否とて鋭炮を打懸け內外より攻め立けり吉江織部河田豐前守魚津松倉の兩城代其外拾三人の加勢の者大に怒り本丸に攻め入りて戰ひ敵多く討果たし柴田佐々兩人の人質を突殺し各々並居て腹をぞ切にけり士卒之を見て打死するもあり切扳て越後へ歸るもあり織田の手負死人七百餘に及び魚津城を落し直に越後へ乱入せんとぞ勇みける時たまゝ信長の横死を聞き寄手は魚津を捨て富山へ引入ると云ふ景勝より有澤氏への書翰をみるに天正十年六月廿五日又た同九月四日の書に魚津城堅固に持てとあり同十一年卯月三日景勝より有澤圖書への書牘に魚津の儀殘念とあり彼是考るに松倉城は天正十年六月二日に落ち魚津城は翌十一年春まで持堪へたると見も又た河田は天正十年五月廿四日病死とあれは十二將たらんが前田創業記には吉江織部あり十三將なり一書に松倉十三將と書きたれども松倉には河田あり十三

將は魚津の籠城なり

○土肥美作政繁の事

土肥は坂東八平氏の類葉にて其先祖より四五代新川郡弓庄に居城し越後に附屬す土肥家記に天正年中土肥政繁安住城外町へ夜働し放火して佐々の砦大田新城に取懸り悉く討取るといへり又た同家記天正十年八月八日土肥美作守政繁が居城へ佐々成政取懸り合戰藤田丹後佐々方の白倉豐之丞と鎗を合せ佐々土肥の人質土肥平介を城の向に磔にす（美作守ニ男十三歳城中之を見て切て出其死骸を取り城へ入り同十一年四月五日成政再び城へ取懸り附城を四ヶ所に築き手痛く攻めけれは城中より討て出て大に戰ふ同五月五日夜成政又た城下に寄けれは城中よりも突て出で寄手を追散らし成政の陣城の邊まで追詰めて引取れり此時土肥の將藤田丹後よき首を取り柝屋半右衛門佐々新左衛門（成政甥）の組田代與五郎と鎗を合せ有澤五郎二郎は手を負ひ翌日死せり斯くて六月まで城を持固めたりしに成政四方に鹿垣を結び城兵を屈す七月に及び景勝後詰なき斷りありけれは佐々と和睦し有澤采女を質とす土肥家記天正年中越後より土肥美作守越中境の城を攻め土居の臣有澤采女柝屋半右衛門功ありよき首を取り成政は境へ寄すると聞て益木中務丞堀與八郎を加勢として寄手手強くせむるゆゑ城端に敗れ堀一重になり果て三百餘の人數一夜に落行き上下廿七人になり五日持固ひとしへども成政後詰なきゆゑ終に和睦し人質を出すといふ又た北國太平記に天正十二年十月廿三日上杉景勝藤田能登守を先陣とし八千餘春日山を發し長濱有間川を過て名立浦本へ至り碓水（齊藤郡より同

り左の山の手へつき往還の切所を妻手に見て押通り同廿六日巳の刻佐々が幕下益木中務丞が宮崎城へ押寄せ景勝は拾丁ばかり北の方境川を前とし備を立て先鋒藤田が備にて東の山の檀を押させ河田攝津守が備を以て藤田が陣の後ろ宮崎の陣の山を廻り南部尾井庄まで放火す宮崎城には丹羽權平八百餘の卒を從へ河田が勢を追懸け河田は七百の人數五百を伏せ喰留られたる躰にしけれは城兵前後も辨へず戰ふ所に伏起て城兵の後へ廻り丹羽に切て懸る流石物馴たる將にて踏怺へ勢を南方へ分て戰ふ處に河田采幣を揮て馳廻り丹羽と戰ひ遂に丹羽を突をとせは將討れて士卒崩る河田敗卒に目をかけず宮崎城へ附入り二の曲輪まで乘込み藤田が備へより此戰ひ見へざるゆゑ新津丹後守を南の山の尾崎へ登せて見せけるに河田二の曲輪まで敵を追ひ乘込と見へけれは新津急ぎ其よしを告げ河田に先せられ安からぬ本丸を乘らんと云ひけれは河田が備の檢使大石源之丞は大將に注進せんとて二里餘敵の中を馳通り海邊に沿ふて廿餘町を行き景勝に告げ河田が卒手負多く他の備を入替らるべし明早旦本丸を乘取らんとて卽ち藤田が備を入替たり然るに藤田信吉は益木が聟なるゆゑ扱ひを入て其夜城を請取り益木が一命を助けて送り遣はせり翌廿七日藤田安田泉澤三備黑部川角川早着川を渡り佐々の居城富山より四里滑川まで推詰め放火し其跡に陣を取り同廿九日宮崎に引返せり成政敵しがたく富山に引籠り壹人も出さず其餘の諸將已に居城に引入り頭を出す者なし景勝も人數を從へ越後へ歸陣せり

土肥蔡城の後臣有澤と共に奥州へ行き最上家に附屬せしが後ち最上吉光土居を殺し有澤退き去

て能州へ行き長連龍に便り連龍の推舉にて加州へ仕ふ後ち有澤永貞兵學に達し軍師となる永貞地理の事は越中の遠江道印に傳授すといへり遠近の居し所は今の普泉寺境内南の方なり屋敷跡に大なる榎ありしが廿年前に伐り採れり遠近は名高き人にて初は藤井半知ともいへり

○白屋秋貞死亡の事

飛州三木休雲が旗下白屋筑前守秋貞津毛城より戸川城に移り（津尾より後倉に移るとも云ふ）越後方村田修理亮と日夜戰ふ飛驒軍配に天正四年三月白屋越後へ降る越中攻の時謙信の前驅にて又た飛州へ攻入る然るに天正九年又た佐々に降る越後將河田勢に攻め落され飛州へ逃げんとして西猪谷にて村田修理亮に追はれ鐵炮に中りて死す秋貞六十二歳なり嫡子監物二男三平敗走其在所を知らず

一說に白屋亡びて子息兩人野積谷布谷村渡部左五兵衛に寄食す白屋の附屬有澤郷士高安次郎右衛門中川左兵衛も渡邊は妻方やゑ此所に數年蟄居す其山の嶺に居館の跡今にあり佐々方より白屋の二子を始め搜索せしかば岩窟に入り身を隱くし春秋を送るといふ

○城生落城齋藤一鶴奔走の事

齋藤次郎左衛門一鶴其伯父孫二郎利忠は六波羅齋藤太郎左衛門俊行後裔にして井田村に居城す天文廿一年越後謙信幕下射水郡願海寺の城主寺崎民部左衛門と寺家村（一に井住村）天神森にて戰ひ終に打負け山中に隱れ嫡子孫三郎二男五郎二良利憲家老濱野賴母と共に打死せり小森某は利忠を殺して降參すといへども主を討たる者とて生捕斬害せり（所を今に小森といふ）此時落城利忠の弟小市郎利常城生城に移

る齋藤長門守常丹是なり其子次郎左衛門初め信利といふ天正十年信長横死の後越後へ屬す天正十一年飛州白屋筑前守秋貞越中へ切入り岩木といふ所に距堡をなし齋藤を攻む齋藤越後に援けを乞ふよつて越後より援兵來て白屋を飛州へ追返す其後增山の神保安藝守氏春戸川の佐々與左衛門成之共に齋藤を攻め一鶴無勢なれは八尾聞名寺に救ひを求む聞名寺力を戮せけれは神保佐々先づ聞名寺を攻んと石戸川原に備を立て夜に入り藁人形を作り人數を少々加へ篝を燒かせ密かに軍兵を福島高熊葛坂へ廻し桐山峠より聞名寺を襲ふ八尾勢は石戸村一方を堅く防ぎ守ける所に不意を打たれ一戰にも及はす敗走し城生に至り齋藤と一集につぼみ防ぎ戰ふ此城堅固にして急に落べきとも見へざれば神保佐々圍を解き軍を返へす後又神保佐々兩旗にて佐々は井栗谷に距堡をなし葛原山より攻め神保は天狗平より寄せ圍みて攻けれは城中より和を乞ふ神保は汝が父常丹に怨みあり其首を討て出さは圍を解くべしと云ひしに齋藤の臣齋藤喜左衛門豐島茂手木即ち常丹が首を討て出しけれども許さず終に落城せり齋藤は本國常陸へ落行き其跡へ佐々與左衛門住せり

上總の万喜城主土岐賴春は齋藤の氏族なり故に常陸へ行ける者歟織田軍記天正六年齋藤新五越中へ下る時一鶴も上方へ屬せしと見ゆ是より前は越後幕下なり又た古國府勝興寺家譜に豐島新九郎は朝倉大膳太夫義景女松姫勝興寺へ入輿の時越前よりの勝士なりと云ひ北國七國志に享祿五年三月下旬加州三山の大坊主出口の齋藤安宅の今井藤右衛門越前より能登越中へ落行と云へ

[illegible]藤居た[illegible]城一藤右衛門丸といふあり又た朝倉の下に同じ頃前波藤右衛門景當といふ

人あり同苗彌次右衛門と同じく打死す其子前波藤右衛門越前一向宗一揆に追はれ島田將監伊筒と同じく越中へ來り城生の齋藤に寄食す城生落城の後楡原へ來住す其後を岩稻村藤右衛門といふ又た齊藤家譜に次郎左衛門天正十二八月十九日卒す同廿五日城生落城其子齊藤次官榮顯楡原村鄕士となる其二子格兵衛宗左衛門あり宗左衛門道顯に至て富山へ來り堀才之助婿となり處士を以て終る其子下て町人となり新保屋宗助といふ又た農民となり楡原村壘兵衛といへり又た八尾聞名寺齋藤より寄進狀永錄六年三月廿四日の日付にて赤曾布丹右衛門鎭秀豐島新九郎正家風間忠左衛門宗次連名の書花押あり皆な齋藤の臣なり豐島茂手木は新九郎後なり新九郎又た戸田宗兵衛とも稱す茂手木又た茂助ともあり其後は岩稻村八兵衛といへり又た天正六年村田を攻落し佐々與左衛門成之栂尾城より岩木に附城をなし齋藤を攻むといへども矢玉屆かず功なしといふ又た城生幕下杉政三郎右衛門岩木に居すともいふ誤なり城主齋藤と神保佐々數度取合の後杉政退散して其子孫岩木村に住し土民となる享保年中太兵衛といふ杉政の馬具を傳ふ杉政は杉江と同姓なるにや紋は丸の内に撫子にて黑田筑前矣の臣齊藤三郎右衛門は杉政の末孫といへり又た齊藤次郎左衛門持鎗とて柄七尺許あり城生西勝寺に傳ふ又た堂の格子戸も齊藤城門の戸なりといふ

○秀吉成政を疑ひ成政賀を出す事

天正十一年四月廿二日羽柴筑前守秀吉數万騎を率し越前府中に來り利家に對面し給ひて四海淸平の功業偏に利家の援けにあり宜しく賴入るよし宣ひて夫れより北の庄に押寄せ柴田修理亮勝家を攻め給ふ是に於て孫四郎利長士卒を從へ北の庄より一里東なる舟橋まで出張し嚴密に備へ守らせらる是は越中の佐々成政若北の庄の城へ後詰せば防戰せん爲めなり然るに同廿四日勝家自害し忽ち落城に及びしかば同廿六日秀吉加州に發向し金澤の城を取卷き給ふ城を守りし佐久間玄蕃允盛政が郎等樣々降を乞ひけるに秀吉許容し城兵等が命を助け頓て城を請取り給ふ是に於て越中の佐々成政へ使を以て申遣はされけるは此度柴田勝家自立し織田家へ弓曳候もゑ我等馳向ひて討滅せり成政近國に在て北の庄へ向はず剩へ勝家に一味の沙汰あり實事に於ては秀吉直に馬を馳て一戰に勝負を決すべしとありければ成政之を聞て幕下の諸將を召集め秀吉より申越の趣甚だ無禮なり我何ぞ彼猿冠者にをそれ從はん此上は秀吉の軍を引受け雌雄を決すべし各の了簡はいかゞと相談せり佐々平左衛門尉初め神保の臣なり守山城へ神保移轉の時富山に殘り佐々の臣となれり諸臣の上列にあり各の了簡も待たず申けるは當國御領たりしは昨今の事なれば政治いまだ全からず今な秀吉に敵對あらば金澤より行程十八里速に大軍を以て攻來らん且つ越後よりも其の弊に乘じ討て出なば爭でか防戰の術あらん唯だ此度は秀吉に從ひ時節を御待ちあるべしと諫めければ列座の諸將を始め皆な此儀然るべしと云ひ成政も尤と思ひ此上は平左衛門尉よきに計らへよとあり平左衛門尉急ぎ金澤に至り秀吉に申上げるは成政圖らざる御責言を蒙り恐入候且つ勝家に與みし申との御沙汰夢にもなき事なり其故は今度勝家が招きに應せず人數を出さゞるを以て明らかなり又た御加勢仕らざるは國を隔たるもゑに侯今般早